TV Bros.特別編集　TIGER & BUNNY公式総括ファンブック

Sum Up!!
TIGER & BUNNY

TOKYO NEWS MOOK

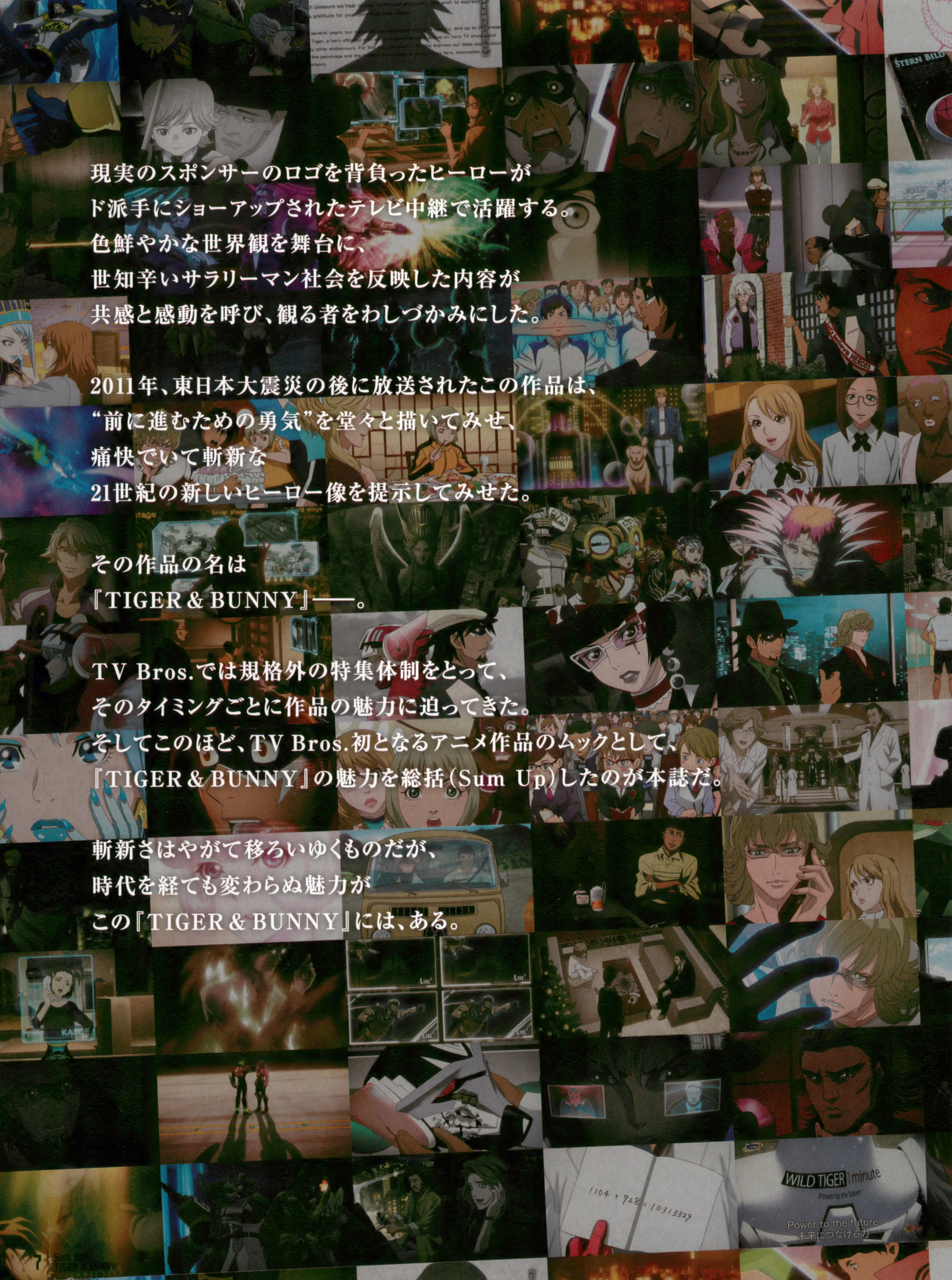
SUM UP

Not For Sa

masakazu katsura 2011

TV Bros.

TIGER & BUNNY



現実のスポンサーのロゴを背負ったヒーローが
ド派手にショーアップされたテレビ中継で活躍する。
色鮮やかな世界観を舞台に、
世知辛いサラリーマン社会を反映した内容が
共感と感動を呼び、観る者をわしづかみにした。

2011年、東日本大震災の後に放送されたこの作品は、
“前に進むための勇気”を堂々と描いてみせ、
痛快でいて斬新な
21世紀の新しいヒーロー像を提示してみせた。

その作品の名は
『TIGER & BUNNY』――。

TV Bros.では規格外の特集体制をとって、
そのタイミングごとに作品の魅力に迫ってきた。
そしてこのほど、TV Bros.初となるアニメ作品のムックとして、
『TIGER & BUNNY』の魅力を総括(Sum Up)したのが本誌だ。

斬新さはやがて移ろいゆくものだが、
時代を経ても変わらぬ魅力が
この『TIGER & BUNNY』には、ある。

SUM UP!! 『TIGER & BUNNY』×TV Bros.
HISTORY

T&Bの軌跡を年表でSUM UP!

2010年 11月24日
日本経済新聞朝刊にて、キャラクタープレイスメント協賛者募集の一面広告が掲載される。一般の人々に『TIGER & BUNNY』(以下、タイバニ)の存在が知られたのはこのとき。つまり、新アニメの放送スタート情報を〝広告募集という広告〟で掲載という第一報から異例づくしのアニメだった。

2011年 5月25日
テレビブロス2011年5月28日号で、桂正和描き下ろしによるタイバニの独占表紙&5ページ特集を掲載。なお、巻頭特集は震災の被害と実情をレポートした「リメンバー福島」。

2011年 6月
USTREAMの視聴数がうなぎのぼりとなり各所で話題に。

2011年 7月2日
TVシリーズは盛り上がりを見せながら2クール目へと突入。

2011年 9月17日
最終回上映イベントとして『TIGER & BUNNY ～ありがとう!そして、ありがとう!!～』開催。同時刻に日本各地の劇場(44館85スクリーン)で展開、2万3千人以上を動員した。史上初となる劇場内での生ツイート&鑑賞スタイルで話題となったツイッターコーナーも。

『タイバニ』のSNS関連記録
○最高同時視聴者数 7万7000人超え(2011年9月17日)
○ツイッターでのハッシュタグ使用頻度4ケ月連続1位(2011年6月～9月)

2012年 2月1日
NEXT PROJECT第3弾として舞台『TIGER & BUNNY THE LIVE』の制作を発表。主演の2人はTVシリーズと同じく虎徹役を平田広明、バーナビー役を森田成一が務めることで話題に。

2012年 7月18日
テレビブロス創刊25周年超特大号第2弾(2012年7月21日号)で、虎徹&バーナビーによるバースデー表紙&センターカラー特集を掲載。

2012年 8月1日
テレビブロス2012年8月4日号より3号連続でタイバニ連載を展開。3回にわたってヒーローを演じた8人へのアンケートインタビュー、米たにヨシトモ監督コラムなどを掲載。

2012年 8月24日～9月1日
舞台『TIGER & BUNNY THE LIVE』開催。

2012年 9月12日
テレビブロス2012年9月15日号で、

2012年 10月10日
テレビブロス2012年10月13日号 ピピクラブ内にてWORLD PREMIEREを掲載。

2012年 12月
テレビブロス タイバニ特別編集チームにてMOOK本プロジェクトを始動

2013年 4月27日
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』メインビジュアル発表&公開日が2014年2月8日に決定。

2013年 8月24日
『TIGER & BUNNY THE LIVE』スペシャル上映&トークショー開催

2013年 8月31日
『TIGER & BUNNY シナリオライターズトークショー&TVスペシャルセレクション』開催。

2013年 10月12日
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising- SUPER PRELUDE』開催。会場となった幕張メッセイベントホールには約6200人が集結。日本各地の85箇所の会場で開催されたライブビューイングでは1万2千人以上が来場。

the TV magazine of the future.
TV Bros.特別編集
TIGER & BUNNY公式総括ファンブック

SUM UP!! TIGER & BUNNY

CONTENTS

付録①
3・95 TV Bros.×TIGER & BUNNY スペシャルT&Bピンナップ

10 『TIGER & BUNNY』総括特集

12 『TIGER & BUNNY』HERO Interview 9+1
平田広明　森田成一　寿美菜子　楠大典
伊瀬茉莉也　津田健次郎　井上剛　岡本信彦
〈NEW HERO Interview〉中村悠一
〈ENEMY Interview〉遊佐浩二

34 『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』公開直前特集

38 『TIGER & BUNNY』STAFF Interview
監督／米たにヨシトモ
脚本・ストーリーディレクター／西田征史
キャラクター原案・ヒーローデザイン／桂正和

46 PLAY BACK!! 『TIGER & BUNNY』×TV Bros.
2011～2012『タイバニブロス』をオールプレイバック

68 MUSIC　スペシャルインタビュー
●UNIZON SQUARE GARDEN
●NOVELS

72 MUSIC
74 DVD
76 GOODS

78 ヒーローを支え続ける名脇役
アニエス・ジュベール／マリオ／斎藤さん／ベン・ジャクソン
SPコメント～甲斐田裕子　太田真一郎
岩崎ひろし　宝亀克寿

84 ビジネスパーソン最前線（番外編）
アレキサンダー・ロイズ氏　SPコメント 横島亘

86 サラリーマンパパの娘の子育てヒント
～鏑木・T・虎徹さん編～

88 その男、ユーリ・ペトロフ

付録②
90 遊ぼう!『TIGER & BUNNY』斎藤さん&ベン・ジャクソン名言福笑い 折紙サイクロン"名言（見切れ）"折り紙 ～手裏剣編～

2010年 12月10日
『TIGER & BUNNY』の情報が正式に解禁。と同時に公式ホームページ、公式ツイッターも開設された。

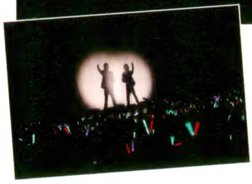
2011年 2月
テレビブロス編集部にてタイバニ特別編集チームを結成。総力特集の取材を開始する。

2011年 4月
テレビブロス　タイバニ関連取材を再開。4月から5月にかけてアニメの肝となる桂正和さん、西田征史さんらへ独占インタビュー取材を行う。

2011年 4月2日
『TIGER & BUNNY』テレビシリーズ放送スタート。

2011年 9月28日
テレビブロス2011年10月1日号で最終回イベントレポート&田村一彦P×松井千夏P対談掲載。

2011年 11月13日
『TIGER & BUNNY HERO AWARDS 2011』開催。トークショーやアーティストライブに加え、ワイルドタイガー、バーナビー・ブルックスJr.の等身大ヒーロースーツもお披露目。さらには劇場版2作品の制作をいきなり発表、ファンの度肝を抜いた。



5地区刷り分け表紙&『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』を多角的に考察した巻頭特集を掲載。

2012年 9月22日
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』公開。

舞浜アンフィシアターでは『劇場版TIGER & BUNNY -The Beginning- WORLD PREMIERE』を開催。ライブビューイングでは日本各地のみならず、香港、台北でも生中継された。

2014年 1月11日
テレビブロス特別編集TIGER & BUNNY公式総括ファンブック『Sum Up!!』発売。

2014年 1月29日
テレビブロス2014年2月1日号にて巻頭表紙&特集を掲載。

2014年 2月8日
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』公開。

& BUNNY

～プレイバックから『タイバニ』を総括～

ヒーローの敵は巨悪と、人気低迷によるリストラ!?

弱きを助け強きを挫く王道のヒーローものに、サラリーマンの世知辛さを融合させた〝サラリーマンヒーロー〟を描き、一躍話題作品となった『タイバニ』。これまでとは違う、まったく新しいヒーローの概念を生み出した作品として、テレビブロスでは放送開始前から注目してきた。

ヒーローというものが職業として存在し、彼らは犯人確保や人命救助などによるポイント…つまり会社員としての成果に支えられているという一風変わった世界ながら、妙に現実世界とリンクさせてしまうのが本作の魅力のひとつ。その一因は実在するスポンサーを背負うヒーローの物語だから。事件や災害の際ヒーローが活動する様子は、ショーアップされたテレビ番組として放送され、ヒーロー達は各々〝ポイントを上げること〟や〝スポンサーをアピールすること〟に奔走する。そんな中で、〝経営不振のための事業撤退〟、〝業務命令によりそりの合わない相手と組むことになる〟といった、リアル社会でも起こり得る要素により「他人事ではない」というこれまでの王道ヒーローものとはまったくの別視点…ある種の共鳴視点で観ることができる斬新な作品だといえる。

そして、8人のヒーロー達それぞれが背負う人間ドラマも大きな魅力といえる。彼らのドラマは決して壮絶なものだけではない。現代社会に生きる一般の人達と同じように、家族や自分の夢、苦い過去なども抱え、そして働いている。彼らの背負うドラマは非常に緻密に描かれているため、時には友情ストーリー、時にはホームドラマ、時には群像劇として楽しむことができる、ということもこの作品が幅広く支持された大きな要因。

あらゆる角度からヒーローの魅力と人間ドラマを描いたこの作品。ここでは、まず〝主役〟となる8人のヒーロー紹介と、世界観を構築するキーマンをざっと紹介していく。

ところで、あらすじは?

物語の舞台となるシュテルンビルトは、多様な人種に加えてNEXTと呼ばれる特殊能力者も共存する巨大都市。そこにはNEXT能力を使って街の平和を守るヒーローという職業が存在していた。各企業に所属するヒーローの活躍の様子は『HERO TV』で中継され、その番組中人命救助や犯人確保などにより与えられるポイントを獲得することで、彼らの年間ランキングが決められる。そんな中、リストラ寸前のベテランヒーロー、ワイルドタイガーと、将来有望な新人ヒーロー、バーナビー・ブルックス Jr.がヒーロー業界史上初となるコンビヒーローを結成し、業績アップと人気獲得に乗り出す。最初は互いの考え方の違いから衝突ばかりしていた2人だが、様々な障害にぶつかり、それらを乗り越えていくことで結束を深めてく…。

ワイルドタイガー／鏑木・T・虎徹

“正義の壊し屋”の異名で名を馳せヒーローに対する想いは人一倍強い。視聴率や人気アップは二の次で人命救助が最優先。その想いとは裏腹にHEROランキングはあまり高くない。能力減退により持続時間が5分から1分に減るも、一時的に身体能力を飛躍的にあげるハンドレッドパワーを駆使して奔走する。パンチ技が得意。

ヒーロー業界にあって旬を過ぎたベテランヒーロー。人気低迷と所属会社の事業撤退が重なり失業の大ピンチに。しかし大手企業のアポロンメディアに雇われることになり、新参者のバーナビーとのコンビヒーローとして新たに売り出すことに。

人気の低迷、失業の危機、所属会社からの冷遇など、およそヒーローとは思えない難局を打開してきた前向きでひたむきな性格。最初はバーナビーと衝突しつつも、いくつもの障害を共に乗り越えることで徐々に信頼を深めていく。

バーナビー・ブルックス Jr.

能力減退前のタイガーと同じく、5分間だけ身体能力が飛躍的にあがるハンドレッドパワーを持つが、いかに効率良くポイントを獲得するか、という事に関する合理的な判断力はタイガーと比べバーナビーが上。得意技はキック。

颯爽と登場するや爆発的な人気を得たスーパールーキー。唯一本名を名乗り素顔を晒して活動するが、ヒーロー業をあくまでも仕事と割り切り、ビジネスライクにこなす。後に、両親殺害の犯人を自らの手で捕まえるためにヒーロー業に就いたことが明らかになる。

4歳の時にロボット工学の権威だった両親を目の前で惨殺される過去をもつ。後見人となったマーベリックに育てられヒーローになる決意を。そんな過去もあり、当初は他人に心を閉ざしがちだったが、虎徹と出会い徐々に変化していく。

ヒーローはこの8人

主役は…リストラ寸前!崖っぷちのベテランと新進気鋭!将来有望のニューフェイス

そんな主役の二人を取り巻くのが、仲間のヒーローたち。ひとたびヒーローに変身すれば、それぞれのNEXT能力を駆使して活躍する。しかし、その素顔は普通の人と同じように日常で悩み落ち込み、仕事(ヒーロー業)でも失敗することも。ここでは彼らのキャラクターを、変身前変身後で分けて紹介していく。ここでは個別での紹介となるが、TVシリーズ、劇場版『-The Beginning-』の流れでストーリーを追ってみていけば、彼らの内なるドラマが全体の物語と絡み合い、また先々の伏線となるなど群像劇としての醍醐味も堪能できる。

SUM UP!! TIGER

ストーリーを躍動させるタイバニのキーマン！

ジェイク・マルチネス＆クリーム

常軌を逸した能力と凶暴性を持ったNEXT

元傭兵で余罪が山ほどあるNEXT重犯罪者ジェイク。攻防両用できるバリアと心読という2つの能力を持っている。NEXTが統治する“理想郷”を目指し、ジェイクに心酔するクリームとともに、シュテルンビルト転覆を画策した。

アルバート・マーベリック

メディアを取り仕切る街随一の権力者

シュテルンビルトのメディア王。虎徹の所属するアポロンメディアCEOであり『HERO TV』の放送局、OBCの社長でもある。市民やヒーローからの人望も厚く市長さえ一目置く存在。実は、他人に新たな記憶を植え付ける事ができるという強力なNEXT能力者で、ヒーローたちを窮地に立たせる。

Mr.レジェンド

平和のシンボルであり伝説のヒーロー

かつてシュテルンビルトで数々の偉業を達成した伝説のヒーロー。NEXT能力に目覚めた幼き虎徹が、能力に自信を持ちヒーローを目指すきっかけになったのがレジェンドの存在だ。既にこの世を去っているが、現在も銅像となり人々を見守っている。実はユーリの父。

ルナティック／ユーリ・ペトロフ

ヒーローの存在意義にクエスチョンを投げかけるNEXT

シュテルンビルトの司法局でヒーロー管理官兼裁判官を務める男。だが裏の顔は青い炎を操る謎のNEXT、ルナティック。独自の正義観を持ち、死刑制度のないシュテルンビルトにあって殺人を犯した者に死の制裁を加える闇の存在。あくまでも法の下でしか活動できないヒーローたち対し、その存在意義にクエスチョンを投げかけ続ける。

見切れでスポンサーとファンの心を掴む（?）ヒーロー

見るからに和の心を愛することが伝わってくる独創的スタイル。茶室で心を落ち着かせるなど、所作もまた和を愛するヒーローだ。親友との再会から“見切れ”以外にもヒーローとして大切なものを見つけた。触れた相手そっくりに化ける擬態能力を持つ。

折紙サイクロン／イワン・カレリン

二枚目なのにネガティブ＆ネクラキャラ？

ヒーロー時の「ござる」口調に刺繍の入ったスカジャン、ミソスープやお茶好きと、とにかく和テイストにあふれた超二枚目。擬態の能力に対して自信を持てず、長らくネガティブ思考で後ろ向きにヒーロー業をしてきたが、親友との出会いやジェイク事件を通して心・技・体ともに成長した。

心優しき西海岸の猛牛戦車

猛牛を連想させる重厚感のあるビジュアル。その見た目通りパワー系だが、彼の能力は肉体の硬質化。ヒーロー界の新しい風に飲み込まれた格好で、人気は下がり続けるばかり!?

ロックバイソン／アントニオ・ロペス

憎まれ口を言い合うも、虎徹とは無二の親友

風貌に似合わず優しく懐深い性格の持ち主。虎徹とは学生時代からの友人で、ヒーロー業の“同僚”としても長い付き合い。お互いに憎まれ口を言い合うこともあるが、心の中では深く信頼し合う無二の親友だ。

正義を愛するキング・オブ・ヒーロー

風を自在に操り、空を飛んだり風で攻撃することもできる“風の魔術師”。人気は常にトップを誇る、キング・オブ・ヒーローの称号に相応しい存在。日課は夜のパトロールで、およそ“欲”と呼ばれるものには縁遠く、ただひたすらに正義を愛する心の持ち主。

スカイハイ／キース・グッドマン

裏のない性格でいて、女性には超オクテ

格好いい名前に負けない爽やかな風貌に努力を怠らない超マジメな性格。毛並みの手入れが行き届いたジョンが愛犬。意図せずヘンテコな言葉回しをするのも、恋愛相談をしただけで顔を赤らめるのもキースの魅力だ。

強力な炎と“女子力”を武器に悪事を撃滅

セレブでいて強力な炎を自在に操ることができるため別名「ブルジョワ直火焼き」のおネェ系ヒーロー。見た目のたくましさと派手な技の数々とは裏腹にそのキャラはおネエ。ひょっとすると、“女子力”こそが彼女（?）の最大の武器かもしれない。

ファイヤーエンブレム／ネイサン・シーモア

世話好きで気配り上手なおネェ肌

ヘリオスエナジーのオーナーでありながらヒーロー業も行う。いわゆる姉御肌で、男女問わず世話好き、気配り上手で仲間からの信頼も厚い。肉食系を装いつつもヒーロー達の良き相談役でありまとめ役。ヒーローにとって欠かせない存在でもある。

英才教育で身につけたヒーローとしての資質

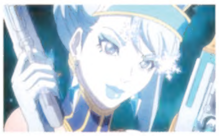
稲妻を発する能力に加え、華麗なカンフー技も使える「稲妻カンフーマスター」。幼少の頃からヒーローになるための英才教育を受けたため、ヒーロー業に関してはプロフェッショナルだが、恋や流行りには全く興味がない。一人称は“ボク”。

ドラゴンキッド／ホァン・パオリン

ボーイッシュさこそチャームポイント

ショートヘアに加えて普段着はトラックスーツ。女の子っぽさをまったく見せないボーイッシュな風貌こそ彼女のチャームポイント。どんな窮地でもあきらめず仲間を信頼できる肝の強さを持ち合わせている。度胸はヒーローの中でも随一!?

クールな女王様キャラのアイドル・ヒーロー



ヒーローでありながら、歌って踊れるスーパーアイドル。しかもクールで生意気な女王様キャラ＆セクシー衣装で男性を中心に絶大な人気を誇る。海の一部さえも氷漬けにするほど強力な氷を操る能力を持つ。

ブルーローズ／カリーナ・ライル

叶わぬ片思い（?）に思い焦がれる女子高生

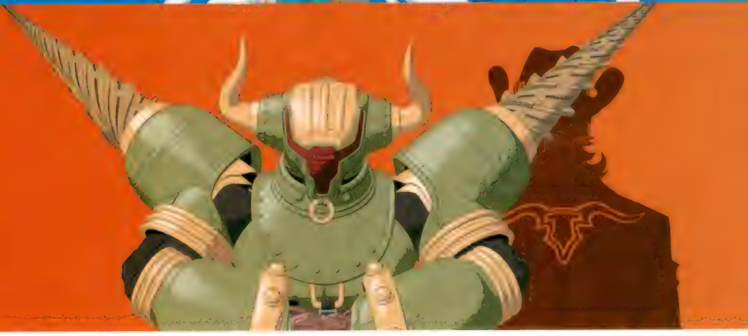
普段は歌手を目指す女子高生。歌手デビューとの交換条件にヒーローの道へ入るものの、報われないことも多い“仕事”に一時はヒーロー業の引退を決心。だが虎徹のヒーローに対する考え方に触れ、ヒーローとしての自分のあり方に目覚める。そんなこともあり、虎徹を意識し始めているようだが…。

Wild Tiger / Kotetsu T. Kaburagi
as Hiroaki Hirata

Barnaby Brooks Jr.
as Masakazu Morita

Blue Rose / Karina Lyle
as Minako Kotobuki

Rock Bison / Antonio Lopez
as Taiten Kusunoki

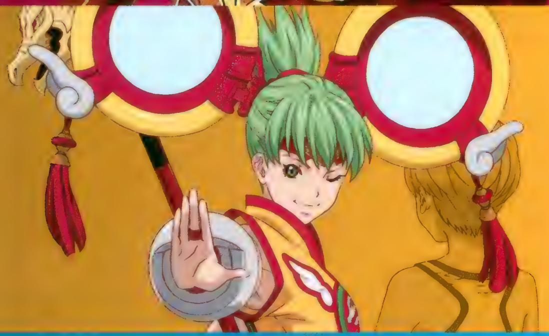


HERO Interview 09 +1

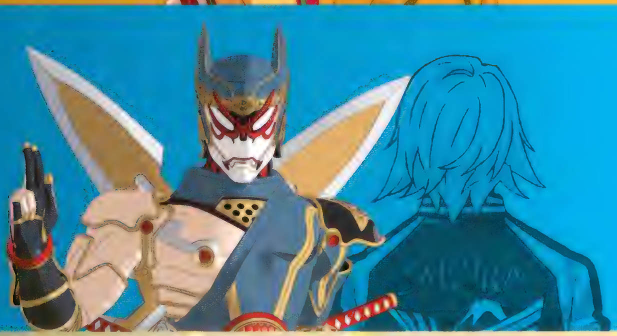
平田広明　森田成一　寿美菜子　楠大典
伊瀬茉莉也　津田健次郎　井上剛　岡本信彦
NEW HERO Interview　中村悠一 | ENEMY Interview　遊佐浩二

Sky High / Keith Goodman
as **Go Inoue**

Fire Emblem / Nathan Seymour
as **Kenjiro Tsuda**



Dragon Kid / Huang Pao-Lin
as **Mariya Ise**



Origami Cyclone / Ivan Karelin
as **Nobuhiko Okamoto**

Golden Ryan / Ryan Goldsmith
as **Yuichi Nakamura**

Lunatic / Yuri Petrov
as **Koji Yusa**

HERO Interview 01

ワイルドタイガー／鏑木・T・虎徹

平田広明

虎徹で斬新だったのは オシャレなところと、ヒゲ

罪を憎んで人を憎まず——。近未来のきらびやかな世界観の中で、ただひとり昭和のおじさんキャラで古き良きヒーローを営む虎徹。彼の強さと悲哀を魅力的に演じた平田さんに、今改めて『タイバニ』の魅力を振り返ってもらった。

——今日は『タイバニ』の魅力をじっくりと伺いに来ました。

「じっくりとね（笑）」

——まずは平田さんが最初に『タイバニ』と出会った時のエピソードを。

「う〜ん…ちょっと待ってくださいね。…（一生懸命思い出しながら）最初は、新しく『TIGER & BUNNY』というアニメ作品を制作するということで、鏑木・T・虎徹というヒーロー役をお願いしたいというお話でした。2011年の初頭のことでしたね」

——その時はどんなお話を？

「とにもかくにも原作がないですからね。設定資料やキャラのビジュアル的なものを見せていただいて説明を受けたんですが、その時にはどんなストーリーになるかをざっくりと教えていただいた感じでね。主人公は中年のおじさんで、だけど会社員でリストラに遭いそうということでとにかく崖っぷちにいるんだけど、そんな中年が頑張る姿を描きたい、と。印象的なのはさとうけいいち監督が『僕たちのような中年世代が一番頑張らなくちゃいけないんです！』と熱く語っていたこと。「一番ワリを食っている働き盛りのおじさん世代に、覇気がないでしょう。だからもっと元気になってもらいたいというコンセプトの話を作りたい、そんなお話でした。単純明快だけど明るくて前向きなオッサンを作りたい…それが虎徹だったんですが、第一印象としては、作品の内容よりもさとう監督の熱意が伝わりました」

——僕は30代後半で、いわば〝中年のおじさん世代〟なのですが、閉塞感のあるこの時代に、我々のような世代が、えらく励まされるアニメだと感じたのを思い出します。

「〝中年のおじさん〟にそう言ってもらえると嬉しいですね。そもそもはその世代の男性を応援する物語でしたから…今改めてストーリーを追って見ていくと、練り込んで作られた西田征史さんの脚本も凄く深いんですよ。コミカルで元気に描かれてはいるけど、登場キャラそれぞれの人間ドラマが活写されているので、台本を読んだ印象はすごく面白かったですし、アフレコ現場も熱を帯びていたと思います。西田さんはほぼ毎回、見守るようにアフレコ現場に居てくれたし、古くからお付き合いのある音響監督の木村絵理子さんからも、細かくて、とても丁寧な演出をしていただきました。だから、最初からキャストみんながそれぞれのキャラの魅力を存分に引き出せたんじゃないか、と思います」

——昭和の匂いのする虎徹というある意味で斬新なヒーローを演じられてみての印象を。

「斬新か…なるほどね。そう言われて改めて考えてみると、彼のキャラ的な部分や内面は決して斬新さはないんだよね。雰囲気としては昭和の下町にいるような、ガサツなおじさんですから。むしろ斬新なのは、ガサツなのにオシャレな部分。それと、ヒゲですね」

――（笑）あのヒゲの形は見たことがないですね。

「今でこそ虎徹のチャームポイントだけど、当時は〝あのヒゲのカタチは？〟って思ってましたからねぇ（笑）。あと斬新という意味で話すと、悪者を退治することを商売にしてしまうという設定がそうですね。アメリカではハイウェイでのカーチェイスなんかを実況したりするけど、日本的ではないと思っていたし、僕の中ではヒーローを商売にするというのは、まったく無い発想でした。でもだからこそ、そういった世界観で海外のようなきらびやかな街並みをバックに、昭和の男がヒーローを一生懸命にやっている姿というのが、斬新でありながらも共感していただけたのかな、と思います」

お客さんと一緒に見たからこそ、一層感動的なシーンになった

――では『タイバニ』で平田さんのお好きなシーンについて。

「好きなシーンはたくさんあるんですよ。マジメなエピソードから好きなシーンを思い出すと、まず出てくるのが、里帰りの回（17話）で、娘の楓を助けに行く場面。我を忘れた虎徹が、能力を使わずに楓を助けるところは、心に残りましたね。そういえば、今思い出したけどアフレコの時に演じながら〝これはきっと心に残るシーンになるだろうな〟とフツフツと感じていたんです。そのとき、隣で見ていた出番のない森田（成一）君がいきなり感極まっちゃったんです」

――森田さんが先に泣いちゃった！

「そう。〝せっかくの父娘の感動シーンで、父親のオレが泣こうと思ったのに、先に泣きやがって（涙）、涙を返せー!!〟と違う涙を流しました（笑）…だけど、自分の出番でもないシーンなのに、時間を作って見てくれて、シーンに感動してくれるのはとても素敵なことでした。そこも含めて心に残ったシーンになりました」

――お2人が感動されたように、特に男に響くシーンでしたね。

「それと、虎徹らしさが全開だったTVシリーズの1、2話ですね。コンビを組んだばかりの若造のバーナビーを相手に、ちょっとテンションが上がっていて、〝俺がやるのを見ておけよ〟と先輩風を吹かすんだけど、自分の放ったロープで2人がぐるぐる巻きになってしまうシーンも好きですね。そのシーンと連動して、巨大な石像に捕まえられ2人して身動きが取れなくなるシーンも象徴的でしたね。〝バニーちゃん〟って馬鹿にした挙句に、虎徹だけが能力発動して現場に向かってしまう（2話）。当時は〝もしかして、最後までずっとこういう話で格好いい見せ場はないのかな？〟と心配にもなりましたが、前半の虎徹とバーナビーの関係性を如実に表すシーンとしてはもっとも象徴的でした。2人の関係性が前半と打って変わって別の面白さがじわじわと出てきた後半もいいシーンが多いと思います」

――ですよねぇ。その中でも特に印象に残っているのは…。

「今改めて振り返ってみると、映画館でお客さんと一緒に観た最終回ですね。不思議な感覚を経験させていただいたと思います。映画館で観た時に、僕は収録で最終回を一度見ているはずなのに、初見のような感覚でスクリーンに引き込まれてしまって。楓が人質に取られた絶体絶命のあの瞬間、後ろでゆらりと虎徹が立ち上がった時に、客席がおぉーってどよめいたんです。その時、僕も〝うわぁ、格好いいなあって〟って一人の観客になっていて、いい最終回だなって思いました」

――僕も会場に居たのですが、あの時の感動はよく覚えています。

「それまでの24話を経て、虎徹がみんなのヒーローになった瞬間に立ち会えた気がしました。お客さんと一緒に感動を味わえたことで、みなさんのおかげでより印象深いシーンにしてもらえたな、と思いますね」

――視聴者視点だと、虎徹の魂こそがヒーローだったんだと感じさせられました。

「なるほどね。演者としては皆さんと同じように客観的には見られないけれど、そう感じていただけたなら、すごく嬉しいことです」

――平田さんにとってのヒーロー像は、どんな存在なのでしょう？

「……困ったときに、助けてくれる人でしょうか。例えば、自らの危険を顧みずに危機から助けるような人もヒーローだと思いますし、たとえば悪いけどお金がないから貸してくれる人も、その人にとってみればヒーローに見えるかもしれないですよね。でもそういった物質的なこと以上に、精神的に救（たす）けてくれる存在という意味合いの方が僕にとっては大きい。2話だったかなあ、虎徹が少年に『これで君もヒーローだ』って道を諭す場面に、虎徹のヒーローたる所以が現れていると思います」

悲しんで愛おしみながら虎徹を見届けて欲しい

――では『The Rising』のお話を。アフレコを終えた手応えはいかがですか？

「ほぼ1年ぶりにみんなで集まりましたが、すぐにレギュラー収録の時と同じようにすっと一つになれた。みんな楽しんで演じていましたね。ただアフレコ前に少し心配していたのは、中村（悠一）君のこと。既にチームの雰囲気が出来上がっている現場に、新しく参加するのは大変なんです。だけど、これまでのシリーズを全部観て『タイバニ』への理解を僕たちの想像以上に深めてくれていたのが大きかった。むしろ「ファンになりました」ってすごいパワーを与えてくれたなと。シュテルンビルトの世界で一緒に思いっきり遊んだなあって印象ですね」

――現場にはいい〝ライアン効果〟がもたらされたのですね。

「ええ。演者にとっては誰もが充実した収録期間を過ごせたと思います」

――その中村さんが演じたライアンを見たときの印象も伺いたいのですが。

「結構前の話ですが、とある現場に桂正和先生がライアンのデザインスケッチを2案持ってきたんです。米たにヨシトモ監督とどっちにしようか物凄く悩まれていて、2人とも一生懸命過ぎてあまりに大変そうだったので〝両方とも魅力的ですが、僕はコッチが格好いいと思います、素人目線ですけど〟と」

――そ、それで実際に採用されたのは？

「やっぱり見た目に格好いいほうが採用されますよね（笑）。今思えば、桂先生も米たに監督も、僕と同じ〝答え〟を選ぼうとしていたんだと思います。でも、ストーリーや演出の面から考えて、即断できない色々な事情が重なり合っていたんでしょうね。なんせストーリーが練りに練られていますから…」

――では、『The Rising』の見所というのは？

「これまでに築き上げられた『タイバニ』のスタイルは、テレビシリーズから一貫しています。そこはブレないままに、得体の知れない新ヒーローがやってきて、完成されている世界観やヒーローたちのチームに、これまでにない〝温度〟を与えてくれる。その温度感がどう変化するのかを楽しんでいただきたいですね。2部リーグで活躍中の虎徹に関してはですね、今後衰えてしまって、その下に3部があるのかよ!って心配も出てきますが…（笑）、とにもかくにも〝虎徹、大丈夫か!?〟という空気感は滲み出ていると思います」

――能力減退というある意味でヒーローの宿命めいたものを背負ってますものね。虎徹に新しい局面が迎えられるのは間違いないですよね。

「そこを悲しんで、愛おしんでもらえればと思います」

Profile

ひらた・ひろあき●8月7日、東京都出身。アニメ『ワンピース』サンジ役、『宇宙兄弟』南波六太役、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』ジャック・スパロウの吹き替えなど数々のアニメ、映画、ナレーションなど幅広く活躍。第11回東京アニメアワードで鏑木・T・虎徹役で声優賞受賞。2014年3月2日㊐〜9日㊐ 吉祥寺シアターにて舞台『猿飛佐助の憂鬱』に出演。

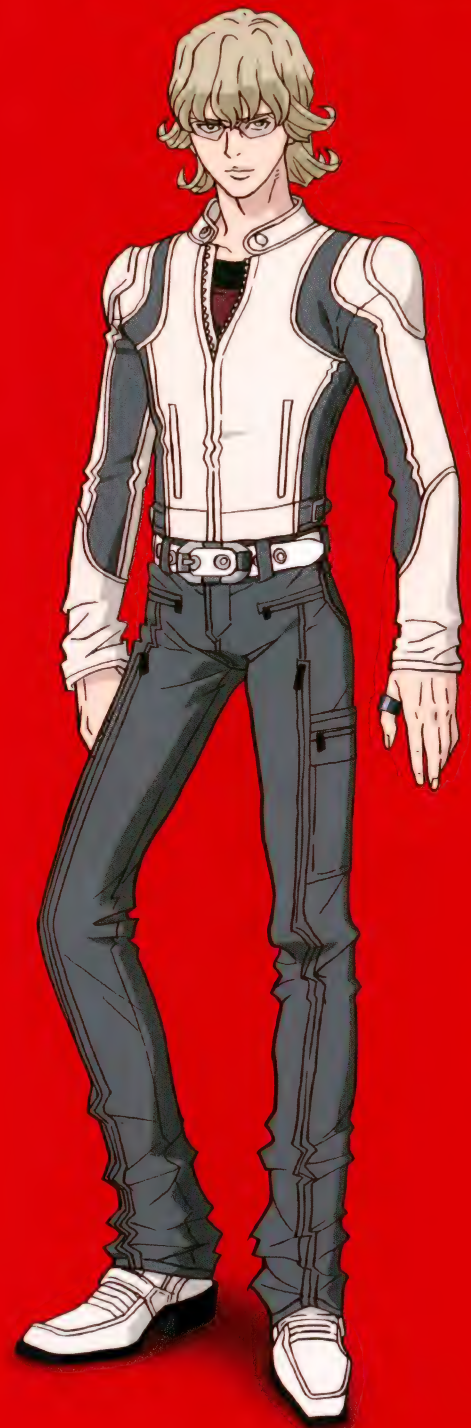
HERO Interview 02

バーナビー・ブルックス Jr.

森田成一

僕にとってのヒーローは熱血キャラ。バーナビーとは逆のヒーロー観です

ヒーローの中で唯一本名を名乗るスーパークールなイケメンヒーロー。心に闇を抱えながらも、虎徹との絆や復讐心を爆発させるなど感情の振り幅には苦労が絶えなかったという森田さんにバーナビーに込めた想いをじっくりと聞いた。



――『タイバニ』とのファーストコンタクトはどのように？

「オーディションが最初です。その時にいろんな行き違いが重なったようで、僕のところには海外作品の吹き替えということでお話を頂いたんです。原作なしのオリジナル作品と知ったのはオーディション当日でした（笑）。僕はバーナビーとスカイハイの2役を受けさせて頂きました。初めてキャラクター表を見た時〝ん？この絵はどこかで…〟と。よく見たら絵には桂正和先生のサインが。僕は桂作品が好きで、『ウイングマン』の元になった漫画『ツバサ』が大好きなんです。桂先生がキャラ原案と知ったときはテンションがすごく上がったのを覚えています」

――オーディションの手応えはどうだったのですか。

「スカイハイのセリフに、すでに〝ありがとう！そしてありがとう!!〟があって、この役は相当面白いぞ、とテンション高めで臨みました。一方でバーナビー役は、〝僕はバニーじゃありません。バーナビーです〟という台詞があり、クールな印象でしたが、スタイリッシュな新人ヒーローなので、きっと若い声優さんがやるだろうと感じていました。ですが、演じたいのは絶対にバーナビーでしたね。なんといってもヒーロースーツが赤。赤はヒーローの中でもリーダーの色。なんとしても赤のヒーローを演じたいと思っていました」

――赤だからですか？

「そう！」

――では〝赤いヒーロー〟に決まった時は？

「凄く嬉しかったですよ。でも、今でこそバーナビーって可愛い奴だって思えますけど、最初は〝コイツ、憧れの赤いスーツを着るヒーローが、先輩に向かって「古いな」とか何様だよ！〟と思って。個人的に好きじゃなかったんです（笑）。ヒーローは熱血であるべきというのが僕のヒーロー観。人の話を全く聞かないクールさは理解できなかったですね（笑）」

――（笑）森田さん自身は虎徹タイプ…。

「…に近いですね。しかも昭和のヒーロー像が好きなんですよ。ですから、赤いヒーローに対する先入観も強くて〝コイツは赤いスーツを着る前に大きな壁にでもぶち当たってきっと改心するんだ。そこから熱血ヒーローを目指すようになるんだ、きっと〟って信じていました」

――…クールなままでしたね。

「完全に21世紀のヒーローなんですよね。いつかどこかで〝昭和色〟をいれてやろうと企んでました（笑）」

――森田さんとバーナビーのあいだにはそんな駆け引きもあったんですね（笑）。

Barnaby Brooks Jr.

実は、TVシリーズの前半よりも後半の方が演じるのが大変でした

——ではバーナビーを演じてみての印象は?

「まず最初に演出陣から〝会話をしないでくれ。虎徹の話を聞かないで答えてほしい〟と指示があったんです。でも、お芝居の基本は会話だし、台本にも会話として書かれている。それに僕は役者として芝居＝会話が身についているから、話を聞かずに答えるのが生理的に無理なんです。だからどうしても平田さん演ずる虎徹との会話が噛み合ってしまう。当初は、スタッフサイドの意図もあって、先々の話やキャラの性格など詳しく聞かされていなかったんです。バーナビーのことも〝ただ冷たい〟という情報だけでしたので〝会話をしない〟という意味がなおさら理解できなかったんです。最初の頃は、収録後にミキサー室に入り、録ったばかりの自分の声を聞いてクールのニュアンスを研究していました」

——一言にクールといっても、とても繊細な役作りだったのですね…。

「そうです。その作業がとても大切でした。〝話を聞かない〟というのは、つまり、『台詞に託したその人の気持ちや想いを全く聞こうとしない』ということなんです。相手の「声」は聞いているけど会話としては一切答えていないというバーナビーの基本スタイルが最初に作られました。その芝居を象徴しているのが、虎徹さんに〝バニーちゃん〟と呼ばれカッとなって言い放つ〝僕はバニーじゃありません。バーナビーです〟という台詞。彼にとっての名前は、誇りも悲しみも背負い込んだとても意味のある大切なものです。本来であれば愛称で呼ばれるのは親愛の情があるからこそですが、彼は虎徹さんの言葉の真意をまったく推し測ろうとしないから、名前を茶化されただけと勝手に思い込み、反射的にあの冷たい台詞が出たんです」

——そんなバーナビーもTVシリーズ後半には、虎徹への信頼を深めていきます。

「僕としては、やっと会話ができるようになったという開放感が大きかったですね（笑）。でも、〝今度は心を開きすぎ〟だと。バーナビーが普通に会話を始めたら、虎徹さんと話しているだけで、デレデレしているように見えてしまうのでこの調整が前半以上に難しかったんです。心を開く加減がとにかく微細なんです。後半は特に生い立ちの核心に触れていくから、感情的にも精神的にも苦しい芝居が長くなるんです。でもそれは、あくまでも心を開かなかった前半を踏まえたうえでのお芝居なので、気持ちをコントロールするのが難しく、最終回まで気が許せませんでした」

『The Rising』では初めてバーナビーに仕掛けをした

——今改めて印象的なシーンをあげるなら?

「主軸となる大きなエピソードはもちろんなのですが、『タイバニ』は日常の些細なエピソードの積み重ねで物語が構築されているんです。だから僕にとっては一見なんでもないような、人間味溢れる一風景のほうが印象的なんです」

——脚本の醍醐味でもありますね。

「脚本の構成たるや、まるで魔法のようだと思いました。散りばめられた伏線、ミスリードの巧さ…物語もキャラ設定も徹底的に作りこまないと構成できない繊細で緻密な台本です。しかも伏線を視聴者はもちろん演者にもわからないように書き上げてくる…」

——キャストにも!?

「ええ。先の展開は、演者ごとに〝知っておかないといけない情報〟を少しずつ最小限に教えてくれるんです。そのために先を知らずにバーナビーを演じなければならない難しさでもあったのですが、事実を知った時の新鮮な感動を芝居に盛り込めたと思います」

——では、バーナビーという男を理解したのは?

「はっきりと理解できたのは『タイバニ』人気が出てきて、台本以外の台詞を読むようになってからです。およそ劇中でバーナビーが言わないような台詞を読んだ時に、一般的なバーナビーのイメージが初めてわかったんです。そのイメージが、僕の思っているバーナビーのイメージと大きな乖離があって。そのことが逆に、自分が考えるバーナビー像を明解にさせてくれました。〝自分の中に役が入ってきたな〟と感じたきっかけになりましたし、なかなか打ち解けられなかったバーナビーとシンクロできたと思えましたね」

——役を掴むのに凄く時間がかかったのですね。

「そうですね。伏線とエピソードが丁寧に積み重ねられて『タイバニ』の物語が形成されているように、バーナビーの人間性もまるでガラス細工のようにエピソードと感情が繊細に重なって構築されているんです。ですから、セリフをいつも以上に繊細に扱わないとキャラが壊れてしまう…そんな役です。しっかりと掴んだのはTVシリーズの収録が終わってからかもしれませんね。今では誰よりも彼を理解しているという自負があります」

——ではここで、森田さんにとってますます理解の深まったバーナビーが物語の肝になる『The Rising』の見所を。

「実は、これまで話したバーナビーの役作りにまつわる話が『The Rising』に深く関わっているんです（ギラリ）」

——えええっ!?

「みなさんご存知のとおり、部署異動による虎徹さんとのバディ解消、ライアンとの新バディ結成が大きな見せ場の本作ですが、当然ながらそのシチュエーションになったとき、バーナビーほどの繊細な人物が影響を受けないはずがない。けれど普段から鉄仮面のように顔色一つ変えないバーナビーです。まさか動揺を表に出すようなことなんてあるはずもない。でもこれまでの虎徹さんや、ヒーローたちと共有してきた時間もあって、内面的な心の揺れは絶対にあるわけです。『The Rising』では、そういう内面的な部分をバーナビーに対して僕から仕掛けました」

——!? それは、お芝居の部分で内面的な部分を表現した、と?

「そうです。一般的にイメージされるバーナビーと、僕がイメージするバーナビーとの間にギャップがあるとお話しましたが、今回〝こういう状況になったとき、バーナビーならこうする〟という僕のイメージを込めました。とても細かいニュアンスの部分ですので、集中し意識をしなければ気付かない可能性が大きいですが…」

——それは、森田さんにとって初の試みなのですか!?

「そうです。表面的には同じように聞こえますが、近しい人だからこそ気づく微細な変化といいましょうか。〝人間味〟の部分を、あくまでニュアンスのみで表現しました。そこにぜひ気づいて欲しいと思いますね」

——では、絵のお芝居の方も…。

「今回は僕たちの演技を見た上で絵を作ってる部分もあるそうです。僕もバーナビーがどんな芝居をしてくれているのか、本当に楽しみにしています」

Profile

もりた・まさかず●10月21日、東京都出身。「FINAL FANTASY X」ティーダ役、「BLEACH」黒崎一護役、「キングダム」信役、「SHORT PEACE「火要鎮」」松吉役、「ダイヤのA」丹波光一郎役、舞台「デスティニー」シャイターン役など、アニメ作品のみならず、他方面に活躍中。

HERO Interview 03

ブルーローズ／カリーナ・ライル

寿美菜子

カリーナを演じるのは、私にとって“挑戦”でした

クールなアイドルヒロインを装いつつも、普段は普通の女子高生。そのギャップを楽しむように演じながらも、役柄に対しては大きなチャレンジもあったとか。カリーナとの出会いが寿さんに残したものとは。

——寿さんは『タイバニ』との出会いはオーディションだったそうですね。

「まだ役が決まる前に絵を見せていただいて〝オシャレ〜〟というのが第一印象でした。そのイメージからナチュラルに等身大の女の子を演じようと決めたんです。オーディションでは、〝虎徹からタオルをプレゼントされるシーン〟（14話）など虎徹とのやりとりが多かったので、素直になれないカリーナの心象が自然と出るイメージでオーディションには臨みました」

——その時すでに虎徹に憧れる展開を…。

「知っていました。だからなおさらナチュラルなお芝居をしたほうがいいのかもと思い、オーディションではいろんなダメ出しと指摘を受けたのですが、その中で自然体での演じ方が出来上がっていったように感じます。実は、自然体で演じるというのは私の中で挑戦の意味合いも大きかったので、演じ甲斐のある大きな役だと思っていたんです。それに、音響監督の木村絵理子さんに初めてお会いして、お芝居を見ていただくだけでもいい経験だと感じていたので、カリーナ役が決まった時の喜びはひとしおでした（笑顔）」

——実際に演じることになって、カリーナの印象はいかがでした？

「ブルーローズのビジュアルだとクールで大人の女性といった雰囲気ですが、カリーナは可愛い女子高生。リアルティーンを残しつつ女王様キャラも持ち合わせていたので〝これは演じるのは難しいぞ〟と思いましたね。特に1話ではツンツンしているばかりで、周囲を蔑むようなお芝居が難しかったです（苦笑）。でも回を追うごとに、熱いモノを持っている芯の強い女の子だとわかり、どんどん彼女のことが好きになっていったように思います。私自身も高校生の時にお仕事をしていたので、自分に重ねて演じられたのかもしれません」

Profile

ことぶき・みなこ●9月17日、兵庫県出身。アニメ『けいおん』琴吹紬役、『Aチャンネル』ユー子／西由宇子役、『ドキドキ!プリキュア』菱川六花／キュアダイヤモンド役などに出演。人気声優ユニット「スフィア」としても活躍中。

——カリーナに対して魅力を感じた部分は？

「自分で思っていることに対して決して嘘はつかない、そんなカリーナの心は素敵だなって思いました」

——彼女の家族がきっちり描かれていたのも印象的でした。

「カリーナの語られていないバックボーンが家族のシーンから読み取ることもできたので、私にとっても印象的でした。歌手になりたい夢と、危険と隣り合わせのヒーローという仕事。その2つで葛藤するだけではなく、家族とのやりとりや関係性が描かれていることでより親近感を持って演じられましたね。いつもは家族を黙って見守るお父さんが、ちゃっかりカリーナを応援する場面もあって、私も嬉しくなりました」

私にとってヒーローのような皆さんに囲まれた幸せな収録現場

——寿さんにとって印象的な『タイバニ』エピソードは？

「このエピソードは好きな方がたくさんいると思うんですが、カリーナがみんなと距離を縮められたという意味でも、バーナビーの誕生日の回（5話）です。先日行われたイベント『SUPER PRELUDE』（2013年10月12日開催）でも、劇中と同じように森田さん（バーナビー役）の誕生日をサプライズでお祝いすることになって…収録現場では森田さんの〝強さ〟を間近で見ていたので、サプライズで森田さんが涙を浮かべているのを見て私もグッときました。その時に改めて5話のエピソードを思い出したんですが、一人のために頑張ろうっていうヒーローたちの絆が芽生えたのはきっとあのエピソード。ライバルであるヒーローがどんどん仲良くなって一緒に戦う仲間になっていく。イベントのサプライズで森田さんが感激しているのを見ていて、あのエピソードがより好きになりました」

——ヒーローたちの絆と、キャスト皆さんの結束力が重なった？

「そうですね。最初は緊張ばかりでしたが、ヒーローたちが仲良くなるにつれて心地よい緊張感へと変わっていったように思います。皆さんと食事したり、お茶を飲みに行く機会も多かったですし、今思えば結束力がとても高いメンバー。ただ、私にとっては学ぶことがたくさんある現場で、成長させていただいたことのほうが多いかも。皆さんのちょっとした気遣いや心配りで現場に笑いがこぼれたりするんですよね。緊張感を保ちつつメリハリをつけることができる方ばかりでしたし、私にとってヒーローのような皆さんに囲まれて共演できたのは本当に幸せでした」

——その当時の印象的なエピソードはありますか？

「ちょうど私が10代から20代になる年に『タイバニ』が放送されたんです。だから、皆さんからも〝打ち上げの時には一緒に乾杯ができるね〟と言っていただいて…打ち上げの時には晴れて乾杯ができたことですね。カリーナと一緒に大人になっていけたかなって思うと、改めて思い出深い作品になったなと思います」

『タイバニ』のヒーローたちには必ず優しさがある

——寿さんご自身、『タイバニ』に関わったことで変化したことは？

「そうですねぇ…。自分が演じてきたキャラクターはもちろん大好きなんですが『タイバニ』に関わってから演じたキャラをより大事に思えるようになったと思います。これまでのお芝居を糧として頑張っていこうと思えるようになったことで〝演じてきたキャラが私を支えてくれている〟。そんなイメージになりました」

——ちなみに、『タイバニ』出演後は青色が好きになったり…？

「ありました！　むしろ青が好きってスタッフさんから見抜かれていたのかもしれないですが、自分が気づかないうちに青を選んでいたんだなって再認識しましたね。今では普段の洋服でも青を選ぶことが増えました」

——では『タイバニ』の魅力は？

「すべてのシーンが丁寧に作り込まれているところですね。世界観が一気に伝わってくる1話のOPを見たときに、あのクオリティーって凄いなってビックリしたし、出演者でありながらも『タイバニ』の虜になりました。徹底して手を抜かずに丁寧に作る姿勢は『The Rising』もそうですが、『タイバニ』の凄いところだと思います。特に今作ではワンシーンごとにテストを重ねてから録音する収録スタイルでしたので、まさに実写のような現場でした。魅力は戦闘シーンですね。アフレコは常に体から声を出すように演じようと意識しました。痛みを表現する時でも、拳なのかガラスなのか、アスファルトに叩きつけられたのか…。微妙に違うお芝居を何度もリテイクして、シーンを作り上げていった感覚があります。今回も皆さん徹底して演じていますので、緻密でリアルな世界観が作り上げられたと思います」

——その『The Rising』ですが、制作前の心境はどうだったのですか？

「アニメで完結している作品なので、その後の世界が描かれることは楽しみでもありましたが、一緒に作るチームの一員としてはワクワクと不安の両方がありましたね」

——不安といえば、虎徹が去り、新キャラ・ゴールデンライアンが登場しますね。

「カリーナの気持ちだとライアンに対して〝なんでアンタなんだ！〟って思ってるでしょうね（笑）。その感情を入れなければ、ライアンはゴージャスでおしゃれ！と思いました。アントニオとはまた違った胸板の厚さで、どちらかというと細マッチョ系のイケメン。人気が出そうなキャラです」

——こりゃカリーナは虎徹からライアンに乗り換えたほうが良いのでは？

「（笑）。カリーナのタイプはたぶん熱血漢な男性だと思うんです。ライアンも悪い奴ではなさそうですけど、現時点では一生懸命さが見えないので彼女のタイプではなさそう」

——いっそのことイワン・カレリンは？

「個人的には好きなキャラなんですよ。憂いを帯びていて、なのにくすぶっている思いがあって素敵だなって。客観的に見たらすっごく面白いですが、カリーナとは合わないんじゃないかな？」

——た、確かに。では寿さんご自身カリーナにはどんな未来を歩んで欲しいですか？

「きっとバーナビーとライアンがバディでいるのを見るたびに、虎徹と重ねて見てしまうでしょうけど、私としては虎徹よりもいい人が出てきてほしいですね」

——カリーナの人生を思えばこその思いですね。では、寿さんから見た『The Rising』の見所を。

「これまでヒーローみんなで力を合わせて作ってきた世界の〝昇る先〟を見届けていただければ。ずっと見てきた方たちは心を寄せるヒーローがいるでしょうから感情移入していただいて。初めて見る方でも心に当てはまるキャラがいるのが『タイバニ』の魅力なので、観た方に思い思いの見所を見つけていただけると思います」

——寿さんにとって『タイバニ』とはどんな作品でしょう？

「格好いいだけではなく、優しさなくしてはヒーローになれない、ということを『タイバニ』に教えてもらったように思います。『タイバニ』の世界のヒーローたちには優しさが必ずある。だから『タイバニ』のヒーローたちが私にとっての一番のヒーロー像です」

——ヒーロー像として残った作品なのですね。

「『タイバニ』の放送された年はちょうど震災があった年で、一時は放送ができないかもしれないという状況でもあったんですが、『タイバニ』を通して考えさせられることもたくさんあって。イベントのライブビューイングで、平田さんが全国の会場に向かって〝東北のみんなも頑張ろうな！　みんながヒーローだぞ！〟って呼びかけているのを見た時に、アニメを通じてでもメッセージが伝えられるんだと強く思いました」

——テレビブロスでもアニメの魅力を伝えていきます。

「ブロスさん、ぜひお願いします！」

——はい！　では最後に、寿さんに是非伺いたい質問がありまして…。

「なんでしょう？」

——『The Rising』は寒い時期の公開ですので、防寒のコツを読者に教えていただければと。

「人の大事な部分でもある〝3つの首〟を温めるのをおすすめします！　特に劇場で寒いと感じる方は、首、手首、足首をぜひ温めるようにしてください！」

——それは温まりそうです！

HERO Interview 04

ロックバイソン／アントニオ・ロペス

楠 大典

まさか自分の演じたキャラが企業名で呼ばれることになるとは…

格好いい男気ヒーローを地でいきながら、人気低迷で崖っぷちのベテランヒーローは、ここぞの場面でドジを露呈し、格好よくなりきれない!?　演じた大典さんにとって、アントニオの面白さはどう映っていたのか？

Profile

くすのき・たいてん●3月18日、東京都出身。『ワイルド・スピード』シリーズのヴィン・ディーゼルやドゥエイン・ジョンソン、ジェット・リーなど映画作品の吹き替えを始め、「テニスの王子様」真田弦一郎役、「ビーストサーガ」ライオーガ役などのアニメ作品にも多数出演。

――まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「出会いは…最初なんだっけな…（笑）、確か新しいヒーローもののアニメで〝ベテランヒーローの役です〟と聞いたんです。まぁ普通に戦うアニメだろうと考えていて、でも台本を読んでみたら〝なんかおかしいぞ？〟と。ヒーローが職業みたいなことになっていて、意味はわからなかったんですが〝何?この面白い話!〟と衝撃を受けましたね。」

――演じる〝ベテランヒーロー〟の第一印象はどうだったのでしょう？

「そりゃあ、ベテランですからね。すごく格好よく敵を倒しては、みんなを陰ながら助けていくんだろうなって思ってましたよ。いきなり泥棒を取り逃がすなんて思わないですよ。〝これは…ドジなポジションだぞ〟。その時の衝撃も大きかったです」

――衝撃が続いたのですね。そんな中でどのようにアントニオを演じていこうと？

「今でこそ全く違うキャラですが、当初はドジといえば虎徹もドジなキャラという印象だったんですよ。しかも、人間味があって共感が持てて決めるところは決めるというおじさんヒーロー。虎徹とはまた別のドジを演じ分けなくちゃいけないということで、正統派として格好つけているけどドジという天然な感じのイメージになっていきましたね。ん？天然といえば、ヒーロー8人全員とも天然ですね」

――天然という意味では、大典さんのアドリブも多かったのでは？

「実はそんなに出してないんですよ。これは西田さんの脚本の面白さです。緻密だしキャラクターも練りこまれているから、台本通り演じれば面白

Rock Bison

いんです。ただ、それだけ面白いから演者もアドリブを入れたくなる。それに、アドリブって役への思い入れがあるからこそ出てくるものなんですよね。そういった意味でチャレンジしていたのは僕と津田くんと、剛くんでした。逆に平田さんと森田さんは本当にアドリブの余地がないほど大変だったと思います」

――ロックバイソンのセリフで印象的なものはあるのですか？

「というよりも、ロックバイソンには決め台詞や必殺技がないんですよ。能力を発揮するときだって〝硬くなれッ〟と言うわけにもいかないし…」

――（笑）でも1話で一番盛り上がったのはロックバイソンだったと思いますよ。

「まさか自分のキャラが企業名で呼ばれることになるとは思ってもいませんでしたね。僕もUSTREAMで視聴してましたけど、大変な盛り上がりでしたよね。」

――演じる上で意識した部分は？

「アントニオはほかのヒーローと違って、虎徹と昔からの親友なんですね。だから、台詞一つひとつに虎徹との繋がりを意識して演じるように心がけていましたね」

最終話でアントニオが覗かせた あの表情に込めた感情

――『タイバニ』で印象に残っているエピソードは？

「藤原啓治さんのジェイクと、根谷美智子さんのクリームの話。最初のほうではクリームが帽子を被っているんですよね。あの帽子、後にジェイクお揃いのものだってわかるんです。それは台詞で直接言わなくて、さりげなく描かれているだけなんですが、そういうところってアニメの表現っぽくないんですよね」

――まさに舞台や映画のような…。

「そうそう。これぞ西田脚本の妙だと思いますね。それぞれのエピソードには、演者たちでさえ見落としてしまいそうな細かい仕掛けがいっぱい仕込んであるんですよね。もちろん気づかなくてもストーリー上は問題ないから、敢えて説明することもしていないんです。そうした〝アニメらしくないシーン〟は印象的ですね。あとシーンという意味では、虎徹と楓の父娘のやりとりがすごく好きですね。個人的に日高里菜さんが好きなのかもしれないけど（笑）。だけど、虎徹の家族の在り方というのは、鏑木家だけで家族の物語が1本描けるほど練り上げられたリアルさがあるんです。エピソードを絡ませていく糸の絡ませ方は絶妙だし、しかも『The Beginning』の伏線にもなっている。TVシリーズで張りっぱなしにしていた伏線を『The Beginning』で解くというあたりが西田さんの凄みだと思いました」

――そこは『The Rising』にも期待できそうですか？

「西田さんと話をした時に〝『タイバニ』で描きたいエピソードはまだまだあるんです〟って言ってましたからね。見せ場はそこを解く部分だと思いますよ」

――ロックバイソンに秘められたエピソードも気になりますね。

「僕さえ知らないことがまだまだあるようですから」

――では、アントニオの印象的なシーンは？

「そうだなぁ。詳しく描写されていないので、受け取り方や解釈の仕方はもちろん皆さんそれぞれで違って当然なんですが、24話で楓は敵に捕まり、虎徹も窮地、ヒーロー全員には爆弾が仕掛けられる絶体絶命の場面。そのときボタンを押しさえすれば自分だけが助かるという…」

――あの場面は誰もが死を覚悟した非情なシーンでした。

「あの時に、アントニオだけが葛藤するんです。ボタンを押そうって。だから、彼だけが逃げのびようとしているようにも見える。だけど僕はそう思って演じていないんです。あの直前に、虎徹がアントニオのところに来て〝頼む〟っていうシーンがあるんです。アントニオは、ヒーローの中で唯一の親友である虎徹の言葉と覚悟を感じて、〝絶対に楓を助けないといけない〟って感じたと思うんですね。だから、楓を助けに行きたい、その葛藤だったと〝僕は〟思っています」

――ただ、演じた時の思いはあれど、あくまでも観た人の解釈に預けたいということでしょうか。

「そのほうがアントニオにとって幸せだと思いますしね」

ライアンは印象として無敵 硬くなっても太刀打ちできないね

――では『The Rising』の見所はどこになるでしょう？

「よくよく考えてみれば、TVシリーズの1話も、同じように得体の知れない新ヒーローがやってきてバディになる話でしたけど、新しく入ってくるキャラが変われば、こんなにも変わるのかっていうね。しかも翼が生えていて、みんなのいいところを〝全部盛り〟したみたいなビジュアルで。しかもすごい能力でしょ、ライアンは？」

――はい。さすがのロックバイソンも霞みます。ドリル好きの僕から見ても。

「もうね、印象としては無敵。本当ね、硬くなる能力なんて太刀打ちできないですよ。例え決め台詞があって〝硬くなれー〟と言ったとしても〝硬いの？　何？〟って。まぁランキング的にも勝てないだろうしね（笑）」

――でもそれでもドリル好きと工場好きと戦車好き、あとお肉好きはロックバイソンが好きなはずです。

「（笑）まぁ、彼の〝悪は許さない〟という根底は一貫してブレてないですよ」

――安心しました。ほかに、大典さんご自身が気になっている展開は？

「いっぱいあるんですけどね、特に虎徹とブルーローズの恋の進展が気になりますね。僕としてはもっと虎徹を惑わせてほしい（笑）」

――バツイチ男を口説く本、読んでましたしね。本気ですよ彼女は。

「そこも含めて可愛いキャラだよ。声は寿美菜子だしね。もう完璧。あと個人的にはホァン（・パオリン）ちゃんが好きですね。本当に可愛い。ボーイッシュになってますます可愛くなったね。しかも（伊瀬）茉莉也が声でしょ、完璧。だから男性陣はぜひ見て欲しいと思います。こんなにキュートなキャラが2人も出てるんだから（笑）」

――ホントです！　では、大典さんが見た『タイバニ』の魅力とは？

「普通にテレビドラマを観るような感じで見られるアニメですよね。ただ敵と戦って倒すだけのヒーローものっていうわけじゃなくて、そこにドラマの要素がすごくあるのでね。ヒーローとは何か？　人間とは何か？　大人とは何か？　も描かれているので、子供さんにももっと見て欲しいなと思います」

――最後に大典さんにとってヒーローとはどんな存在ですか？

「この質問は『タイバニ』に出演させていただいているあいだにいっぱい聞かれましたね。逆に言えば〝ヒーローとは？〟みたいな質問、聞かれたことなかったんですよ、これまで。だから、『タイバニ』に出演してみて、はじめてぶち当たった疑問なんですよね」

――では、ヒーロー観に変化も？

「そうですね。悪を倒す痛快さという客観した見方だったかもしれないのですが、『タイバニ』を見ると、みんながヒーローなんじゃないかってね。NEXT能力はあるけど、戦っているのは僕たちと同じ人間だってことを言いたい作品だったんだなと改めて思いますね」

正統派ヒーローのルックスをしていながら超天然キャラというギャップが魅力のキース。演じるキースとは共通点が多いという井上さんに、独自の考察力から紐解いた『タイバニ』の魅力を語ってもらった。

HERO Interview 05

スカイハイ／キース・グッドマン

井上 剛

必殺技をスカイハイ（名前）で言うのはスカイハイだけなんです（喜）

――まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「僕はオーディションで作品と初めて対時したのですが、その時にキースの立ち絵とサムズアップしているバストショット。この2パターンの絵を見せてもらいました。キースと初めて出会ったのはその時ですね。オーディションで印象的だったのは台詞〝ありがとう！そして、ありがとう！〟でした。今でこそトレードマークのようなセリフですが、そのときは意味が分からず、これはどうしたものかと悩みながらオーディションに臨みましたよ」

――キースの印象はどうでしたか？

「オールドファッションなアメリカの好青年だなあ、と。ただ台詞を見た感じ、ちょっとだけ言動はおかしな人なんだろうけど、真面目で格好いいヒーローなんだと思いました…その時は」

――では、おかしいのはちょっとだけではないと気づいたのはいつのことですか？

「5話です。バーナビーのバースデーをお祝いするエピソードなんですが、そこで初めて〝キースは天然キャラなのか〟と確信しました。それまでは、キースのキャラはバーナビーと被ってるけど大丈夫かな?って心配さえしていたんですよ。2人とも王道で正統派の格好いいヒーローで、クールなのがバーナビー、スカイハイは熱血タイプであると思ってました。まさか天然キャラだとは思わなかったですね…」

――その時はショックもあったのですか？

「いえ。路線の違いがはっきりわかり、役作りのベクトルが明快に見えたので楽しみが大きくなりましたし〝よし天然のヒーローで行くぞ！〟と決意を新たにすることができましたよ」

――天然というエッセンスを得て、お芝居は変化したのですか？

「ちょっと変に見える言動も、〝ウケを狙っているわけではなく、いたって真面目なんだな〟と納得することができたので、より安心して演じられるようになったとは思いますね」

――天然という意味で、印象的なセリフはありますか？

「技を繰り出すときに〝スカ～イハ～イ！〟と自らの名前を呼ぶ台詞です。実は5話で監督から急に名前で必殺技を出そうと要望されて、その時は〝どういうことですか？〟と迷いながら演じたのですが、それが自分でも気に入ってしまって。ジェイク戦の前のパワードスーツとの対決（11話）ではアドリブで発して採用されたんです。結果として技名として確立されましたし、今思えばいい特徴を与えてもらったなと思います。…そういえば『タイバニ』で必殺技をスカイハイ（名前）で言うのは、僕だけじゃないでしょうか？ これは、オンリーワンということですね（喜）、ははは」

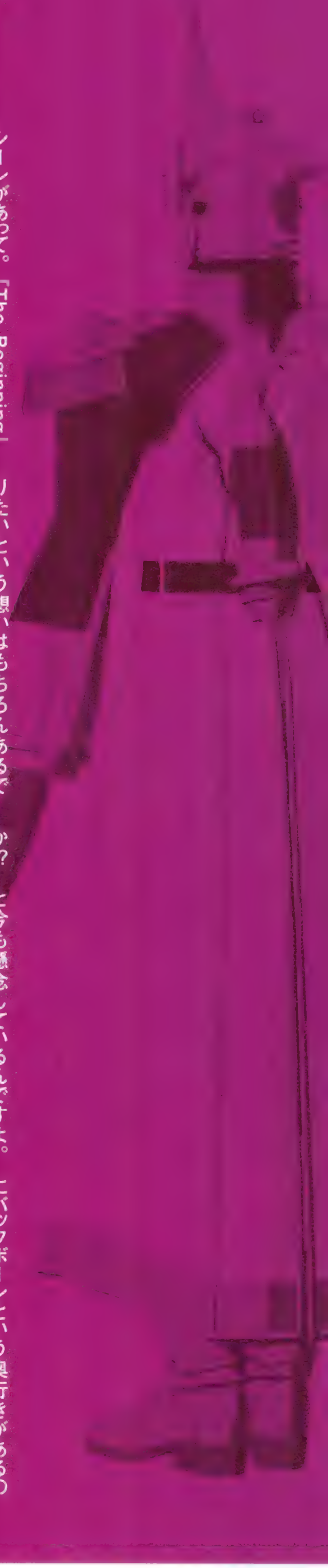
――（笑）アドリブからの技名誕生だったわけですね。ちなみに、井上さんの印象的なアドリブは？

「15話のシスとの会話で言った〝また明日、明日また〟です」

――名台詞でしたね。僕はそのアドリブに泣かされました…。

Profile

いのうえ・こう●4月19日、佐賀県出身。『ヘタリア』スペイン役、『黒子のバスケ』土田聡史役、『機動戦士ガンダムUC』ボラード役、『ビーストサーガ』ビッグセロウ役など、アニメ作品、ナレーターとして幅広く活躍。



キースと出会ったことで天然であることが自覚できました

――井上さんはキースと似ていると感じる部分はあるのですか？

「〝似てる〟とよく言われてはいたんですが、僕は自分のことを面白い人だと思っていたので、真面目なキースとは似てないだろうと思っていたんです」

――そうなんですか！

「はい。ですが、彼のことを天然だと思っているのに、演じていて違和感がなかったんですよね。それで、僕って天然なんだなって実感するようになりました…」

――天然キャラであることをキースが気づかせてくれたんですね。

「そうなんですよ！　3話でワイルドタイガーとアニエスさんを交互に見るシーンがあって、そのときに素で〝えッ〟って言うアドリブがあるんですが、あれは普段の僕そのものなんです。日常的にも、気を緩めたたらキースになっている瞬間もありますし…それほど大きな影響を受けたんだなと、改めて実感しますね」

――今ちょっと思ったのですが、僕は今キースと話しているような感覚です。

「はははは。そう言ってもらえると嬉しいですね！」

――では、井上さんご自身の印象に残っているエピソードのお話を。

「15話でバーナビーが虎徹に〝これまでと景色が違って見える〟と話すシーンがあって。『The Beginning』を観終わった後に改めてTVシリーズを見返してみると彼にとっていかに革命的な台詞だったのか、ということがじわじわと伝わってきたんです。20年間復讐だけに生きてきたことを考えると、まさにターニングポイントになった台詞です。そして人生を変えてくれた虎徹にだからこそ言える台詞なんでしょうね。そう思うと僕にとっては非常に感慨深いシーンです」

――『The Beginning』を観たことによって『タイバニ』をより深く見るようになった…ということでしょうか。

「そうですね。インスピレーションをもらった部分は大きいですよ。より深い考察ができますからね」

――では、井上さんが『タイバニ』を考察する中で印象的なシーンというのは？

「そうですねぇ…（じっくり考えてから）、虎徹の帰省回（17話）は深いなと思いました。虎徹が実家の部屋で泣くシーンがあって、当初はただ友恵さんがいない寂しさからくる涙だと思っていたんです。でも、友恵さんとの約束を守ることを信念の一部としてヒーローをやっている虎徹だからこそ、約束を守れない悲しさから泣いていたんじゃないか、と。これは、あくまでも僕の考察なのですが、大事な人との約束だからこそ守りたいという想いはもちろんあるでしょうけど、約束を守ることで虎徹は自分の中に友恵さんを感じていた部分もあったと思うんです」

――ふむ…たしかにそうですね。

「そう考えると楓ちゃんに認めてもらえたことで〝ヒーローを辞める〟と言い切った場面も印象的ですね。たとえワイルドタイガーをやめてしまっても、誰かの為のヒーローでいることが約束を守ることだと思えた虎徹の強さもまたヒーローとしての魅力だと思いますので」

いまだかつてないスカイハイの新しい一面をお見せできるかと

――では井上さんから見た『The Rising』の見所を教えてください。

「『The Beginning』のラストにボロボロのシュテルンビルトに悪そうな奴のシルエットが出てくる『The Rising』の予告編が流れたんですが、今思えばあの影がゴールデンライアンだったんですね。まさかヒーローだとは思いもよりませんでした」

――ッ…たしかにそうでしたね。そのライアンの印象はどのように？

「とにかくカッコいいビジュアルですが…僕はある部分を見て、まずショックを受けました」

――そ、それはどこですか？

「見事な翼がついているでしょう。〝まさか飛ぶのでは…飛ぶのではまさか!?〟と今も懸念しているんですよ。彼に飛ばれてしまうと、スカイハイのセールスポイントが霞んでしまうでしょう（不安顔）。そこは僕にとっても心配な部分です」

――いや、これだけキャラの際立っているスカイハイが霞むことはないと思いますが…。ち、ちなみに井上さん的なスカイハイの見所は？

「スカイハイですか？　彼は今回も面白いですよ！　そして新たな一面が明かされます。公私をきっちり区切って規則正しい生活の中で、夜はパトロールかジョンの散歩しかしていない。そう思っている人も多いと思うのですが、意外なプライベートにズームインします」

――それは、新発見ですか？

「そうですね。ヒーローの裏側を描いているのが『タイバニ』の魅力の部分でもありますからね。スカイハイもそうですが、ヒーローたちの知られざる背景が描かれるのは大きな見所だと思います。僕個人的にもヒーローたちのバックボーンってすごく気になるんです。どんな生い立ちを経て、NEXT能力を持っているがために周囲の反応はどうだったのか…。彼らの過去がわからないからこそ面白いという部分もあるんでしょうけど、やっぱりヒーローたちの過去やその時の心の機微はエピソードとして知れると楽しいですよね」

――『タイバニ』は登場するキャラにバックボーンという奥行きがあるのも魅力ですよね。

「本当にそうですね。だからこそ人によって贔屓のヒーローがきっと違いますし、面白いと思えるポイントも違う。自分なりの楽しみが見つけられる作品だと思います」

――そんな意味で、井上さん的にヒーローの中で相棒にしたいキャラはいましたか？

「スカイハイと言いたいところですが、天然×天然だとうまくいかないかなぁと思ったり…でも、お互いに天然ですとストレスに感じることはないでしょうから、相棒を選ぶならやはり彼になるでしょうね。ただ、友達になりたいのはアントニオなんです」

――そのアントニオに対して、井上さんなりの考察はあるのですか？

「虎徹が最愛の友恵さんを亡くした時、支え続けたのは親友のアントニオだったと思うんです。それだけ深い絆が二人にはあると思っていて。だからこそ絶体絶命の場面で、虎徹は『何かあったらお前に楓を任せる』って最愛の娘を託せたんじゃないか、と」

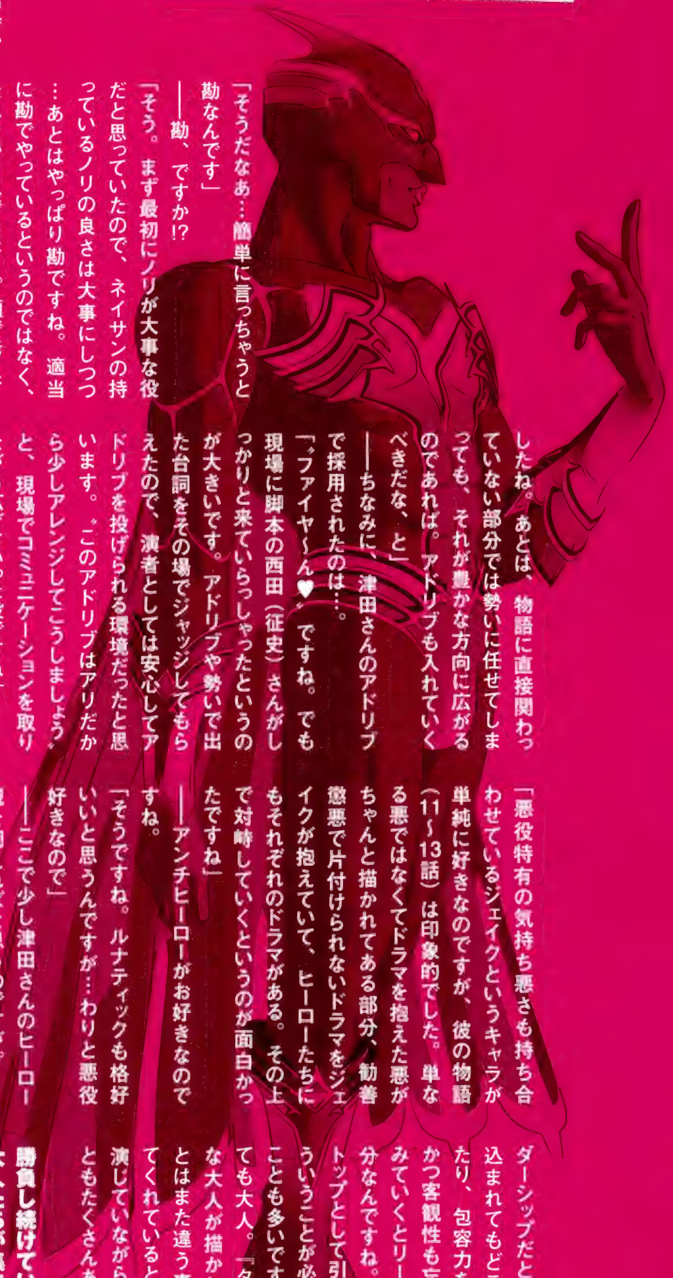
――彼もまた虎徹にとってのヒーローだったと思うと、胸が熱くなりますね。

「〝一人ぐらい格好悪いヒーローがいてもいいじゃないか〟という虎徹の台詞があるのですが、その意味はもしかすると〝誰もが誰かのヒーローなんだよ〟ということなのかもしれません」

HERO Interview 06

ファイヤーエンブレム／ネイサン・シーモア

津田健次郎



——まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「台本と一緒にリハーサルビデオをいただいて、まだ音もなくて絵もきっちりと完成されたものではない（TVシリーズ1話の）VTRでしたが、その状態で見たのに、それぞれのヒーローキャラの登場シーンに物凄く掴まれた印象がありますね…うん、第一印象からすごく面白いなと感じていました」

——では演じられるネイサンの印象はどうでしたか？

「所見ではとてもポップな印象でしたね。おしゃれですし、コスチューム的には一番ヒーローらしいといいますか、アメコミヒーローの中でも伝統的なコスチュームで、筋骨隆々、そしてオネェキャラっていうね（笑）」

——会社の社長でオネェで、しかもタイツヒーローという、これまでに見たことのないヒーロー像でしたが、津田さんはどのように役作りを？

「そうだなあ…簡単に言っちゃうと勘なんです」

——勘、ですか!?

「そう。まず最初にノリが大事な役だと思っていたので、ネイサンの持っているノリの良さは大事にしつつ…あとはやっぱり勘ですね。適当に勘でやっているというのではなく、なんというんでしょう。頭で考えて役を築き上げるというよりは、反射神経や肉体的なところでお芝居を作っていく、というんでしょうか」

——まるで舞台作品の役作りのお話を聞いているようです。

「勘って僕のもともとの役作りのスタイルなんですよ。もちろん演じるキャラのバックグラウンドとか個性とか知識的に必要なものは頭に入れた上ではありますが、そのキャラが一体どんな人物像なのか…しっかりと作り上げた肉体を通してお芝居することをベースに作り上げるようにしています。ネイサンの場合は最初に〝こんな感じじゃないかな?〟って勘とノリで演じたものが、わりとそのまま投影されたと思います」

——確かに、ノリノリでしたね、ネイサンは。

「役的に特に自由度が高かったのとノリの部分でも遊べたという点で僕自身も楽しく演じることができましたね。あとは、物語に直接関わっていない部分では勢いに任せてしまっても、それが豊かな方向に広がるのであれば、アドリブも入れていくべきだな、と」

——ちなみに、津田さんのアドリブで採用されたのは…。

「『ファイヤ〜ん♥』ですね。でも現場に脚本の西田（征史）さんがしっかりと来ていらっしゃったというのが大きいです。アドリブや勢いで出た台詞をその場でジャッジしてもらえたので、演者としては安心してアドリブを投げられる環境だったと思います。〝このアドリブはアリだから少しアレンジしてこうしましょう〟と、現場でコミュニケーションを取りながら広げていった役ですね」

——ノリで演じていく上で役に変化はあったのでしょうか？

「基本的には最初からブレずに演じられたキャラですが、予想外に膨らんだのはカリーナとホァンとの3人のシーンでしょうか。当初はこの3人でご飯を食べるシーンを想像していなかったんですが、〝あぁ、そうか。ネイサンはオネェだからガールズトークなのか〟と（笑）。3人のシーンは意外とそれぞれに等身大の雰囲気もあって面白かったですね。彼女たちを見守るときの母性的で面倒見の良い一面というのは、そのシーンから滲み出てきたものだったと思います」

虎徹の生き様を通じてヒーローの精神性を感じられた

——では、『タイバニ』の印象的なシーンを教えてください。

「悪役特有の気持ち悪さも持ち合わせているジェイクというキャラが単純に好きなのですが、彼の物語（11〜13話）は印象的でした。単なる悪ではなくてドラマを抱えた悪がちゃんと描かれてある部分、勧善懲悪で片付けられないドラマをジェイクが抱えていて、ヒーローたちにもそれぞれのドラマがある。その上で対峙していくというのが面白かったですね」

——アンチヒーローがお好きなのですね。

「そうですね。ルナティックも格好いいと思うんですが…わりと悪役好きなので」

——ここで少し津田さんのヒーロー観を伺えればと思うのですが。

「僕らが子供の頃のヒーローってどこまでも強くて遠い存在だったのが、今のヒーローっていうのは現実に近いもののように感じていて。例えば、親近感があって等身大のヒーローとしての虎徹。彼は他のヒーローと比べると才能もなく、劣っているような描かれ方もしているんですが、僕は凄く才能に溢れた人間だと思うんです。彼の強みは能力的なことではなくて諦めないこと、折れない心。そこが彼をヒーローにしている部分だと思います。才能だけではなく、虎徹のように精神でヒーローになっていくという部分は『タイバニ』を通じて得た僕のヒーロー観の変化かもしれません」

——では、ネイサンというヒーローについては？

「会社のオーナーをやりながらヒーロー業もするという、ちょっと異質なキャラですけど、彼の凄さはリーダーシップだと思うんですよ。追い込まれてもどこかユーモラスであったり、包容力を持っていたり、なおかつ客観性も忘れない。そうやってみていくとリーダーとしての素質充分なんですね。なるほど、企業のトップとして引っ張っていくには、こういうことが必要なのかと感じることも多いですよ。しかも彼はとっても大人。『タイバニ』にはいろんな大人が描かれていますが、虎徹とはまた違う素敵な大人像を描いてくれていると思います。僕自身、演じていながらネイサンから学ぶこともたくさんあります」

勝負し続けている大人たちが集まったチーム

——津田さんが感じておられる『タイバニ』の魅力は？

「本当にドンピシャなキャスティングだったんだなと、改めて感じます。演者とキャラがどんどんかぶってくるんですよね。スカイハイの天然さは井上剛くんの天然さそのものですし、ロックバイソンの面白さは大典さんそのものだし…。むしろ演者のカラーがキャラに反映されているのかと思うほどですね。アフレコの現場でキャラを作っていったイメージはありますが、回を追うごとに、演者とキャラのシンクロ率が上がっていった感じがしますね」

——確かに、津田さんを見ているとまったくイメージは逆なのにネイサンに見えてきますしね…。

「（ネイサン口調で）そ〜かしら? 実は自分のことが一番よくわかってないんですよね。でもキャラと同化

僕の役作りのスタイルは“勘”。ノリを大事に勘で演じました

おネェキャラでいて、大手企業のオーナー、タイツコスチューム…新しいスタイルのヒーローを演じた津田さん。何よりもノリを大事に勘で演じたというネイサンの魅力、役作りについてお話を聞いた。

した一面は、イベントで際立ったりもして、そこは面白かったですね」

―なんといいますか、「タイバニ」のイベントというのは、劇中劇をイベントで見ている。そんな印象さえも受けました。

「実際の企業をヒーローが背負っているという世界観もあるんでしょうけど、現実とフィクションがうまくリンクしていたので、僕たちもテンションが上がったポイントです」

―では、『The Rising』の見所を教えてください。

「ドラマチックで深みのある人間ドラマをずっと描き続けてきた作品ですので、そこは間違いないです。ヒーロー一人ひとりのドラマを丁寧に描ききっていることが魅力です。そこを逃さず注目して欲しいですね」

―予告編では、ネイサンが涙を流すシーンもありましたね。

「あのシーンも、大人だからこそのドラマの部分ですね。そういった意味ではスタッフ、キャストの本気度がこれまで以上に高い作品ではないでしょうか」

―といいますと…？

「平田（広明）さんをはじめとしたキャストや制作スタッフには、40歳前後の方々が多いのですが、その同世代たちがもっている大人の空気感が全編に流れていると思います。

…僕は大人になることに対して夢がないからと諦めてしまうのが嫌だったんです。大人ってしんどいものかもしれないけど、そこを含めても〝大人って素敵だよな〟って大人たちの目線で言い続けているのがこの「タイバニ」だと思います。40年ぐらい生きてくると徒労感が山ほど積み重なってくるんですが、それでも勝負しようとしている大人たちが集まる現場ですので、スタッフとキャストが出す本気を感じてもらえる作品になっていると思います」

―津田さんにとってこの『The Rising』はどんな作品ですか？

「深くて思いテーマをブッ込んできた作品だなという印象です。このご時世に深いものをやるのはリスキーじゃないか、とも思うんですが、恐れずにやるところが「タイバニ」なんだなって。だから誰よりも僕自身、作品に期待しているんです」

―むぅ～僕も期待度が上がりました。しかし最初からチャレンジングなアニメでしたよね。我々もそこに飛びついて特集したわけですから。

「テレビブロスさんが初期の段階で「タイバニ」を表紙にした時に、えぇ!? マジ?って思ったんですよ。なんだかすごく評判が良くてバカ売れしたそうですけど（笑）、でも、そのご縁からこうして「タイバニ」の総括本まで出していただけるのは僕たちも嬉しいこと。これをきっかけに、ファンのみなさんはもちろん、作品を知らない読者の方にも「タイバニ」を面白がっていただけると本当にありがたいなと思います。

〝ヘンな特集も多いみたいだから、私も楽しみ。ファイヤ～期待するのよ～ん♥〟」

Profile

つだ・けんじろう●6月11日、大阪府出身。アニメ「テニスの王子様」乾貞治役、『家庭教師ヒットマンREBORN!』大人ランボ役、『薄桜鬼』風間千景役などのアニメ作品のほか、ナレーション、ドラマ、舞台など俳優として幅広く活躍。

HERO Interview 07

ドラゴンキッド
／ホァン・パオリン

伊瀬茉莉也

ボーイッシュなスタイルでカンフーを巧みに操るボクっ娘。「パオリンは私の一部です」という伊瀬さんに、『タイバニ』の魅力とともに意外なパオリンとの共通項も語ってもらった。

——まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「作品との出会いという意味では、台本を読んだときが最初の出会いでした。でも原作がない作品なので、映像がどうなるのかまったく想像できなかったんです。スタッフさんからいただいた設定資料で絵を見ると〝少年漫画の王道ヒーロー作品かな?〟と思いつつも、〝でもなんかちょっと違うぞ!?〟と。しかも『タイバニ』の場合は、原作はないけど世界観もキャラも完全に出来上がっている状態で、1話の冒頭から当たり前のようにヒーロー活動が始まるんです。スピード感もあるし1話から全力で走るような作品だから〝しっかりと飛び乗らないと振り落とされちゃう〟そんな印象でした」

——作品自体の印象はどうだったでしょう?

「おじさんヒーローと相対する若くて天才肌の新人のコンビが新しいなって思いましたね。でも、虎徹を初めて見たときはおじさんだと1ミリも思わなかったんです。声も平田（広明）さんですし、なんて格好いいんだろうって思いました。でも、バーナビーから見れば確かにおじさんだし、カリーナが年上男性にほんのりと憧れるのも、高校中学の女子によく見られる〝あるある〟だし、なかなかリアルだなって（笑）」

——〝あるある〟ですか!?

「〝あるある〟ですよ?」

——これは…我々のような中年男性は勇気がもらえますよ。

「（笑）虎徹は格好いいですもんね」

——男も虎徹には憧れると思います。では、ホァン・パオリンの第一印象を。

「ドラゴンキッドのコスチュームを最初に見せていただいたので、その時は〝絵に描いたようなカンフー娘で解りやすいキャラだぞ!〟と。しかも、最初から〝女の子を意識せず男の子だと思って演じてください〟というお話でしたので、私の中ではキャラがほぼ確立した状態でした」

——すぐに役に染まった感じですか?

「むしろ私のほうからパオリンに近寄っていった感じがします。それに彼女の内面描写や言動を見ていくと、私の中にある〝はっちゃけモード〟がパオリンと一緒なんです」

——伊瀬さんは、はっちゃけることもあるんですか!?

「仲のいい友達と遊んでいる時なんて、まんまパオリンですよ！〝ねーねー遊ぼうよ〟とか言ってます。その時の私を役にそのまま出しているので、パオリンは私の一部です。だから『タイバニ』のアフレコ現場はまんまパオリンでいられました。みなさん頼りがいのあるお兄さんたちですし、（寿）美菜子ちゃんは年下ですけどブルーローズの方がしっかり者なので、『タイバニ』ではすごく甘えさせてもらっています」

——それはまるで劇中のトレーニングルームのようですね。

「まさにあんな感じです（笑）」

私の生活の中でもパオリンな瞬間が増えました（笑）

——伊瀬さんが感じておられるパオリンの魅力を。

「どんな困難があっても絶対に心が折れない、前向きで底抜けに明るいところ、かな。みんなと一緒にいれば大丈夫だよ、というある種の楽観主義というか、理由のわからない自信に溢れたところでしょうか」

――演じる上で、意識していたことはありますか？
「演じている私としては、男の子に憧れているという面もあるとは思いますが、それ以上にパオリンにとって男か女かは重要な問題ではなくて、自分の生き方や考え方…どう生きたいかを何よりも優先する子だと思うんです。『The Rising』では髪をバッサリ切ってるんですが〝男の子に見られたいから〟というワケではなく、〝邪魔だから切った〟だけだと思ってます。多分〝女子らしく〟という意味もあまり分かっていなくて、〝みんな同じ人間じゃないか〟って考えてるんじゃないかなあ」
――だから、ヒーローをやっている？
「そう思います。純粋に人を助けたい。人種や性別なんて関係なく困っている人がいたら、ただ助けたい。とてもフラットな気持ちでヒーローをやっているんだと思います」
――でも黄色のカンフー・ジャージは彼女のポリシーでは？
「いや。あれはカンフーが好きだからじゃなくてきっと楽だからです。一枚でピッと着られるからです。でも、女子だったら一度は男の子に憧れる時期って通るんです…」
――っ！　伊瀬さんも通ったのですか？
「通りましたよ。男の子になりたかったですもん」
――ちなみにそれはいつ頃？
「中学生の時でしたね。男の子にあこがれて、髪の毛を超短くしたこともあります（笑）」
――へぇ！　まさにボクっ娘だったのですね。では、『タイバニ』の中で印象に残ったシーンを教えてください。
「『タイバニ』は何気ない日常のシーンが印象的です。そう言う意味ではトレーニングルームでみんなと談笑しているシーンは、それぞれのキャラクターの性格もよく出ていてすごく好きですね。…『タイバニ』はフラットに演じているせいか、シュテルンビルトの世界の中でパオリンとして普通に生活している感覚なんです。ですから印象的なシーンというより、日常の会話の中で受け取った感情の記憶が残っている感じですね」
――本当に役とシンクロしているんですね。
「だから私の生活の中でパオリンな瞬間が増えました。友達や先輩に普通に話して聞いてくれないようなことも、〝ボク、こう思うんだよね！〟ってパオリンが言えばみんな聞いてくれたり、許してくれたり（笑）」
――（笑）。ちなみに『タイバニ』の世界の中で伊瀬さんがずーっと気になっていることって何かありますか？
「実は、巻き込まれ少女の声もやらせていただいてるんですが、彼女が何者なのか気になりません？　学生なのか、フリーターなのか…でも事件のにおいをかぐと、いてもたってもいられなくなる女の子なんでしょうね。もしかしたらNEXTなのかも…事件現場に〝ひゅん！〟って瞬間移動しちゃうとか…」
――それすっごいNEXT能力。自覚してないと大変（笑）。

『The Rising』を経て、パオリンに近づくことができました

――では、伊瀬さんから見た『The Rising』の見所を教えてください。
「TVシリーズと『The Beginning』を経て、より強いバディになった虎徹とバーナビーが引き裂かれちゃうような出来事ってなんだろうっていうのは視聴者として気になるところですね。あとは、パオリンが男の子に憧れている理由ですね。私自身は〝関係ないよ〟と思ってはいますが、パオリンなりの理由と言いますか、思いの淵が垣間見られたらいいな、とは思っています」

私の“はっちゃけモード”が パオリンと一緒なんです

――『The Rising』を経て、どうでしたか？
「そうだよね！って納得する部分も多くて、またパオリンに近づけたかな、と思います」
――注目ポイントは？
「やっぱりゴールデンライアンです。ヒーローの時はクラクラするほど眩しいですが、普段はチャラチャラしていそうな印象。なので〝こんな人にヒーローが務まるのかな？　ボク、心配だよ！〟って思いましたけど、彼の言動がヒーローたちをかき回していきますから。それに、ドラゴンキッドの黄色と色が被っているのが心配です。だから、〝被ってるじゃん！〟というのがライアンを見たときの印象です。もしかしたらライアンと同系色の黄金×黄色コンビで意外と仲良くやれるのかもしれないですが…、パオリンはイヤっていうだろうな…（笑）」
――ライアンの登場で『タイバニ』には9人のヒーローが出てきましたが、伊瀬さんにとってヒーローとはどんな存在ですか？
「私にとってのヒーローは身近にいる人ですね。多分、半径1メートル以内かな？　ちょっと落ち込んだ時に話を聞いてくれたり、助言をしてくれるような。能力や強さが特別なわけではなく、その存在が支えになったり勇気を与えてくれたりする人がヒーローなんだろうなって思います。ヒーローは特別な能力を持った存在ではなく、誰にでもなれるもの。そう思っています」
――まさに『タイバニ』のヒーロー像でもありますね。
「ヒーローに共感できるというのもタイバニの大きな魅力でしょうね。ネイサンやアントニオに共感する人もきっと多いでしょうし、イワンは〝頑張れ！〟って応援したくなる。キースは観ているだけできっと面白いでしょうし。『The Rising』はそうやって共感できるヒーローたちが〝新たな敵〟の登場でかき乱されていくので、その行方をぜひぜひ楽しんでもらいたいですね。もちろん、普段アニメに慣れ親しんでいない方でも、映画館でポスターや予告編を見たとき〝このアニメはすごいことが起きるんじゃないか？〟という期待を裏切らない作品になっていると思うので、ぜひ観ていただきたいと思います」
――では最後に、伊瀬さんに是非伺いたい質問がありまして…。
「なんですか？」
――『The Rising』は寒い時期の公開ですので、防寒のコツを読者に教えていただければと。
「私の寒さ対策はとにかく着込みまくること！　マフラーやカイロは手放せないですね。それと、とっておきなのは…『タイバニ』のTVシリーズと『The Beginning』を見返せば温かくなりますよ〜。（パオリンの声で）ボクも、そう思うな！」
――あ！パオリンと巻き込まれ少女のシーン、もう一度見返したくなりました！

Profile

いせ・まりや●9月25日、神奈川県出身。アニメ『Yes!プリキュア5』春日野うらら／キュアレモネード役、『ポケットモンスターXY』ユリーカ役、『HUNTER×HUNTER』キルア役、「宇宙兄弟」オリガ役などに出演するほか、女優、ナレーターとしても活躍中。

HERO Interview 08

折紙サイクロン／イワン・カレリン
岡本信彦

ド派手な和テイストの風貌とは裏腹に、画面上にこっそりと映り込む“見切れ職人”として活躍するネガティブ・サムライ。一躍話題となった“見切れ”の芝居はどのように作りこまれたのか、その全容も明らかに…。

―まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「最初に演じるキャラクター設定をいただきまして、演じるイワン・カレリンは引っ込み思案でネガティブな役だと伺ったのですが、初めてイワンを見た時に、信じられないほど目付きが悪くて、驚くほど格好よかったんです。そのビジュアルから、ネガティブ要素を見つけることができず、オリジナル作品でしたので事前に原作を読むこともできず〝これはアフレコ初日に懸けるしかない〟と覚悟を決めました」

―それでいざ初日を迎えてみたら…。

「セリフが〝よっしゃー!!見切れたァ!!〟と〝ばっちり企業名、アピールするでござる〟の2つしかなくて。イワンについてディレクターさんに聞いたら〝ヒーローになった時にスイッチが入る〟ということで、なるほどヒーローものだけに変身したら性格ごと変わるのか…と。でもよくよく教えてもらうと〝自力で性格を変えようとしている男〟ということで、覚悟の初日を終えてますます謎が深まったという…」

―見切り発車だったワケですね。

「結局、ヒーローアカデミーの回（8話）でようやく、イワンのことを知ることができました。イワンは1話でこそ常人離れした動きで見切れていたのが、回を追うごとにヘタレ度がアップしていくというダメキャラでした。ただ、一番ダメということは一番伸びしろがあるだろうし、台詞を言えば言うほど可愛くなる…8話以降はそこに魅力を感じながら演じていました。最終的には熱い思いや使命感が芽生えたし、可愛いけど男らしさも備わってきてすごく魅力的なキャラになったと思っています。ただ、見切れに台詞はいらないんですよね。そこが〝声優殺し〟な役だなあと…」

―歯がゆさもあったのですか?

「歯がゆいんですが、そこが彼の魅力であり面白さなんですよね。僕もオンエア見ながらつい自分を…折紙サイクロンを探していましたから」

―ところで、見切れているときのお芝居はどのように?

「実は、声を入れてもいいですか?って聞いたことがあるんですが、〝距離が遠すぎるので入れないで〟と言われました。ですから台詞を言うことはなかったです…」

―唾をゴクリと飲んでみたり?

「ただ心で演じていました」

―見切れの極意を聞いた気がします。ほかに役作りをしたことは?

「イワンの気持ちを分かるべく、『The Rising』のアフレコ前に、日光江戸村で本物の手裏剣を体験してきたのですが、難しかったですね。思ったところに投げるのは至難の業でした。しかも、シュッシュッと声を出して投げるのは無理です。強いて声を出すなら〝シュッ〟でした」

―アフレコではその経験が実際に活かせたのでしょうか?

「はい。イワンの気持ちにまたもうひとつ近づけたと思います。あとは、個人的に将棋が趣味なので、いつかイワンが将棋をさすシーンがきたら、嬉しいですね」

―楽しみですが…セリフは「王手!」くらいでしょうか。

「やはり、〝声優殺し〟ですね」

ルナティックとジェイクの本気勝負が見てみたいですね

―岡本さんにとって『タイバニ』の印象的なエピソードは?

「子供的な感覚でお話すると、NEXT能力ってすごく夢があると思っていて。友達と能力について話をするんですが、いくつかある最強能力にバリアがあるんです。バリアが武器になる上、人の心まで読めるという2つの超強力なNEXT能力を持つジェイクは凄い敵で…よく勝てたなって思います。イワンはやられてしまうんですが、僕個人としてもジェイク役の（藤原）啓治さんとお芝居の上で対峙できて、凄い経験でした」

―ジェイクはヒーロー史に残る最強キャラですね。

「だから、NEXTとして最強クラスのルナティックとジェイクの本気勝負が見たいんです」

―はーそれは凄そう。では岡本さんが注目しているNEXTは?

「スモウサンダーってご存知ですか?」

―2部ヒーローですね?

「彼とは和テイストのヒーローとしてキャラが被るんですよ。それに、能力はわからないんですが、スモウサンダーの方がきっと…強い。イワンを脅かす存在としてドキドキしています。そんな意味では楓ちゃん（虎徹の娘）もライバル視しています」

―な、なんで?

「実は、さっき話した最強能力のもうひとつが楓ちゃんの持つコピー能力（触れた相手の能力を自分のものにする）。つまり、イワンの擬態能力（能力はコピーできない）の上位能力と、僕自身考えているんです」

―言われてみれば確かに…。

「実は、イワンが修行すればいつか能力もコピーできるようになるんじゃないか、そんな想像をしてひとりで大盛りあがりしたこともあったんです。でも6話で〝それだけはできないんです〟ってイワンが自分で言っちゃった。なので、個人的にはスモウサンダーと楓ちゃんの動向から目が離せないんです」

―ぼ、僕も目が離せなくなりました…。では、そんな岡本さんにとってヒーローとはどんな存在でし

Profile

おかもと・のぶひこ●10月24日、東京都出身。アニメ『青の祓魔師』奥村燐役、『バクマン。』シリーズ 新妻エイジ役、『とある魔術の禁書目録』シリーズ アクセラレータ役、劇場アニメ『サカサマのパテマ』エイジ役などに出演。2014年には『ハイキュー!!』西谷夕役、『魔法戦争』七瀬月光役 にも出演が決定。2012年より歌手活動も開始、そのフィールドを広げている

見切れの芝居は ただ心で演じました

よう？

「僕が思い描いていたヒーロー像って〝完璧〟ってイメージだったんですが、虎徹っちゃんを見てから…」

――岡本さんは虎徹っちゃんと呼ぶんですね？

「はい。僕は虎徹っちゃん派です。というのも、彼は相当ヒーローっぽいといいますか、歳を取って能力減退して崖っぷちなんですが、それでも心の部分でみんなを助けるっていう熱い心をもっているな、と。その思いの強さにヒーローを感じるようになりました」

――「タイバニ」と出会ってヒーロー観が変わった？

「…かもしれないですね。それまでだったら、完璧で最強なスカイハイがダントツで理想のヒーローだったと思います。今は僕の中で2つのヒーロー像ができたように思います。でも、ただ強いだけでなく心の強さが大切だと感じさせてくれる部分に「タイバニ」の魅力があると思いました。ヒーロー8人にそれぞれ想いがあって…さらにルナティックにも彼の正義がある。でも、悪は排除するというのは僕のヒーロー像ではないんですよね。やっぱり、虎徹っちゃんが理想のヒーロー像に近いと思います」

折紙サイクロンのライバルはスモウサンダーと楓とライアン？

――岡本さんにとって「タイバニ」はどんな作品と捉えていますか？

「ヒーローの人間味がとても豊かな分、一緒に観た人と会話が弾む作品です。知らない人同士でも「タイバニ」を知っていれば会話できる。それに「タイバニ」のキャラの話って切り口としてどんどん盛り上がれると思うんです。しかも〝自分の中のヒーロー像〟って男にしかないものだと思っていましたが、なんと女性にもあったというのを「タイバニ」で学びました。男女問わず自分のヒーロー像を持ち寄って語れば何時間でも、何日でも語れると思います。あとは、実在する企業を背負って演じられたのも幸せでした。ナンジャタウンは遊びに行きましたね。実は大好きなんです。コラボ商品は美味しいですし…（ナンジャタウンの話題でしばらく盛り上がる）…筋肉痛になりましたよ！」

――まさに、スポンサーを大事にする「タイバニ」のヒーローのようですね。では、このあたりで「The Rising」の見所をお願いします。

「ヒーローが輝く瞬間というのは、強力な敵と戦って勝つことだと思うんです。ですから、子供心を掻き立てて言わせていただくと、『The Rising』はかなり格好いいと思います。そして注目して欲しいのは新キャラです。とにかく性格もぶっ飛んでいて、ヤバイです」

――新キャラという意味ではゴールデンライアンも相当ヤバイです。

「ビジュアルイメージだけで話すと、彼は第一印象が悪いですね。絶対にいいキャラじゃない。間違いなく強いビジュアルですけど、雰囲気は最悪ですよ。僕、第一印象で悪そうだなって思ったのはイワンくらいで、あとはみんな好印象だったんです。ある意味ネイサンはヤバそうだなって思いましたが、イイ人オーラが凄いでしょう」

――完全にイイ人の顔してます。

「虎徹っちゃんも、バーナビーも格好いいから、ライアンは格好良くなくてもいいんじゃないだろうか…と思っていたんですが、めっちゃ格好いい。しかもヒーロースーツ見たら、格好いい上に間違いなく強そうでしょう？」

――んん？　ちょっと負け惜しみ入ってません？

「彼の登場でイワンのポジションがまた危うくなるかもしれません」

――スモウサンダーと楓とライアン。ライバルが3人になりました。

「…脅威ですよ！」

――でも、放送スタート前から折紙サイクロンに熱視線を送り続けたテレビブロスとしては活躍を祈らずにいられません。

「ありがとうございます。最初のタイバニ表紙も驚きましたが、まさかあの段階で折紙サイクロンがブロスさんのロゴの中に見切れているとは…驚異でした」

――ありがとうございます。では、折紙サイクロンの「The Rising」での活躍ぶりを教えてください。

「見切れも彼の魅力ですが、キャラとして大きく成長した部分に期待して欲しいですね。これまでと違う表情を見せてくれるハズでござる」

――わかりました。見切れ以上にイワンの活躍に期待したいと思います。

NEW HERO Interview 09

ゴールデンライアン／ライアン・ゴールドスミス

中村悠一

『The Rising』で颯爽と初登場するゴールデンライアンはゴージャスなヒーロースーツに、慇懃無礼な新キャラだ。ヒーローを演じるキャストの中で、"視聴者感覚"に最も近い中村さんにとって『タイバニ』の魅力をズバリと聞いた。

──中村さんが『タイバニ』をご覧になられたのは『The Rising』への出演が決まってからだったとか。

「そうです。もちろん人気作品であるという評判も聞いていたのですが、それまで観る機会がなくて。それで、ゴールデンライアン役を頂くことになり、いざ1話を見たら2話、2話を見たら3話…と、仕事として観ていたはずが、どんどん続きが気になって、自然と作品の世界観に引き込まれていった感覚でした」

──視聴者の観点で『タイバニ』体験をスタートされたわけですね。その時に感じた作品の魅力というのは？

「実際に観るまでは"主人公がおじさんのヒーローもので、バーナビーという相棒がいる"くらいの情報しか持ち合わせていなかったんです。だから、最初の印象は"なんでヒーロースーツに企業名が入っているんだ？"ってことでした。あまりに意味が分からず"ワイルドタイガーはSoft Bankの戦士なのかな？"という疑問は大いなる謎でしたね（笑）」

──（笑）とにかく目立ちますもんね、企業名が。

「そうなんですよね。でも、1話を観たら"なるほど！ こういうことか！"と。ひとつのショーの要素として、ヒーローたちが犯人を捕まえる様をテレビ中継するという世界観とは、僕が思っていた方向性とまったく違っていたので、意外すぎて面白かったです。もしかしたら『HERO TV』で派手に中継することで、犯罪者も注目を浴びる。シュテルンビルトではそうすることで犯罪を抑止する役割を担っているのかもしれないな、と考えてみたり。設定や世界観に対して色々と深読みできる要素も魅力だと思います」

──確かに深読みを誘う作品ですね。

「それと、アメコミ風なのにメイド・イン・ジャパンの匂いを感じる部分も大きいと思います。アメコミではなくて、日本の色を全面に出して"アメコミ風"で留めたから面白いんですよね。ヒーロースーツのデザインもそうですが、設定やストーリー…随所に日本のエッセンスが盛り込まれていると思います。昭和節でいぶし銀のオジサンキャラや、世話好きのおネェキャラというのは日本的な世相も反映しているし、とにかくいろんな要素をふんだんに盛り込んだなとニヤリとしてしまうところ。そこが面白いです」

──視聴者感覚で印象に残っているTVシリーズのシーンは？

「やはりブルーローズの恋模様ではないでしょうか。作品に恋愛要素は必要だと思いますが"えぇ!? そこなの？"というまさかの女子高生が子持ちに恋する設定。あまり見たことがないシチュエーションなので珍しいなと思いつつも、虎徹には子供もいるのに大丈夫なのか、となぜか僕が心配するほどでした（笑）。だけど、そのエピソードも含めて虎徹は女性人気を得たということなので、中年の男性にはなんて夢がある話だと羨ましくもありました（笑）」

ヒーローらしさよりもひとりの人間として演じることを心がけました

──ライアン役を演じるにあたって準備したことはありますか？

「まずTVシリーズを見たときに、ヒーローたちがさも見得を切るような（オーバーな）お芝居ではなく自然体で話していることに新鮮さを感じたんです。最初の印象ではアメコミ風で絵のタッチも派手ですから、特にヒーロー役であるならば、"貴ィ様ァが（タメ）、犯人だなァ"と大げさな芝居が求められるのでは、と思っていました。でもよくよく観ていくと、ヒーローに重点を置いた芝居よりも人間ドラマを軸にキャラクターの心情を表現しているのが『タイバニ』。虎徹やバーナビーのパートは特に"人間ドラマ"を丁寧に演じているんですよね。だからライアンも一人の人間として演じるように心がけました」

──既に出来上がっている『タイバニ』の世界観への"入り方"については？

「途中から入ってきた新参者だからこそ、自分のやりたいように演じた方がむしろライアンの置かれた環境や現状に近いものになるんじゃないか、と思って臨みました。ライアンは"オレ様キャラ"ではあるのですが、わざわざ自分から周囲に対して威圧的な態度を取ったり、壁を作るタイプではないんですよね。ライアンという男は知らない相手の懐にさえも土足で飛び込んでいく性格。僕の感覚では距離感の置き方が独特といいますか、人との距離観を感じない男。例えばですが、イマドキの新入社員が上司に対して『マジで？』、『ホントに？』ってタメ口になるような感じ。でも本人には決して悪気がないから、上司も扱いに困ってしまうという…」

──それは、ある種現代の会社組織が抱える悩みの一つでもありますね。

「そうなんですよ。だからバーナビー視点で見ていくと、虎徹という相棒が居るのにもかかわらず、急に新しいパートナーとして慇懃無礼な態度のライアンが出てきたら、嫌だと思うんですよ。まさに可愛げのない部下ですね。しかも、バーナビーはTVシリーズを見る限りは、自分から周囲に打ち解けていくことは絶対にしない男です」

──どう見ても相性悪いように見えますねぇ（笑）。

「そうなんですよね。でも、改めて2人の関係性を見てみると、歩み寄っているのは、もしかしたらライアンの方かもしれないんです。ライアン、バーナビーの視点では、相容れないと思うんですが、ほかのヒーローたちから2人を見てみると、また違ったように見える一面もあるかも」

──ということは！ 部下に苦労している上司の方には、もしかしたら人間関係のヒントがあるかもしれませんね。

『タイバニ』に登場するヒーローはそれぞれに違う色の正義を持っている

──中村さんのヒーロー観をぜひ伺いたいのですが。

「自分の価値観に根ざした"正義"を持っていることがヒーローの条件です。ただ正義を胸に秘めているだけでは、普通にイイ人であって、ヒーローとは違うんですよね。迷うことなく揺るぐことなく、信念を

タイバニはアメコミ"風"でいて随所に日本のエッセンスが感じられるから好き

持って正義を行動に移す力をもっている人こそがヒーローだと思います。そういう意味では、やっていることは悪人ながら、ルナティックにも自分の中に確固とした正義があると思うんです。（ルナティック役）遊佐（浩二）さんと"虎徹もルナティックも同じように正義を抱えているけど、その手段とベクトルが全く違うから分かり合えないのかも"と話していたのですが、『タイバニ』ってヒーローそれぞれに"色の違う正義"を持っているんです。だから、正義は決して一色ではないということ、僕たちが信じて疑わない正義に対して"それは間違っている！"という正義だってあることに、改めて気付かされた作品ですね」

——ライアンにも"正義"が？

「個人的には彼なりの信念＝正義があるように思えてなりません」

——"色の違うそれぞれの正義"、その輪の中にいきなりライアンが入ってくるのが『The Rising』ですね。

「そうですね。彼はある意味、土足で入ってきますからね」

——（笑）。そんな"土足で入ってくるキャラ"を演じられた中村さんご自身として、見所というのはどういった部分でしょう？

「やっぱり一番の魅力は虎徹とバーナビーの物語です。年齢や考え方の違いを乗り越えて相棒になった2人が、それぞれに違う境遇を目の前にする。そして違う道を歩み始めた2人がどうやって人生を歩んでいくのかが大きなポイントです。あと、初めて『タイバニ』を見る人はTVシリーズを見ておくと、斎藤さんが聞こえないような声で話してもきっと驚かないと思います。僕はある意味で斎藤さんに一番驚かされましたから（笑）」

——（笑）。ということは『The Rising』では斎藤さんも活躍するのですか？

「…しますね。しかもライアンと重要なシーンを演じることになります」

——間違いなく、そのシーンは見せ場ですね…。では中村さんが注目しているヒーローは？

「やっぱりブルーローズですね。『The Rising』では意外な見せ場も多くて、注目している立場としましてはかなり満足でした」

——ちなみに、視聴者感覚として中村さんのお気に入りキャラも伺っておきたいのですが。

「先日のイベント『SUPER PRELUDE』でも話したんですが、ネイサンは気になるキャラなんですよ。ポジション的に最もおいしいキャラ。ヒーローたちの困ったときの相談相手で、おネェがゆえの絶大な安心感がありますよね」

——老若男女問わず、全員が一度はネイサンに相談に乗ってもらっているんじゃないでしょうか？

「そうなんですよね。つまり言い換えると、ほかのヒーローは人の話を聞かない人ばかりってことなんですが（笑）」

——そうして、結果的にヒーロー全員にスポットがあたっていくという。

「そうそう。『The Rising』でもこれまでのTVシリーズと同じように、虎徹とバーナビーの話ではあるんですが、ヒーロー以外のキャラも相変わらず目立っています（笑）。そこは『タイバニ』の魅力だと思うので、ぜひとも楽しんでもらいたいですね」

Profile

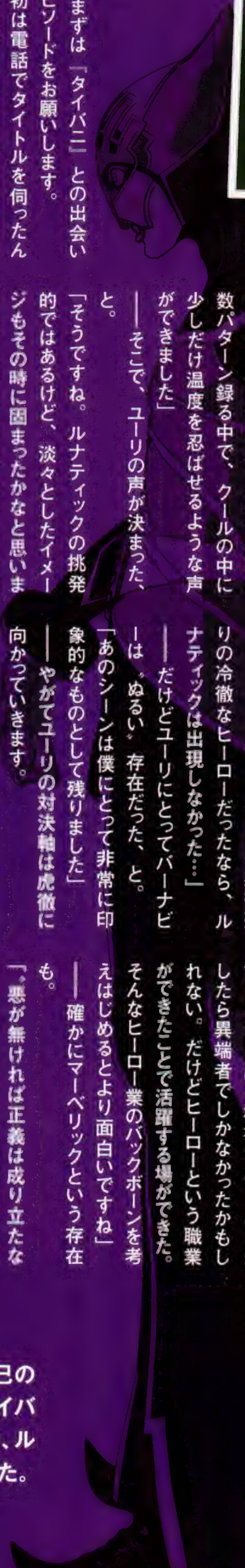
なかむら・ゆういち●2月20日、香川県生まれ。『おおきく振りかぶって』阿部隆也役、『マクロスF』早乙女アルト役、『機動戦士ガンダム00』シリーズ　グラハム・エーカー役などアニメ作品の他、『アベンジャーズ』キャプテンアメリカの吹き替えなど映画作品、ナレーションなど幅広く活躍。2014年はアニメ『Z/X IGNITION』黒崎神門役に出演。

ENEMY Interview +1

ルナティック
／ユーリ・ペトロフ

遊佐浩二

昼間は司法局に勤めながらヒーローの監視も行い、夜は己の正義に従い死を持って罪を断罪するルナティックに…。『タイバニ』の世界において影のドラマを背負ってきたユーリの魅力、ルナティックの考える正義観について、演じる遊佐さんに聞いた。



――まずは『タイバニ』との出会いのエピソードをお願いします。

「最初は電話でタイトルを伺ったんです。〝『TIGER & BUNNY』〟と。その時は、ワイルドな男とバニーちゃんという可愛い女の子が出てくるようなゴキゲンな作品だと勝手に思っていたんです。そうしたら、非常にハードでアメコミ風ともいえる桂正和先生のイラストに、非常に世知辛い内容のお話でして。企業の事業撤退といったフレーズやサラリーマン的な話もあって、自分の第一印象とのあまりのギャップにまずは驚きました。あとは、ヒーローが職業として成立している設定も革新的だと感じました」

――その中でユーリ・ペトロフと出会ったのですね。

「ええ。彼はひと目見て善人には見えない顔をしていますね。そうしたらルナティックのマスクはさらに怖かったという…」

――ユーリはどんな声を出しそうだと感じましたか?

「役人で裁判官という設定は聞いていましたので、やはりマジメな感じでいてクールに淡々と話すイメージでしたが、ルナティックになったときはヒーローに対して挑発的な態度を取る。ある意味で両極端なので、どう折り合いをつけながら同じ人物にしていこうか、というのは特に考えたポイントです。最初のアフレコは裁判所のシーン（5話）だったのですが、ラストの〝あなた方への協力は惜しみませんよ〟という台詞を数パターン録る中で、クールの中に少しだけ温度を忍ばせるような声ができました」

――そこで、ユーリの声が決まった、と。

「そうですね。ルナティックの挑発的ではあるけど、淡々としたイメージもその時に固まったかなと思いますし、一貫してブレずにユーリを演じ切れたと思っています。ただ、演じ方をほんの少しだけ変えたのはユーリの内面が描かれた16話。彼の内面のブレを少しだけ芝居に乗せた感じですね」

――では印象的なシーンというのも…。

「その16話ですね。泰然自若といいますかあまり動じないルナティックに、突如として描かれた壮絶な内面描写ですから。たとえそれが〝正義の行為〟だとしても子供時代に自らの手で父を殺してしまう。今ルナティックは裁判官として罪を裁いてはいますが、実は自らも業を背負っており内面は揺らいでいるという深い心理の部分。そこに仄かな人間味があるとも感じました」

――一方でルナティックの魅力はどのように?

「ひたすら自分の信じる正義だけを追い求めるストイックなところでしょうか。死刑制度のないシュテルンビルトで〝殺人には死を〟という裁きを下すというハードボイルドなキャラも惹かれる部分ではあります。印象的なのは『The Beginning』でバーナビーへの感情が明らかになる、TVシリーズでは描かれなかった場面。彼は実は冷徹なヒーローの登場を待っていて、だからこそ裁判官でありヒーロー管理官をしているのでは、と匂わせるシーンですが、きっとバーナビーがユーリの期待通りの冷徹なヒーローだったなら、ルナティックは出現しなかった…」

――だけどユーリにとってバーナビーは〝ぬるい〟存在だった、と。

「あのシーンは僕にとって非常に印象的なものとして残りました」

――やがてユーリの対決軸は虎徹に向かっていきます。

「絶対的に相容れないタイプが虎徹ですね。2人にはそれぞれ自分の人生経験を経ての信念がありますから、殴りあったぐらいで考え方が変わる人間ではないのもわかっているんでしょうが、拳を交わす。ユーリは人生に救いを求めるような人ではないけど、もし唯一彼に救いを与えられる存在がいるとしたら、罪を憎んで人を憎まない虎徹なのかもしれません」

――そこには2人にしかわかりえない〝因縁〟があるんでしょうね。

ルナティックは僕のヒーロー像そのもの

――遊佐さんが感じておられる『タイバニ』の魅力は?

「ゼロからこの大きなスケールの世界観を組み上げ、完全に完成された世界で多彩なキャラそれぞれが躍動する。だからこそどの角度から見ても、面白いんですね。それと、ドラマとして筋が一本ビシッと通っているから、アニメに興味がない人でも楽しめるのだと思います。アクションに特化していないのは、ヒーローたちの人間ドラマを色濃くするため。だから誰が何を考えて、次の展開はどうなるのか、それを考えるのが楽しくなるのではないでしょうか」

――設定に対して深読みもしたくなります。

「NEXTという存在だって、もしかしたら異端者でしかなかったかもしれない。だけどヒーローという職業ができたことで活躍する場ができた。そんなヒーロー業のバックボーンを考えはじめるとより面白いですね」

――確かにマーベリックという存在も。

「〝悪が無ければ正義は成り立たない〟というNEXTの立場としての発想も、わからなくはないんですよね」

――確かにヒーローや正義の在り方も深く考えさせる作品だと思います。ちなみに、遊佐さんにとってヒーローとはどんな存在ですか?

「他人の知らない所で、一人で宿命を背負って戦う孤独で孤高の存在であると思ってます。例えば、仮面ライダーやタイガーマスクといった他人には決して苦労や宿命を背負わせない、自分ひとりで抱え込むような…日本人的な考え方かもしれませんが、そうした一人で闇を抱えたダークな存在にヒーローを感じますね」

――やはりユーリにヒーローを感じる部分も…。

「そうですね。特にルナティックは

Profile

ゆさ・こうじ●アニメ「薄桜鬼」原田左之助役、「青の祓魔師」志摩廉造役、「THE UNLIMITED 兵部京介」兵部京介役、映画『バットマン』シリーズ　スケアクロウ役など、アニメ映画ナレーターとして幅広く活躍。2014年には「pupa」鬼島四朗役、『鬼灯の冷徹』白澤役に出演予定。

僕のヒーロー像そのものと言ってもいいかもしれません。もちろん彼独自の正義は歪んでいるかもしれないけど、自らを傷つけてでも曲げない強い信念と覚悟には共感できる部分もあります」

――『タイバニ』を通じて、ヒーロー観に変化はありましたか?

「一般的なヒーロー像というのは絶対的な強さと鋼の精神力を兼ね合わせた存在だったんですよね。NEXTも特別な力を持ってはいますが、ベースは普通の心を持った人間。ヒーローも普通の人とそんなに違わないというところをあえて描いて、しかも職業としてNEXTであれば誰もがなれる可能性がある。決して遠い存在ではないから〝みんなで応援する〟という部分が決定的に違いますよね。そして視聴者も一緒になってヒーローを応援するという〝一体感〟が感じられたのもまた、新しいヒーロー観の発見でした」

虎徹とユーリの対決の裏にある作品のもうひとつのテーマ

――それでは、『The Rising』のお話を。ズバリ見所は?

「会社の世知辛さが、全面に押し出されていますね。アポロンメディアに新しくやってくるCEOが（大塚）芳忠さん…じゃなかったシュナイダーですが、彼の言動には良い人な感じが一切ないんです。会社トップとしての冷酷な判断、シビアな経営…もちろん人間関係にも影を落としていくわけで…」

――身につまされるフレーズのオンパレードです…。

「ワイルドタイガーとバーナビーのコンビを解消して、新たにライアンというパートナーが登場するという注目すべき展開は、元はといえば会社の経営不振やCEOの交代による人事異動によるもの。つまり『タイバニ』の企画段階から根底としてあった〝サラリーマンヒーローの悲哀〟がパートナー交代の起因になっているんですよ。そこが、あぁなるほどなぁ、と感じさせられるし世知辛さは一貫してブレないんだなと思いましたね」

――ただヒーローたちの立ち位置は一変しました。

「そういう意味でいうと虎徹は1話の段階では、ヒーロー業をしていることを娘の楓にも隠していましたし、ヒーロー内でもロックバイソンくらいしか友達がいなかった。ある種、ルナティックのように孤立した立ち位置だったのが、環境が一変しましたよね。ですから、環境が変わった中で、今度は虎徹がどんな選択をしていくのか。そこは僕自身も楽しみな部分です」

――その虎徹とユーリとの関係性はどうなるでしょう?

「2人とも信念が強い男ですから、根底の部分ではきっと何も変わらないのでは…と思います。2人が相対するときに譲り合えない部分でもある〝罪だけを憎むのか、人も憎むのか〟。この決して答えのでない因縁は『タイバニ』のもうひとつのテーマとして流れているんじゃないか、と思っています」

――1話からそれぞれの道を歩んできた2人の交わす会話にも注目したいところですね。
では、新ヒーロー・ゴールデンライアンは、遊佐さんにはどのように見えましたか?

「エンターテイナー性を持ち合わせた職業ヒーローということで、『タイバニ』を代表するヒーローだと思いましたね。これまでのヒーローはみんな職人気質なところがあって、ブルーローズも納得できないと上司に文句を言ってみたりする。だけど彼はお金をもらってやりたいことを好きなようにやる感じです。素性はわかりませんが、職業ヒーローとしては、もしかしたら彼が正統派ヒーローかもしれないですね」

――では最後に、遊佐さんと同世代の男性陣にメッセージをお願いしても良いですか?

「そうですねぇ。30代40代ぐらいの方だったら、ヒーロースーツに一度は憧れたことがあるんじゃないかと思うんですけれども、桂正和さんがデザインした洗練されたスーツは僕ら世代なら着てみたいって思うんじゃないでしょうか？ あと、まだ『タイバニ』をご覧になっていない方がいれば、ぜひ1話から見ていただきたいですね。最初は少し世知辛い現実も突きつけられるので、面食らうかもしれませんが、1話を観終わる頃には次が見たくなっていると思います」

ユーリの声はクールの中に少しだけ温度を忍ばせたんです

アポロンメディア

かつてのオーナー、アルバート・マーベリックの逮捕によりアポロンメディアの経営状態は悪化の一途をたどっていた。そんな窮状を救うべく、カリスマ経営者として知られるマーク・シュナイダーが新たなオーナーに就任。会社の立て直しを図るべく、シュナイダーはヒーロー事業部にかなり独善的な改革を起こすのだが…。

マーク・シュナイダー

立ち上げた事業を成功させているカリスマ実業家。どうやらアレキサンダー・ロイズ以上にビジネスライクな考え方の持ち主で、大胆なコストカットを断行しているもよう。低迷するヒーロー事業部にも独断と偏見で改革を行い、2部リーグで活躍中のワイルドタイガーにバーナビー・ブルックス Jr.の1部リーグ復帰を持ちかける。

期待

新コンビ!?

ライアン・ゴールドスミス／ゴールデンライアン

アポロンメディア新オーナーのシュナイダーがスカウトしてきた謎多き"ヒーロー"。これまではさまざまな街をさすらいながらヒーロー業を行っていたらしく、かなりの実力者らしいが、シュテルンビルトでは無名に近い存在。

▶**能力**／一定範囲内ではあるが、重力を増幅させることができる。

バーナビー・ブルックス Jr.

マーベリック事件のあと、一時は虎徹とともにヒーロー業を引退したものの2部ヒーローとして復職。2部リーグでも虎徹とともに活躍していたが、シュナイダーの意向で1部リーグへ復帰する。

▶**能力**／5分間だけ身体能力を飛躍的に向上させることができる"ハンドレッドパワー"。

そろそろ別の道を進むのも悪くねぇんじゃねぇのか?

その程度だったんですか。あなたのヒーローに対する思いは。

鏑木・T・虎徹／ワイルドタイガー

かつては"正義の壊し屋"の異名で活躍したベテランヒーロー。能力減退という厳しい現実もあり一度は引退するが、2部ヒーローとして復職。バーナビーとともにコンビを組みヒーロー業のかたわら後輩たちへの指導も行っている。

▶**能力**／1分間だけ身体能力を飛躍的に向上させることができる"ハンドレッドパワー"。

不抜けた正義で悪を裁けるものか

司法局

ユーリ・ペトロフ／ルナティック

シュテルンビルト司法局の裁判官兼ヒーロー管理官。表の顔は法に基づき司法手続きを行う役人だが、裏では殺人を犯した者は死をもって制裁するという独自の正義観を持つルナティックとして行動している。

▶**能力**／青い炎を自在に操ることができる。

2部リーグ

加熱するヒーロー人気に近年発足され2部制になったヒーロー業界。『HERO TV』で中継される凶悪犯罪に関しては、これまでどおり1部リーグが担当し、2部は軽犯罪を取り扱っている。

▲ビジュアル的にもかなり個性的なヒーローが揃う2部リーグ。(TVシリーズ14話より)

2014年2月8日公開!

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』

テレビシリーズ第25話以降の新しいストーリーとして描かれる『The Rising』。ここでは、まず公開直前のヒーローたちのちょっとした変化を観察しながら25話以降の状況変化を踏まえた立ち位置を確認。まったく変わっていない人もいれば、イメージチェンジした人もいて、そのあたりもストーリーのヒントになっているかもしれませんよ!

女神伝説

シュテルンビルトに古くから伝わる伝説。その一説にはこうある。
「人々がまだ正義という言葉さえ知らなかったはるか昔。
一人の女神がシュテルンビルトの大地に小さな町を創った。
町の人間は、欲望のままに略奪を繰り返しては、互いに傷つけ合い暮らしていた。
『汝、己の業を悔い改めよ。さもなくば天罰が下るであろう』
女神から数々の天罰を下されても尚、正しい心を持とうとしない人間たち。
最後に女神は全てを無に還すべく
町を覆い尽くすほどの、深く暗い大穴を開けた…」

HERO TV ヒーロー捕物劇をド派手に中継

1部ヒーロー 人気ランキングに大きな動きが!?

イワン・カレリン／折紙サイクロン

やや髪が伸び、さらに目つきが悪くなったようにもみえる。得意の見切れにも変化が…あるのか!?

アントニオ・ロペス／ロックバイソン

ウエスタン方面にイメチェンしたアントニオ。その服装の変化からか、若干スリムな感じも感じる。ランキングにも変動はあるのか?

キース・グッドマン／スカイハイ

爽やかなイメージはそのまま変わらないキング・オブ・ヒーロー。

ネイサン・シーモア／ファイヤーエンブレム

企業オーナーにあるまじきファッションはさらに前衛的に!ますますエッジの効いた髪型に!

ホァン・パオリン／ドラゴンキッド

TVシリーズラストでは女の子らしさが垣間見えたが、一転してますますボーイッシュさに磨きがかかった。ヒーロー業専念への決意の現れか、それとも!?

カリーナ・ライル／ブルーローズ

ヒーローとしての自覚から成長を遂げた様子。少し大人の女性の落ち着きさえ感じさせる佇まいに。

暗躍する謎のNEXT

シュテルンビルトで次々に起こる「女神伝説」を模したような怪事件。その陰で暗躍する正体不明の3人のNEXT。全てを無に還すべく大きな災いが起きたとされる「ジャスティスデー」に、女神伝説は"完結"を迎えるのか…!?

タイバニ、ついにクライマックス——！

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』 公開直前特集！

完全オリジナル作品として2011年4月に放送スタートした『タイバニ』。ついに第2作目となる劇場版が公開！ リストラの危機、企業買収による移籍、同僚社員（相棒）との確執、年頃の娘とのすれ違い、能力減退による引退、からの電撃復帰…。それはもうおよそヒーローとは思えない数々の苦難を乗り越えてきた、ベテランヒーロー・ワイルドタイガーこと鏑木・T・虎徹。ついに、彼の物語がクライマックスを迎えるのか？ ここでは、公開直前ギリギリまでお見せできる、シーンカットから広角的に『The Rising』の見所に迫っていく。

虎徹、去る…

どうなる!?虎徹

ニット帽!?

虎徹のファッションも一変。チェックのシャツにニット帽というえらくラフでカジュアルな服装のシーンも。こりゃもしや流行りのウォームビズ・スタイルか!?

ランニング姿だと!?

そして、私生活にも変化があった模様だ。ビールを飲みながらパソコンをチェックする虎徹のスタイルはランニング一丁。まさかの昭和のオッサンスタイル!?いずれにしても虎徹にとって大きなターニングポイントを迎えていることは間違いなさそうだ。

そして、沈黙を破る謎多きNEXTたち

初登場となる新NEXTがこの3人。ビジュアル的には、アブない奴とセクシーな姉ちゃんとご老人だ。彼らの背景や関係性は不明だが、名前はマックス、カーシャ、ジョニーであることはわかっている。なにやら女神伝説の〝何か〟に関係ありそうだが、どう見てもこの3人が知り合いのようには見えない。…まさか、3兄弟（妹）とか!?

▶とにかく強そうな3人の戦闘シーン。かなり過激なNEXT能力を持っているようだが、その全容はまだ見えない。そんな中で、注目すべきは彼らに対し鮮やかな刀さばきで立ち向かっている折紙サイクロンだ！ テレビブロスでも常に注目し続けてきた彼が、見切れることなく戦いの中心人物として活躍する日がついに、ついに、来た——（のか!?）

新コンビ結成を機に、虎徹とバーナビーは、それぞれの思いを胸に、それぞれの戦いの場へと向かう…！

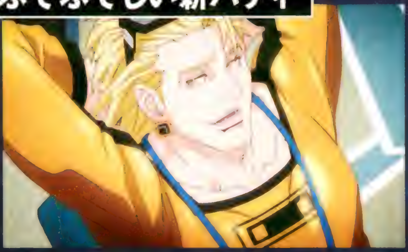
物語は、虎徹とバーナビーが2部リーグのヒーローとして復帰してから数ヵ月後。そこには、2部のヒーローたちと汗を流し、軽犯罪の取り締まりに精を出す2人がいた。一方で、1部リーグでは、6人のヒーローたちがこれまで以上に活躍を見せ、シュテルンビルトの治安を守っていた。

そんな中で、マーベリックの逮捕により経営不信が続いていたアポロンメディアに、カリスマ経営者として知られる新オーナー・マーク・シュナイダーが就任する。経営立て直しを図るシュナイダーは、ヒーロー事業部の中でも2部でくすぶっている虎徹とバーナビーに目をつける。そして、自らがスカウトしてきた新しいヒーロー・ゴールデンライアンをバーナビーの新しい相棒としてデビューさせ、1部での躍進を狙うのだった。

バーナビーの1部復帰、新ヒーローの登場に沸くシュテルンビルトだったが、時を同じくして〝街に古くから伝わる女神伝説〟をなぞらえたような事件が同時多発的に発生する。この街に再び〝伝説の災い〟が起こるのか…？

どうする！バーナビー

ふてぶてしい新バディ



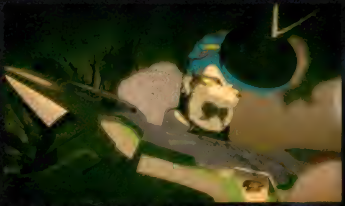
1部への電撃復帰。そこでバーナビーを待っていたのは、新パートナーのライアン・ゴールドスミスだった。初めて先輩としてコンビを組むバーナビーは戸惑いを隠せない。ふてぶてしい態度、何を考えているかわからないライアンの言動に翻弄される？

バーナビーの前を走るライアン

虎徹とは全くタイプの違う相棒、ライアンとのコンビに果たしてバーナビーは…。

ルナティックもいよいよ動くぞ！

ユーリとしてＴＶシリーズの第1話から登場している彼も、いまだ謎ばかりのキーマンだ。しかし彼もまた強い信念を持つ男。変身した姿を見せたということは、のっぴきならない展開が幕を開けることを意味するのか!?



▲ワイルドタイガーとルナティックがバトルを展開する！　お互い正反対の正義観を持つ相容れない2人が、拳を交えるのは宿命なのか？　それとも、ルナティックもまた女神伝説に何か関係しているのか!?

そして

2014年2月8日　全国ロードショー

http://www.tigerandbunny.net/

『タイバニ』草創期から作品に携わってきたスタッフ3氏。
監督、脚本／ストーリーディレクター、キャラクター原案／ヒーローデザインを
手がけたそれぞれの観点から、『タイバニ』を総括して
いただきつつ、劇場版『The Rising』へ込めた思いを語っていただいた。

DIRECTOR **米たにヨシトモ**

SCREENPLAY / STORY DIRECTOR **西田征史**

ORIGINAL CHARACTER / HERO DESIGN **桂 正和**

STAFF Interview 03

撮影／尾崎篤志

STAFF Interview 01

監督

米たにヨシトモ

作り手としての責任を感じながら制作に臨んだのが『タイバニ』です

――監督が最初に『タイバニ』と出会ったのはいつのことだったのでしょう？

「私が別の作品を作っていたアニメ制作スタジオで『タイバニ』企画立ち上げの話を伺ったのは、スタッフとして参加する前の話ですが5年ほど前でしょうか」

――すごく長い時間をかけて準備されたんですね。作品に参加する際に、どのような印象を？

「ヒーロースーツはCG、顔は作画で表現するヒーロー作品ということで、面白いと思いつつもとても難しいなと感じました。作画とCGをミックスするというのは、パースをうまく馴染ませるのが非常に難しい技法なんです。今でこそ『タイバニ』の制作チームの中で方法論が確立されてはいますが、高度なスキルが必要となる特殊な作り方。ましてや当時は手探りの状態で、現場サイドでは禁じ手に近い印象さえありました。その中で、スタッフたちが作りたいものを作ろうという姿勢で進めていた企画でもありましたし、オリジナル作品だからこそ、やったことのない作品でヒットを勝ち取るのがサンライズの姿勢だとも感じていました。そういった皆の〝熱〟で、現場のスタッフも〝作り手としての責任〟を大いに感じながら『タイバニ』の制作に臨んでいったように思います」

――そんな中で第1話の絵コンテを手がけられることに？

「ええ。原作のないオリジナル作品というのは、作品の振り幅をいくらでも広げることができてしまうので、振り幅を定めつつ作品の具体性と方向性が必要になってきます。もちろん、緻密な打ち合わせの上で固めていく作業ではありましたが、具体性と方向性の取り方が必要な作業でしたので、オリジナル作品の立ち上げに慣れている私に声をかけていただいたのだと思いますね」

――1話で工夫なさった点というのは。

「疾走感のある物語だけど、本当に見せたいのはヒーローの裏側でした。ですから第1話では、ヒーローが好きな人にも、人間ドラマを好きな人にも、訴えかけられるような絵作りが必要だと感じていました。冒頭シーンはHERO TVの視聴者目線で描かれているのですが、そうした〝パブリックな視点〟で物語がスタートすることで、まず客観的に世界観を知っていただいて、やがてそれぞれのヒーローにフォーカスがあたっても、自然と感情移入していただけるような、そういった走り出しができるような工夫をしましたね」

――冒頭シーン、疾走感のあるHERO TVの中継画面から虎徹の心象に焦点が当たっていく作りで、世界観に一気に引き込まれる1話でした。

「スタッフが一丸となって紡ぎ上げた世界が、とにかく魅力的でしたので、まず1話では『タイバニ』の世界観を知っていただこうと。そこに注力しました」

――その上で『タイバニ』の1話を改めて補完する『The Beginning』では、主役である虎徹目線で物語がスタートしますね。

「初めて『タイバニ』を観ていただく方にわかりやすい作りにしつつも、TVシリーズをより深く楽

Yoshitomo Yonetani

しんでいただけるような作品に作り上げるのが命題だと思っていました。西田さんと打ち合わせをする中で、サラリーマンヒーローとして崖っぷちである虎徹の目線でスタートすることで、『タイバニ』の世界観を見せつつ、ラストにはバーナビーの視点へと繋がれる流れにしようと。その視点の流れが映画のひとつの主軸にもなっています」

『The Rising』ではヒーローたちの心理描写とアクションが交錯しながら物語が動く！

——『The Beginning』は初見でもわかりやすい作りでありながら非常に密度の濃い作品だと思いました。例えば映画の中盤、パーティー会場でバーナビーとユーリが交錯するシーン。あのワンシーンで、TVシリーズの見え方にグッと奥行き感が出てくる。

「TVシリーズの中で、尺の都合でカットせざるを得なかったという部分を『The Beginning』では描いていこうと西田さんともお話をしていて。ユーリのシーンは描けなかった一幕です。パーティー会場で一人いるバーナビーと、赴任したばかりのユーリが出会うことで、その場にとけ込めていない2人の心象も見せられれば、という狙いもありました」

——描けなかった部分を加味する発想だったのですか?

「すでに出来上がった世界観がありますので、そこに邪魔をしないように加味しつつ、実は引き算をすることで、見せたい部分がより明確に見えた手応えの方が大きかったかもしれません。TVシリーズでは、物語ごとに見せ場がありましたが、映画では一連の流れの中で終盤の見せ場へと加速していく疾走感が重要になってきます。難しい判断の連続でしたが、虎徹やバーナビーの物語により焦点を当てることができたと思っています」

——監督が特に力を入れた部分は?

「クライマックスシーンです。西田さんと悩み抜いた部分でもあります。見せ方としても、クライマックスの盛り上がりをどう演出するか、もしくはしないのか…そのさじ加減はとても難しい判断でした」

——ラストまで2人の関係性が際立ちつつも、『タイバニ』らしい展開でした。一方で、〝劇場版2本同時制作〟を打ち出していたからこそ、あえて『The Beginning』では〝らしさ〟を出したラストが成立したとも感じました。

「そういうことですね。あくまでも始まりの物語を描ききることが『The Beginning』でした。その対極的な作品として『The Rising』を同時進行で制作していました。こちらは、8人のヒーローが結束しチームとなったTVシリーズ後の展開で〝とてつもない出来事〟を描いた作品になります」

——2つの劇場版で全く色の違う映画になる、と?

「だからといって『タイバニ』のテイストはむしろ変えることはありません。スタート当初から参加しているスタッフも、キャストの皆さんも、それぞれが『タイバニ』を作る方法論をわかっておられる。そして、全員が同じ思いで楽しみにしている作品でもありますから、同じ方向性のもとブレることなく作ることができました」

——これまでと変わらないスタンスの中で新たなチャレンジをした部分はあるのでしょうか?

「西田さんの脚本は、アニメではチャレンジングなことが多いので、非常に面白いんです」

——それはどういった部分で?

「会話劇や群像劇としての一体感…全てにおいてと言えますが、特にヒーローたちの微細な心象を描いた人間ドラマの部分ですね。アニメというのは簡潔に言いますと記号の世界といいますか、笑っている表情は笑顔でしか表現できないという側面も持っているんです。もちろん、非常に高度な表現をしているアニメもたくさんあります。でも基本的には記号的な世界観です。そこに〝実写感覚〟を盛り込んだのが西田脚本であり『タイバニ』。絵に芝居をさせるような脚本と言えるかもしれません」

——絵でも演技を表現しているのですか?

「非常に繊細な作業ですが、ちょっとした表情や仕草、あとは街の光なんかに深みを出す工夫をしています。そうして登場人物の心象風景を感じてもらえるような描写を取り入れていますので、楽しみにしていただきたいです。それに、今回はアクションシーンにも非常に力が入っています」

——もう少しお伺いしてもいいですか!?

「キャラクターが多く、動きも特殊、しかもCGと作画のミックス…アクションシーンではレンダリングに掛かる時間が今までとは比較にならないものになってしまい、CGや撮影のスタッフの方々にはかなり無理をして頂きました。でも、スタッフ一人ひとりの尽力の分、派手で見ごたえのある映像になっていますし、ヒーローたちの心理描写とアクションが交錯しながら物語が動く、という展開に期待していただきたいですね」

——『タイバニ』本気のアクションは相当な見所になりそうですね。

新しい方法論を確立させた前代未聞の作品

——監督にとって『タイバニ』はどんな作品として残りましたか?

「スタッフ、キャストそれぞれの方々の作品に対する夢と想い、そして愛情がとても大きな作品だと改めて実感していますね。ですから私としては皆さんのその想いを満たすことに心血を注ぎ込んだ作品です」

——監督にとって、大きな出会いに…。

「もちろんです。私自身この作品には、これまでの監督業とは少し違った立ち位置で携わることができたと感じています。言うなれば…みなさんの個性をひとつの旋律に乗せていく〝コンダクター的〟な立ち位置で作品作りに関わることができたのでは、と思っています。もともとは、広告を募集するという大胆なアイデアと仕掛けから始まり、ややもすると敬遠されがちなタイアップという手法を劇中でショースタイルに見せた。まさに新しい方法論を確立させた前代未聞の作品だと思いますよ」

——ホントそうですよね…。ちなみに、方法論を確立するという意味では、監督はサンライズで初となる全話フルデジタル彩色化した『BRIGADOONまりんとメラン』の監督などフロンティア的なお仕事が多いですよね。

「フロンティア的…そう言われると確かにそうかもしれませんね(笑)。そういった意味では当時はまだTVサイズ用の16：9サイズの作品がなかった時代に、TVサイズ初の16：9サイズアニメ作品を監督（『ベターマン』）したりしましたね」

——そして、ここでも『タイバニ』というまさに新機軸の作品に関わっておられる…。

「でも、つねに方法論を変えて新しいものを作り出していきたいという思いは、私だけではなく、皆さんもそうなのだと思います。実は私自身、各スタッフのこだわりをすべて実現するのは不可能だと思ったこともありました。ですがスタッフの熱量が私を超えていく熱さがこの現場にはあるんです。完成できたのは、ひとりひとりのスタッフに至るまで個々にレベルの高い人達が奇跡的に集まったチームだから。『タイバニ』の現場では、その思いに触れることができましたし、そうした熱量の中で作品を作れたのはとても幸せな経験でした」

Profile

よねたに・よしとも● '63年5月12日生まれ。'89年「笑ゥせぇるすまん」でアニメ監督デビュー。「勇者王ガオガイガー」('97年)、「ベターマン」('99年)「BRIGADOONまりんとメラン」('00年)、「Dororonえん魔くん メ～ラめら」('11年)、劇場版「ドラえもんズ」シリーズなど数々のアニメ作品を手がける。

STAFF Interview 02

撮影／丸山修一

脚本　ストーリーディレクター

西田征史

ヒーローの日常や家族の風景から ヒーローの魅力を滲ませたかった

―そもそも西田さんと『タイバニ』の出会いはいつ頃だったのでしょう？

「2009年の秋ごろでしたね。実はちょうど別のドラマ作品の執筆が何本か重なっていたために、当初はスケジュール的に執筆するのは難しいとお断りをしたのです。制作スタッフの方々から〝それでもお会いするだけでも〟と言ってくださったので、お会いすることになりました。そのときが『タイバニ』との出会いです」

―そのときにはどんなお話を？

「テーマは〝アニメでおじさんたちが胸を熱くするような物語を作りたい〟ということでした。僕はアニメの脚本は書いたことがなかったのですが、僕の舞台作品なども観てくださっていて、舞台の会話劇を織り込んで〝実写的〟なスタイルで書いてもらえたら、というご提案もしてくださった。その時にこれは面白そうだと思いましたし、みなさんの人柄も面白そうでしたので（笑）、ぜひやりたいなと思えました」

―意気投合したんですね。

「それに、ちょうど戦隊モノの日常を小説にしようとも思っていたんです。その発想を織り込みつつ物語を走らせたのが『タイバニ』の最初ですね。ヒーローものって、レッドはリーダーの色であったり、〝お決まりのお約束〟が山ほどあるんですよね。そういった〝お約束〟をあえて崩していったら面白いモノができるんじゃないかなと思っていまして。当初僕の書き進めていた小説というのが、レッドの元カノがピンクで、でもピンクは今ブルーと付き合っていて、一方で親の介護をしているヒーローもいる…そんなヒーローの日常や家族の風景を描いたものだったんですが、ヒーローらしからぬバックボーンを描くことで、ヒーローの魅力が滲み出てくるんじゃないかと思ったんです」

―そのコンセプトはまさに『タイバニ』の原型ですね。

「そうですね。そこがあったからこそ〝ブルーローズは本当はヒーローをやりたくない〟とか〝自分に自信が持てない折紙サイクロン〟とか、悩みを抱えながらヒーローをやっているというエピソードを織り込めたんです」

―キャラクターの性格付けはどのように？

「既にヒーローが8人いることは決まっていたんですね。ただ性格的な情報はゼロでしたので、それぞれのキャラに〝こんなことを言わせようかな？〟と性格を割り振っていったんです。だから、キャラのビジュアルから受けるインスピレーションとはあえて逆の性格にしようと考えましたね。あえて、風貌とは似つかわしくない性格を割り振ることで、いかにギャップを引き出せるかという点にこだわりました」

―確かに今思えば、ヒーローだけでなく斎藤さんたち脇役に至るまでギャップが魅力となるキャラクターばかりでしたね。

「ありがとうございます（笑）。人って表面的に見えていることが全てではなくて、誰しも悩みや葛藤を抱えているもの。ヒーローとして働いている時と私生活のギャップを出しながら、その人の立場にたった葛藤や苦労をリアルに出していくことをつねに念頭に置いていたと思います」

Masafumi Nishida

ヒーローの2部リーグの発想を思いついたときはニヤっとした（笑）

――脚本を執筆中に、思わず〝ニヤリ〟とした部分ってあるのでしょうか?

「風呂場でヒーローの2部リーグの発想を思いついたときはニヤッとしましたよ（笑）。ヒーローが職業として確立していている世界で、ヒーローを育成する学校もある。そんな世界観の中であれば、ヒーローにも予備軍がいてきっと2部制だろうな、と。とっかかりはサッカーでいうところのJリーグのようなイメージだったんですが、1部と2部の昇格・降格なども面白いなあ、と。それに2部っていう世界観を作るのは個人的にも面白い作業でした。2部のヒーローたちはどうやって活動していて、その周囲にはどんな人たちがいて、シュテルンビルトの世界とどう関わっているのか。そのあたりは自然とどんどん広がりましたね」

――では、まだ描かれていない部分もあるのですね?

「そうなんですよ。でも『The Rising』では2部の彼らの気持ちに触れる部分もあるので見て欲しいですね」

――ではストーリーの部分で〝ニヤリ〟とした部分は?

「14話でしょうか。13話に大きなクライマックスが終わって、それから約10ヶ月後の話なのですが、ここでようやくバーナビーの素の部分が少しだけ垣間見えてくるんです。原稿を書いていた時は〝これでバーナビーのギャップが描ける〟とニヤッとしました。バーナビーは初登場時から激しい復讐心のために自分の殻に閉じこもり、他人に本性を一切見せずに生きてきた男です。自分を押し殺すことを自らに強いていたバーナビーが、13話でようやく虎徹と仲間になる。その10ヶ月後ですから、バーナビーの心にも変化があるはずだし、そのあたりはリアルに描こうと心掛けましたね」

――10ヵ月のあいだに成功したバディを取り巻く環境も一変しましたよね。

「そうですね、ヒーロー達それぞれの立場に立って考えてみても、一人ひとりの心の変化を見ることもできると思います。ですから、この10ヵ月というのは、あえて描かなかった分、見てくださるみなさんに補完して楽しんでいただければ、とも思っているんです」

――そう考えてみていくと『タイバニ』は些細な日常の積み重ねの上に大きな物語が成っている、その構成に魅力があるのかなとも思うのですが。

「そう言ってもらえると嬉しいですね。ドラマでも舞台でも描きたいこと全てが作品の中では描ききれない中で、物語の〝断片〟を描き、ストーリーを構築していくのが僕の物語の作り方なんです。あえて描いていない部分は、見てくださったみなさんそれぞれが補完して遊んでいただければ嬉しいと思っていて。そんな意味では『タイバニ』という作品は僕の予想を超えて作品の隙間を遊んでいただけた作品になったな、と思います」

――それだけ愛された作品になったということですね。

「本当にそう思います」

映画を観終わったあとに、ヒーローとはどんな存在か? というのが伝われば

――それでは『The Rising』のお話を。最初のきっかけは何だったのでしょう。

「虎徹とバーナビーの物語を描くにあたって、これまでのストーリーの中で見ることのなかった紆余曲折を描こうと思いました。その時に能力が減退して、かつてのような活躍ができないであろう虎徹の現状を考えると、コンビは解散するしかないだろうな、と」

――会社の再建問題、コストカットなど改めてサラリーマンの悲哀の部分が虎徹にのしかかりますよね、まるで1話のように。

「そうですね。導入部分は状況もバディも一変していますが、展開としてはTVシリーズの1話と同じですね。そこは、新しく映画から観ていただく人を意識した部分でもあります」

――そこで登場する新キャラのライアンに関しては?

「窮地に立たされたサラリーマン（ヒーロー）が立ち上がるさまを見たいですからね。『タイバニ』という作品は、1話ではライバル関係だったヒーローたちが、25話かけて大きな仲間に成っていった物語です。キャラ立ちもすごくしているし、彼らの中には強い結束力も生まれている。ですから、参入する新キャラは生半可な性格だと埋もれてしまうんです」

――埋もれることを逆手に取ったヒーローもいますしね…。

「今のヒーローたちと横並びで居ても負けない存在感が必要だったので、孤高の存在でいてオレ様キャラ、そして誰よりもアクの強いヒーローが思う存分暴れるようなストーリーを用意しようと思ったんです」

――ライアンはまさに暴れそうなフォルムですもんね（笑）。ではストーリーディレクターとして参加されてみてお芝居の部分での見せ場についてはどうでしょう?

「TVシリーズの頃から『タイバニ』のアフレコの現場へはほぼ毎回のように参加しているのですが、今回はかなり久しぶりにみなさんで集まったと思うのですが、これまでと全く変わらず〝仲間たち〟のやり取りが自然に始まるといった感じでした。僕個人としては、少し試みがありまして、今回それぞれのキャラに〝ちょっとした想い〟を抱え込ませていているんです。その部分を声優の皆さんがどう表現してくださっているか。そういった演技の部分も〝注目〟していただきたいと思います」

――では、『The Rising』の見所はどこにあるでしょう。

「もちろん虎徹とバーナビーのバディにライアンが加わって…というのがメインストーリーではありますが、並行してヒーローたちの群像劇を描くことを強く意識した作品です。これまでのTVシリーズや『The Beginning』と同じように登場するキャラクター全員の気持ちに投影して書いているので、彼らが何を思ってどんな行動に出るのか、という部分も楽しんでいただきたいですね。そして見ていただきたいのは、ヒーローたちの想いを通して垣間見える〝ヒーローとはどんな存在か?〟という部分。観終わった後それぞれに感じていただければ嬉しいですね」

――それでは、今改めて西田さんにとってのヒーロー像とは?

「ヒーローの定義というのはその時代ごとに変わるものなので、答えは出しづらいのですが、間違いなく言えるのは、目の前で困っている人を助けようとする人。〝誰がヒーローなのか〟ではなく〝誰にとってのヒーローなのか〟が大事だと思います。目の前の一人を助ける行動に移せたら、その瞬間は間違いなくヒーローなのだと思います」

――誰にでもヒーローになれるというのが根底にあるのですね。

「人助けってそもそも自分に余裕がないとできないと思うんです。でも、余裕がなくても、困っている人がいたら、たとえカッコ悪かろうが助けることを優先してしまう。虎徹はきっとそんな男なんですよね。ですから、僕にとってのヒーロー像というのは、虎徹なのかもしれません」

Profile

にしだ・まさふみ●脚本家、演出家として、ドラマ『ママさんバレーでつかまえて』（作・演出）、「実験刑事トトリ」シリーズ（脚本）、ドラマ&映画『怪物くん』（脚本）、ドラマ&映画『妖怪人間ベム』（脚本）、映画「アフロ田中」（脚本）、NHK人気番組「シャキーン!」（構成）など幅広く活躍。舞台「小野寺の弟・小野寺の姉」のDVDが1月24日㊎発売予定。

STAFF Interview 03

撮影／蓮尾美智子

キャラクター原案　ヒーローデザイン

桂 正和

『The Rising』はシリアスな展開。そこも鑑みた上で新キャラのデザインをしました

――まずは『The Rising』のキャラクターデザインのお話から伺います。

「TVシリーズのときは、ストーリーや世界観はおろか性格も動きも全く見えない中で手探りでのデザインだったので大変でしたが良い意味で自由に考えることができたんです。今回は、設定やシナリオが完全に完成された世界、決まりが多い中でのデザインでしたので、TVシリーズの時とは、また違った難しさありましたね」

――マーク・シュナイダーは非常に冷酷なリアリストといった風情ですね。

「当初は、無邪気に人を傷つけていくようなノリの軽いイメージの依頼だったんです。そのキャラ付けは確かに面白いな、と感じたのですが、今回は脚本がかなりシリアス。脚本の西田征史さんやスタッフとも話し合ったうえで、視聴率とか会社の売り上げとか、そういった数字だけを考えている冷酷なイメージを鮮明に出すキャラにさせてもらいました」

――工夫された部分は？

「名前がマーク・シュナイダーですからね。ヒゲとか全体的な硬質感とかはドイツっぽい雰囲気を意識しました」

――登場するキャラの多国籍感も『タイバニ』らしいポイントですよね。そう言った意味では、謎のNEXT3人もオリエンタルな雰囲気です。

「この3人は〝踊り子〟と〝僧侶〟と〝ボクサー〟のイメージという依頼でした」

――それはまた掴みどころのない3人ですね。

「最初はどういうことかなと思いましたね（笑）。ただ監督さんのイメージスケッチがあって、それを元にファッション部分も含めてデザインをしていく作業でした。今作では登場人物が大量に出てくるので、同じチームなら何かしらの〝アイコン〟が鍵になるんじゃないかと鑑みて、この3人は〝色の部分〟で統一感を表現しようと考えました」

――確かに、キャラもデザインも三様なのに3ショットになるとチーム感が俄然出てきますね。ではこの3人とは対照的なイメージのライアン・ゴールドスミスについて。

「彼のとっかかりは〝チャラい感じ〟+〝オレ様テイスト〟という依頼でした。そこにイケメン要素もいれたいという話でしたので、最初のライアンのイメージはチャラチャラしていて細身だったんです。でも脚本を読み直していた時に、細いよりは、太くて重いどっしりとした印象を受けたんですよね。だから、ネイサンよりもバイソンよりも大きいサイズ感で、デザインをすることに」

――その中でチャラさが消えた、と。

「むしろチャラさというよりセレブだろう、と。アクセサリーと七分丈の短パンにチャラさの名残をとどめました。その過程の中でイケメンよりは、クセのある顔立ちのほうが個性が出るし、他のヒーローたちとの差も出ると考えて今のデザインが完成したんです」

――ある意味で最も癖のある風貌になりましたね。彼のヒーロースーツにも工夫を？

「アポロンメディアのヒーローなので、ワイルドタイガー、バーナビーと同じパターンにしなきゃな、ということで斎藤さんプロダクト

Masakazu Katsura

であること、〝重力王子〟なのでカラーリングも含めて王子様風にする事は心がけました。2人のスーツと同様に顔は白くしましたが、あえてフチを付けて顔の白さを強調しました。仮面舞踏会のマスクのイメージで」

――和テイストの虎徹に対して、西洋風ということですね。

「その匂いは出すように意識しましたね」

――個人的にですが、一番びっくりしたのは翼です。

「最初は翼のないデザインだったんですよ。西洋風とは矛盾するんですが、肩の飾りはワイルドタイガーに倣って甲冑イメージでデザインを始めたんですが、ショルダー部分を派手にしようと試行錯誤の中で〝アポロンメディアの象徴はグリフォンか…〟と。それで翼のデザインを取り入れようと考えました。でもこれは『タイバニ』の世界観だからこそ、考えついたアイデアです。テレビに出て派手さが要求される、ショーアップが前提のヒーローですからね。きっと、斎藤さんならスーツを派手にしたいだろうなとも思いましたしね（笑）」

――（笑）機能より派手さを取るGOOD LUCK MODEを仕込むような人ですもんね。

「だからこそ翼は能力を発動するときに起動するイメージで作り上げました。そう言った意味では、バーナビーのヒーロースーツも光る部分を増やしてデザインを派手に変更しています。ただ、機能は変わっていないんですね。ですから〝バージョン2〟ではなく、〝スタイル2〟と名付けました」

――見栄えが変わったんですね。

「そうです。それと、今回実はライアンにもクソスーツがあるんですよ。ワイルドタイガーはアメコミヒーロー風でしたが、彼のは戦隊ヒーローをイメージしています」

――おお！ そこも見逃せないポイントですね。

TVシリーズで肉付けされたキャラクターをデザインに反映

――レギュラーメンバーたちも、髪型やファッションに変化が見られますよね。

「季節は春なのですが、これが難しいんですよ。春というのは人によってはまだ寒いと感じる人もいれば、暑がる人もいる」

――僕は暑がるタイプですね…。

「そうでしょう。だからなかなか私服のデザインも一筋縄では行かなかったですね。でも、各キャラの性格を考えながら彼らならではの春らしさを演出するように心がけました。例えばイワンであればスカジャンに桜をあしらってみたり…」

――そういえばイワンは髪が伸びましたね。

「彼はオタク気質があるので、伸ばし放題のイメージなんですよ。髪を切る暇があるくらいなら、手裏剣の腕を磨くだろう、と」

――納得です。一方でパオリンはバッサリいきましたね～。

「ヒーロー名がドラゴンキッドですからね。ずっと少年っぽい短い髪型にしたかったんです。彼女の性格や人柄を考えても、女の子らしさよりヒーローとして戦う意識しかないと思うんですよ。だから、仕事の邪魔になるからバッサリ切った、僕の中ではそんなイメージです」

――虎徹も少しだけ短くなっていますね。

「TVシリーズの時はワイルドな方がいいだろうということで、バサバサにしていたんですが、西田さんの脚本と平田さんの演技から、虎徹はもう少し大人な雰囲気のある男だな、と感じていたので、少し短くして大人らしさを演出しました。どのキャラも基本的には変わっていないのですが、ニュアンスの部分で、少しずつ変化していますね。ネイサンは春だからさらにエッジを効かせていたり、アントニオは夏を前に髪を切るんだろうな、とか」

――ああ、劇場版なのに散髪が間に合わなかったんですね（涙）。ちなみに『The Rising』では声優デビューおめでとうございます！

「いやいや声優デビューはしてません！ モブの一人の一言だけですから（照）。録音ブースの中というのは、聖域だと思っているので、役者さん以外の畑違いの人間がその場に立つなんておこがましいと考えていましたから。実際にブースに立つと、ほんの少しのシーンでしたが、尋常じゃない緊張感でした」

――ご出演のいきさつは？

「打ち合わせと写真撮影のために、録音現場へお邪魔した時に、平田さんから〝やってみたらどうですか？〟と声をかけていただいて」

――その日のことだったんですか!?

「そう（苦笑）。でもいざやるとなったら平田さんがずっと僕のそばにいてくれて、全面的にサポートをしてくれたので、なんとか演りきることができました」

――感想はいかがでしたか？

「本当に難しいと思いました。何よりも素人の声で作品の邪魔をしてしまうのが一番嫌なことだったので心配していたんですが、多分気づかれません（笑）」

僕の人生に潤いを与えてくれた。『タイバニ』はそんな存在になりました

――『タイバニ』を振り返ってみて、いかがでしたか？

「思えば不思議な仕事だったと思います。本来であれば、脚本があってその上でキャラクターデザインをしていくのが順番だと思うんですが、『タイバニ』に関しては、名前のイメージでキャラクターを先行してデザインした後で、西田さんが性格やバックボーンを肉付けしていった。だから、見る人によっては違う見え方をしているかもしれませんね」

――僕はそこが『タイバニ』の魅力を作り上げている部分だと感じています。それぞれのキャラクターにいろんな〝目線〟と〝思い〟が加味されていくことで、キャラの奥行が深まったと思っているんです。

「この作品は奇跡的にシンクロして、TVシリーズから劇場版に至るまで良い方に出たんだと思います。ですから、これで彼らと会えなくなるのかな？って思うと寂しいですよね。今改めて見てみると、どのキャラクターもヒーローもデザインを意外と気に入っていて、後悔がないデザインなんです」

――思い入れもひとしおですね。

「ええ。彼らとも5年近くの長い付き合いになりましたからね。デザインだけでこれだけ長く関わる仕事もないですし、いろんな意味でまさに前代未聞でした」

――そんな不思議でいて前代未聞な〝『タイバニ』経験〟はいかがでしたか？

「『タイバニ』経験…ある意味で僕の人生に潤いを与えてくれた作品です。イベントにも出演させていただいたり、西田さんとのご縁でドラマ出演（※）をさせていただいたり。もちろん時間がない中での仕事や、田村一彦プロデューサーからの徹底したダメ出しとかね（笑）、大変なこともたくさんあるんだけど、いい思い出として残っているんですよね」

――桂さんご自身、素敵な出会いのあった作品になったのでしょうか？

「そうですね。現場のスタッフさんが忌憚のない意見を言い合えて仕事がしやすい環境を作ってくださった。最初から最後まで居心地のよい現場でしたね」

――では『タイバニ』とも大きな出会いになりましたね。

「大変だけど遊んでいるような感覚もあって…、気づいてみれば僕の中で重要な位置にある作品になっていましたね。最初は、遠い親戚みたいな感覚があったんですけど、今ではとても仲のいい家族の一員にしてもらえた気がします」

Profile

かつら・まさかず●'62年12月10日生まれ。'83年、週刊少年ジャンプ（集英社）に「ウイングマン」で連載デビュー。「電影少女」「I"s」などヒット作を続々と発表する。現在、週刊ヤングジャンプで「ZETMAN」を連載中。

※西田征史脚本によるドラマ作品「実験刑事トトリ」（'12年、NHK）に特別出演。

『TIGER & BUNNY』×TV Bros.

2011.05	表紙＆特集 SHOW UP TIGER & BUNNY！
2011.10	特集 GOOD LUCK！ TIGER & BUNNY
2012.07	表紙＆特集 START UP!! TIGER & BUNNY
2012.08	連載 WHAT'S UP！ TIGER & BUNNY(全３回)
2012.09	表紙＆巻頭特集 HEAT UP！ TIGER & BUNNY
そして、	
2014.01	表紙＆巻頭特集 BURN UP！！ TIGER & BUNNY掲載予定！

PLAY BACK!!

TV Bros.編集部が『TIGER & BUNNY』と出会ってほぼ3年。
その3年の間に異例の頻度で『タイバニ』の特集と表紙を掲載してきました。
その回数、表紙3回、特集4回、短期集中連載は3回と全20ページ。
しかも、『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』の公開直前には
さらに表紙&巻頭特集の掲載も決定。
『タイバニ』はTV Bros.史においても名を刻んだ革命的な作品となりました。
衝撃の出会いから熱を上げて追いかけ続けた『タイバニ』の軌跡を
ここに一挙大公開。

★Blu-ray・DVD 5/27発売!

チェックしよう、そしてチェックしよう

SHOW UP TIGER & BUNNY!

TIGER & BUNNY

★『タイガー&バニー』がブロスにやってきた★

どうも、テレビ誌の中でレモンを持たない方、いや、レモンが似合わない雑誌、テレビブロスです。今回はそんなブロスも注目、世間的にも話題沸騰中のアニメ『TIGER & BUNNY』が推参! ってことで、オモシロさを多角的に紹介するべく豪華SPインタビューをたっぷりと交えた総力特集です!

取材・文・構成/山本泰行

©SUNRISE/T&B PARTNERS, MBS

ショーアップされたヒーロー(正社員)たちの悲哀や葛藤も描く痛快バディーアクション

ヒーローなのに正社員、故にスポンサーロゴを背負い広告収入を得ることが大命題。そして、本来の仕事である悪党退治の様子は、テレビの人気番組「HERO TV」で生中継され、さらにヒーロー同士は人気ランキングでも争い、人気がなければヒーローでありながら廃業の危機も訪れる——。主人公は〝中年ヒーロー〟のタイガーとその相棒、〝超ルーキー〟のバーナビー。この2人を中心に個性派ぞろいのヒーローたちが〝悪と視聴率(人気)獲得〟を相手に戦う姿を描いていく。

ヒーローを世知辛い企業戦士として描き悲哀や哀愁を漂わせつつも、王道のヒーロー活劇としての爽快感も堪能できるという、新感覚ヒーローアニメだ。

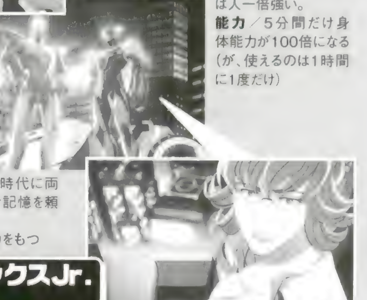
今回はその魅力を探るべく、SPインタビューでもって総力特集。貴重な証言から、「TIGER & BUNNY」の面白さの髄を感じてもらいたい!

SHOW UP THE WILD TIGER & BARNABY BROOKS Jr.

ワイルドタイガー(鏑木・T・虎徹)

ピークを過ぎた中年ヒーローで人気も下火。一人娘を母親に預けてヒーロー業に勤しんでいる。人生崖っぷちだが、おせっかいで情に厚く、何事にもポジティブ。正義感とヒーローに対するプライドは人一倍強い。

能力/5分間だけ身体能力が100倍になる(が、使えるのは1時間に1度だけ)



バーナビー・ブルックスJr.(本名同じ)

ヒーローの中で唯一本名で活動しているスーパールーキー。クールなイケメンで一躍人気者になった。虎徹とコンビを組むが性格の不一致でケンカが絶えない。実は幼少時代に両親の殺害現場を目撃、おぼろげな記憶を頼りに殺害犯を追う。

能力/タイガーとまったく同じ能力をもつ

尾崎雅之 エグゼクティブプロデューサー INTERVIEW

広告を背負うヒーローの仕掛け人エグゼクティブプロデューサーに聞く!

「『TIGER & BUNNY』は個人的には執念の作品です」

——この企画の発端はいつだったのですか?

「3年ほど前ですね。オリジナルストーリーありきで間口の広いアニメをやりたかったんです。その際に、クリエイティブの部分でしっかりと伝わる作品、そしてビジネスとしても成立させる必要性……。その両輪で核と仕掛けが必要だったんです。ですが当時は、ビジネス面ではパッケージ市場が衰退し始めていて、深夜アニメをビデオで売るモデルが崩壊しつつあったので、新しいビジネスモデルを模索しないといけなかったんですね。そんな中で、北京五輪で競泳の水着問題が勃発(※1)していたんです。トップアスリートも企業人だからこその葛藤やストレスがあるんだなあ、と。でも、目的に向かっていく真摯な姿勢にはすごく共感できたんです。その時に、実際の企業にスポンサーとなってもらって、F1や格闘技のように劇中にスポンサーのロゴを登場させて、かつしっかりとしたストーリーを成立させれば、面白いと思い立ったんです」

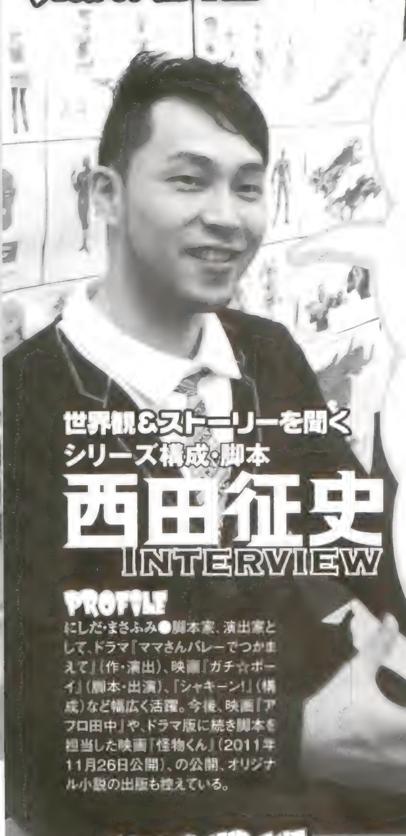
——まさに、3年前の発端のお話ですね

「ええ。それで僕たちのやりたいこと——〝等身大のヒーロー〟、〝人間の葛藤を描く〟、〝ビデオグラムに頼らない新しいビジネスモデル〟の3つが決まったんです。しかし、実際のスポンサーを仕込むというのはプロデューサーとしては重たい命題でした(苦笑)。これまでにもアニメでプロダクトプレイスメント(※2)(以下PP)という手法はやられてきましたが、ここまでガッチリとやったのは初めてですし、何より放送の半年前に日本経済新聞さんに広告を出して、スポンサーを募ったのも初の試みです。

編集作業はデカい声でする方(山)です。『タイバニ』は編集サイドの想いが詰まった誌面ですので、この欄外ではひとこと振り返っていきますよ!

編集

SHOW UP THE T&B



世界観&ストーリーを聞く
シリーズ構成・脚本
西田征史 INTERVIEW

PROFILE
にしだ・まさふみ●脚本家、演出家として、ドラマ『ママさんバレーでつかまえて』(作・演出)、映画『ガチ☆ボーイ』(脚本・出演)、『シャキーン!』(構成)など幅広く活躍。今後、映画『アフロ田中』や、ドラマ版に続き脚本を担当した映画『怪物くん』(2011年11月26日公開)、の公開、オリジナル小説の出版も控えている。

アニメを意識せずに、各話ごとに伏線もオチも細かく盛り込みました

「実はこのお話を頂く前に、ヒーローの裏側を描いた小説を少しだけ書いていたんです。実在するヒーローが親の介護で悩んだり、不倫していたり、ヒーローに元彼がいたり…。なので、今回のお話を頂いた時は ヒーローの苦悩や葛藤も描けそうだし〝これはやりたい!〟と思ったんです。僕はアニメの脚本を書いた事がなかったんですが、〝むしろドラマや舞台の会話劇をそのままアニメに〟というリクエストだったので、アニメということは意識せず自由に書かせてもらいました。初めての経験でしたが楽しかったですね。その中で、一番気を遣ったのはペース配分です。ヒーローモノのベーシックな話は皆さん今まで色々見ているだろうから、その辺を丁寧に描くのではなく、展開の早さで見せようかなと。感覚的には1時間ドラマのイメージです。通常なら1話18ページ程度らしいんですが、初回なんかは24ページもあります(笑)。でもその分、意識したのは各話ごとにしっかり伏線とオチを効かせること。全25話を見たときにも、軽く伏線がリンクできるように、細かく作らせて頂いたつもりです」

登場するすべてのヒーローにひときわ輝く見せ場が登場します

「どんな作品にも僕が盛り込んでいる部分なんですが、すべての役者さんに見せ場を作りたいという意識があるんです。なので、今回はヒーローを役者さんと捉えて、どのヒーローにも輝く場面を作っています」

——折紙サイクロンも?

「もちろんです! ストーリー全体を通してみると、タイガーとバーナビー2人の距離感を楽しむ作品ではありますが群像劇っぽいテイストも盛り込めたと思います」

——では、見どころは?

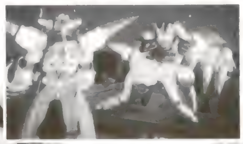
「これは〝遊びの部分〟なんですが、〝実は既に出ていた〟というのをやりたくて、ルナティックは既に1話で出しているんです。台詞なしで登場させたんですが、けっこう堂々と出ていました(笑)。あと、脇役キャラで言えば、メカニックの斎藤さん(写真左)。彼は僕のネタ帳の中にかなり以前からいたキャラなんですが、どこかで必ず出したいと思っていたんです。テロップを違和感なく使えるアニメなら面白くなるんじゃないかと思って、ついに登場しました。もうひとつ見どころのキャラは、ブロスで連載中の片桐仁さんも、どこかで声優として出演するかもしれないです(笑)。

ストーリーでは14話以降で僕がこの作品で描きたかったテーマがどんどん浮き彫りになってきます。13話まではひと味違う、〝ヒーローの悲哀〟も楽しんで頂きたいですね」

ヒーローとは肉体的な強さ、ではなくハートの強さ

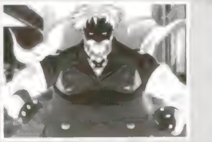
「僕は、完全無欠よりはどこか欠点があって人間的な方がカッコいいと思っているんです。誰にだってできないことが必ずあって、それでも汗を流して頑張るハートの強さがある人こそヒーローなんだと思います

今後は、現代日本が抱える問題とリンクするような事件も劇中では描かれていくので、見て頂いたみなさんが、ヒーローたちに共感してもらえると、すごく嬉しいですね」



SHOW UP THE KEYWORD

【Mr.レジェンド】
虎徹が子供の頃にあこがれた先代のスーパーヒーロー。街には銅像が建てられるほど、ヒーロー界で残した功績は大きい



【ウロボロス】
バーナビーの両親を殺害した犯人が残した唯一の証拠。組織的に暗躍する複数のメンバーがいるようだが、いまだ実態は不明のまま

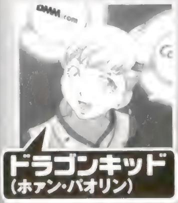
【ルナティック】
ヒーローたちに「私は私の正義で動く」と言い放った青い炎を操るNEXT 正体はユーリ・ペトロフのようだが……。

SHOW UP THE HEROES

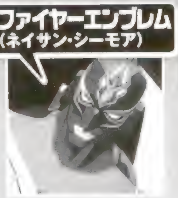
ブルーローズ(カリーナ・ライル)
歌って踊れるヒーロー界のスーパーアイドル。氷を自由に操る女王様キャラ。だが、普段は勉強にバイトに忙しい女子高生。

ロックバイソン(アントニオ・ロペス)
古株のベテランヒーローで、虎徹とは古くからの親友で飲み仲間。強力なパワーと強靭な皮膚が武器。

スカイハイ(キース・グッドマン)
名実ともにトップに君臨するキング・オブ・ヒーローだが、実は天然キャラ。風を自在に操る能力を持つ。



ドラゴンキッド(ホァン・パオリン)
幼いころより英才教育を受けヒーローになるべくしてなった少女。特技のカンフーと稲妻を作りだす能力を持つ。一人称はボク。



ファイヤーエンブレム(ネイサン・シーモア)
自身が所属する会社のオーナーでおネェキャラ。経営の苦労も知っているため世話焼き。炎を自由に操る能力を持つ。

折紙サイクロン(イワン・カレリン)
ヒーロー養成アカデミーの卒業生。内向的な半面、TVの中継では画面に見切れることだけに情熱を注ぐ。能力は擬態化。

SHOW UP On Air!

毎㊏ 深1:58〜 毎日テレビ
毎㊋ 後11:00〜 TOKYO MX
毎㊏ 深0:00〜 BS11

そして、史上初!
USTREAMでもほぼ同時配信中
毎㊏ 深1:59頃〜 配信予定

SHOW UP THE Release!

5月27日発売 Blu-ray・DVD

●Blu-ray初回限定版
第1巻 ¥3,150
初回限定版特典として
桂正和描き下ろしブックケース、
特製ブックレット、さらには虎徹とロックバイソンの青春時代を描いたオーディオドラマが収録されたスペシャルCD(本編未出演の坂本真綾も特別出演!)など5大特典付き。
※第2巻以降は3話収録で¥7,350
●Blu-ray通常版は第1巻 ¥2,625(第2巻以降は¥6,300)
●DVDは第1巻 ¥2,100(第2巻以降は¥5,040)

観なきゃ〜ね〜　買わなきゃ〜な〜

これがすごく反響を頂いて、問い合わせは募集を締め切るまでの間、100近くのお話を頂きました」

——100とはすごいですね。でも、募集自体は3年前に仕掛けられなかったのですか?

「キャラクターもストーリーも完成してからでないと、企業イメージも膨らまないだろう、と。それで、募集できたのが放送の約半年前だったんです。実際には企業イメージとキャラクターの不一致でNGということもありましたし……様々な調整をして下さったADKさんには本当にお世話になりました」

——ちなみに、スポンサーでもあるサントリーPEPSI NEXのキャッチフレーズ〝GO NEXT!〟と、劇中に登場する能力者の総称〝NEXT〟の一致に何か意味はあるのですか?

「これは面白くない話で申し訳ないのですが……ただの偶然なんです(苦笑)。ただ、ブルーローズというネーミングには想いを込めました(ニヤリ)。企画段階からサントリーさんはエンタメコンテンツでPPでタイアップされていてご理解がある、と直感していたので、世界で初めてこれまで不可能といわれていた青いバラを開発したサントリーさんにちなんで〝ブルーローズ〟と名付けたんです。結果的に乗って頂いてものすごくハッピーでした」

——3年越しの愛が結実したわけですね(涙)

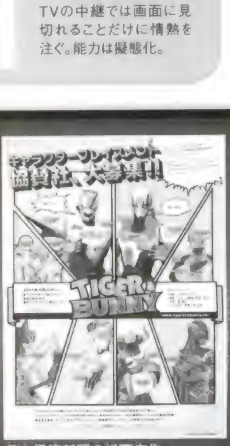
「そういうことですね」

今後、PPを〝武器〟にしたアニメはこれからの定番と化していく、か

「実は、今回のPPでアニメの製作費をまかなえているか、といえばそうではないんです。今回は僕たちも、参加頂いた企業さんもチャレンジという意味合いがすごく強いので、ビジネスモデルの構築にはまだ遠いんです。でも1つの可能性は示せたかな、と思っています。この作品が成功すれば作品の広告価値も上がると思うので、もしかしたらこういった作品がたくさん生まれるかもしれないですね」

——尾崎さんにとっては複雑な気持ちも……

「それはまったくないですね。むしろ、他の作品でも成功してくれればいいんです。新しい広告価値を見出して面白がってくれるといった



日本経済新聞の紙面広告

デザイナー
デザイナー担当の(高)です。(山)は声もでかいですが原稿の文字量も相当多いです。特にタイバニの特集はこのムック本もですが文字量が半端ないです。

キャラクター原案 ヒーローデザイン

桂 正和

SPECIAL INTERVIEW

撮影／尾崎篤志
取材・文／山本泰行

——まずは、『TIGER & BUNNY』のプロジェクトに参加されたいきさつから伺いたいのですが？

「僕は美少女を描く仕事依頼が多いので、ヒーローものって聞いた時は思わず耳を疑ったんです。しかも、おじさんが主人公のヒーローアニメのキャラデザインということで、一瞬でテンションが上がりました（笑）。僕にコメディータッチのポジティブなヒーローデザインの依頼が来るなんてスゴイと思いました」

——珍しい依頼だったんですか？

「そうですね。だからこれは面白い、と思ってすぐに〝やります！〟って伝えたんです」

——では、ヒーローのデザインについてのお話を。

「2年くらい前でしたか、最初の顔合わせの時にすぐデザインを始めてほしいと言われたので、即行で取りかかったんです。まずはタイガーから。企画書にはざっくりとしたキャラクターイメージしか書いてなくて、〝形に関してはもうお任せで〟と言うカンジでしたので、好きにやれてうれしかった半面、選択肢が多すぎて、かなり苦労しました（笑）。最終的には、海外にも同時配信するということだったので、タイガーとバーナビーは日本生まれのヒーローデザインのラインにしようという方向性が決まったんです。タイガーの口は、戦国時代の兜の面頬を参考に表現したんです。それと、目のデザインを水平にすることで、能面と同じように、動きや角度によって表情を表現できるようにしたかったんです。あとは、おじさんってことで、正面から見たら角刈りっぽくしつつ（笑）、後頭部のラインは虎をイメージしました」

——まさか角刈りでトラ刈りとは（笑）。ではバーナビーのデザインは？

「バーナビーは〝素早い〟という設定だったので、スピード感のあるフォルムにしました。全体的に流線形のデザインを意識しつつ、タイガーとの表情の対比を出すために、目元は若さゆえの怒りを、同時にクールな設定だったので、口を無くしました。ヒーローというのは子供にカッコイイと思ってもらえないとダメだと思っていて、その為には子供が簡単に描けて、シルエットで誰だかわかるシンプルなデザインを心がけました」

——確かに、2人のシーンではマスクを通してキャラの対比が描かれていますよね。ちなみにヒーローを描く上でのこだわりはあったのですか？

「広告を背負ったヒーローがテレビ中継で活躍するという設定だったので、全員ハデにしました。例えば、大きなドリルを付けてみたり」

——ロックバイソンですね！

「ええ。ロックバイソンに関しては、監督から〝肩に大きなドリルを付けてほしい〟とリクエストされたので、なるほど荒唐無稽でいいのか！と思って、どんどんエンジンがかかっちゃって（笑）。ドリルは肩に収納す

価値観が醸成されていけばアニメーションの可能性はもっと広がると思いますし、ビジネス面だけでなく、アニメの世界観も面白くなっていくと思います。僕はエンタメコンテンツの中でもアニメってある意味でまだマイノリティーだと思っているんです。だから、クライアントや視聴者が盛り上がって面白がってくれるのであれば、ビジネスモデルとしてどんどん出てきてほしいですね。ただ、アニメの世界観とPPがしっかりとした親和性の元に成り立っていないとダメだと思うんです。視聴者にもちゃんと楽しんでもらえる作品でないと、逆に盛り上がらないと思います」

ヒーローとは、他人の心に火を灯してくれる存在ですね

——興味深いのは、史上初の地上波とUSTREAMとのほぼ同時放送。これは、非常に画期的だと思うのですが？

「僕たち自身、チャレンジだったんです。既成のやり方ではなく、ちゃんとファンの方に届くような方法を模索した上で、海外での放送も含めていろんな形でアウトプットできるように採りましたね。ただ、ヒットするよりも10年、20年と残っていくような作品になれば、という青臭い思いもあるんです。もちろん結果は必要ですが、チャレンジできたという自負はあります」

——まさに尾崎さんの執念の作品ですね。

「実はこの作品は企画段階の時に、ほとんどの人に反対されたんですよ。ヒゲ面のおっさんヒーローが主人公で、特撮色が強いのに子供向けではないってことで、〝誰が見るの？〟と多くの社内外の人に言われました（苦笑）。でも、ファンの心に刺さる作品というのは、得てして企画段階では逆風が吹き荒れるらしいんですよね。そういう意味で、〝逆風はヒットの要件だ！〟とムリヤリ納得させていたんですけれども（笑）」

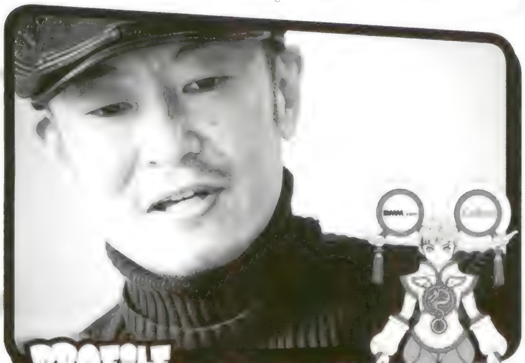
——でも、描きたいテーマは武骨ですらありますよね。

「ええ。僕たち作り手としては、能力者というマイノリティーであるヒーローたちの矜持も描きたかった。そうすることで、現代社会に活きる企業戦士たちにも共鳴してもらえると思ったからです。立場の弱いヒーローが胸に秘めた強さ、そんなプライドが伝わって欲しいなと思いますね」

——最後に尾崎さんにとってヒーローとは？

「他人の心に火を灯す存在ですね。火を灯された人が〝明日から頑張ろう〟と思えれば、それで、ヒーローの責務は果たしているんじゃないかと思うんです。もちろん火が灯るような

念願だった桂さんの単独インタビューは、僕の『タイバニ』への注目度の高さも相まって約1時間30分！『タイバニ』トークで盛り上がっていただきました！ 編集



るとか、マスクのT字部分はシャッター式で顔が出るとか。面白いでしょ！って。いつか使ってもらいたいですね」

――ロックバイソンの企業ロゴはインパクトありますもんね！

「実は、広告ロゴがどこに入るかなんて考えてデザインしていないんですよ。どんな企業が来るかわからなかったですし。F1同様のプロダクトデザインの感覚だったので、ロックバイソンに関しては奇跡的な一体感になっていると思います（笑）。まぁ、こだわりというよりは、面白いだろうなって僕が勝手にノリノリで描いた部分でもあるのですが」

――なるほど！ノリが具現化したワケですね。ちなみに、折紙サイクロンのデザインは？

「日本が好きな外国人という設定だったので、〝絶対に勘違いしているキャラだな〟と。それで忍者なのに、顔は歌舞伎で高下駄履かせて、遠山の金さんのように肩をはだけさせて、でも肩に桜吹雪を描き忘れてしまったり（苦笑）。彼も面白がってデザインしましたね」

――一方で、桂さんと言えばやはり美少女。ブルーローズはかなりのセクシーキャラですね

「キャラをデザインする前の設定では、アイドルではあったんですが、歌うという設定はなかったんですよ。だから僕の中でイメージは〝ナース〟と決めたんです。ブルーローズが歌うのを知っていたら、また違ったデザインになっていたでしょうね。……本当は僕の中で〝ヒーローの中にセクシーな女性はいらない〟という考えがあったんですよ。だから最初は胸もばっちり隠れていたんです。露出が多いと戦う時にケガをしやすいとか、ヒーローにとってデメリットが多いでしょう」

――確かに！

「でも、サンライズさんから『胸元を開けてほしい！』という強い依頼があったので……（笑）。そこで、ささやかな抵抗でニセ巨乳にしました。透明パーツで大きく見せているだけだ、と（笑）」

『TIGER & BUNNY』は息子のような存在です（笑）

――アニメを見た感想はいかがですか？

「監督のセンスは素晴らしいし、会話劇も楽しいし、脚本がかなり面白いと思います。今のところはアメリカンドラマを見ているような感じですね。嫌味もないし、何も考えずに楽しめるのがいいと思いました。なんというか、会社勤めのヒーローがリストラを受けるなんて、よく考えたらヘンな話なんだけど、自然と受け入れてみることができました」

――ご自身でデザインしたキャラクターが、ご自身とは違う原作、ストーリーの中で躍動するというのは、ご覧になってみていかがですか？

「不思議な感覚ですね。う〜ん、自分の原作の作品の場合は、アニメ化されたものを見ると、自分自身の姿を見るような感覚になってしまって、実は見るのがとても恥ずかしいんです（苦笑）。でも『TIGER & BUNNY』は自分が原作のアニメ化とは全く違う感覚ですね。自立した息子が社会に出て働き始めた、というような感覚と言いますか」

――成長を見守るような感じでしょうか？

「というか、僕はデキの悪い父親という感じですね。子供は造ったけど、全く子育てをしないような父親で、それで久々に子供たちに会ったらちゃんと人格もできていて、立派に育ったなぁ……みたいな（笑）。デザインをした後でキャラクターの設定から変わってしまったことも、たくさんあります。虎徹に娘がいたことも知らなかったり〝最終的にこうなったのか！〟と驚くことが多いので、視聴者として楽しみにしている部分が大きいんです」

――ストーリー展開に関して、リクエストなどをしたことはあるんですか？

「悪の組織は出てこないんですか、と聞いたことはあるんですが、それもどうなったのか知らないままですね（笑）。でも、僕としては最後に感動できるといいなと思っています。僕は感動モノが好きなんですが、この作品は、子供のような存在でもあるので（笑）、哀しいだけの感動ではなく、嬉しくなるような感動をさせてほしいな、とは思います」

多様化する正義の中でヒーローを描くのは難しくもあり楽しくもあるんです

――『ウイングマン』や『ZETMAN』を描いてこられた桂さんに、現代にヒーローと正義を描くことについて、伺いたいのですか

「正義にも多様性があることをみんなが気づいているんですよね。僕も自分の漫画では、いろんな種類の〝正義〟が必要になってくるんだけど、それぞれの登場人物にとっての〝正しさ〟がある種の〝正義〟として描くようにしているんです。だから、僕が描いている漫画には正解がないんですよね。例えば、日本の中で一番正しい行為と思われていることも、世界では正義でもなんでもないことかもしれない。正しい＝正義ではないかもしれない。だから、ヒーローの描き方、まして や正義の描き方はどんどん難しくなってきていると思うんです。でも、正義にもヒーローにも多様性が出てきたからこそ、作り手としては描きやすい側面もあるし、楽しい部分もあるんです」

――『ZETMAN』では正義の定義もあやふやでヒーローの葛藤や苦悩が滲み出ていますよね

「だからこそヒーローに共鳴するだけではなく、敵側に共感を覚えることもあっていいと思うんです。僕が描く漫画の場合は、正義も悪も決めつけて描いていないから、いろんな感じ方があっていいと思います。だから、僕にとっては恋愛モノよりはヒーローものを描く方が楽なんです（笑）」

――え〜！そうなんですか？

「僕は恋愛モノでは、女の子をカワイク描かなきゃならないので、かなり疲れてしまうんです。『電影少女』も『I″s』も描くのはものすごく苦労したんです」

――僕は、桂さんが『電影少女』で描かれた女性キャラが大好きでした！

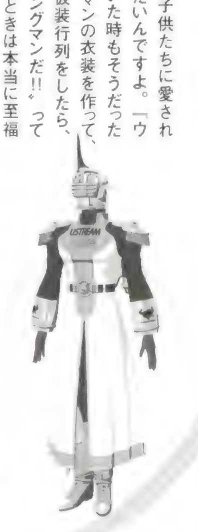
「（笑）ありがとうございます。でも、僕がこれまでに少年ジャンプでかなり描いてきたので、しばらくは描きたくないでしょうね。僕も、もういい年齢なので、もっとシンプルな絵の漫画を描きたいんです（笑）」

――シンプルな？

「そうそう。実は僕は子供たちに愛されるような漫画を描きたいんですよ。『ウイングマン』を描いていた時もそうだったんですけど、ウイングマンの衣装を作って、当時通っていた学校で仮装行列をしたら、子供たちに〝あ、ウイングマンだ!!〟って言われたんです。あのときは本当に至福だった……。当時はコスプレなんて言わなかったんですが、クオリティーはかなり高かったんですよ（笑）。ヒーローのアニメを放送するなら、やっぱり子供たちに向けてほしいですし、僕自身はいつかは子供たちに喜んでもらえるような漫画を描きたいですね」

――では最後に桂さんにとってヒーローとはどんな存在か教えてください

「この質問が一番困るんですよね（苦笑）今、ヒーロー漫画を描いてますけど、〝ヒーローとは何だ〟とか考えて描いていないので（笑）。僕が思うのは、そうだなあ……、最近の東日本大震災の最前線で戦っている人たちでしょうか。誰かに勇気を与えられるモノがヒーローなんじゃないかと思いますね。なので、『TIGER & BUNNY』の虎徹はヒーローなんだと思います」



PROFILE
かつら・まさかず●1962年12月10日生まれ。'83年、週刊少年ジャンプ(集英社)に「ウイングマン」で連載デビュー。「電影少女」「I″s」などヒット作を続々と発表する。現在、週刊ヤングジャンプで「ZETMAN」を連載中。画業30周年記念本「桂大全」(集英社)が6月30日に発売される。

ポイントは人それぞれだと思うので、偉そうなことは言えないんですが（笑）、でも『TIGER & BUNNY』の中に、そんなヒーローを見つけて頂けたら、僕は幸せです」

※1 競泳水着問題
2008年、北京五輪開催直前に、代表選手がメーカーとの独占契約のために、着用する競泳水着を選べないという問題が浮上した。
※2 プロダクトプレイスメント
アニメ、ドラマ、映画などの劇中において、スポンサーロゴや特定の商品をストーリーに絡ませて登場させる手法。

海外の『T&B』情報

史上初となるUSTREAMでのほぼ同時配信（5/14放送では視聴22000人超え）など、とにかく話題が尽きない「T&B」。もう一つ斬新なのは、現在、海外4カ国（アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリア）にて、国内TV放映後の同日で配信しているということだ。スタッフによると、視聴数はアメリカで特に絶好調。アメコミタッチの世界観はもちろん「とにかくストーリーが完璧でのめりこんでしまう」「細部まで芸が細かいところが素晴らしい」など、ストーリーや構成に注目が集まっているようだ。

さらには、各国のアニメレビューサイトでも評価は高く、ソーシャルネット上ですでに話題に上っているというほぼ同時配信ならではの現象も。

デザイナー
とにかく"見切れさせて!"、"見切れさせて!"と(山)がうるさかった誌面ですね。そもそも文字分量が見切れる程多いのに、何を見切れさせるのか、と。

GOOD LUCK!
TIGER & BUNNY

ブロスも最終回まで熱視線を注ぎこんだ『TIGER & BUNNY』にNEXT PROJECTの動きが発覚! ってことで、このアニメが残した記録と今後の展開を緊急特集します!

取材・文・構成 山本 泰行(寅年)
現地特派員 ミヤタ カフル(兎年)
©SUNRISE/T&B PARTNERS・MBS

とにかく最初から最後まで飽きさせることなく"アニメの新機軸となる仕掛け"を展開し続けた「TIGER & BUNNY」(以下タイバニ)。

劇中のヒーローキャラクターに実在する広告を入れるという斬新な手法もさることながら、史上初となるUSTREAMとの地上波同時連動放送で話題をかっさらい、その巧みなストーリー展開と魅力的な人間ドラマで、最高同時視聴者数は77000人超えを記録(最終話)。ツイッターでのハッシュタグ(#tigerbunny)の使用頻度は2カ月連続1位(7月・8月)となり、最終回劇場プレビューイベントではアニメ作品では最多となる86スクリーンでの公開! とにかく話題も記録もワイルドに席巻し続けた。

そこで、先日のイベント密着レポートとともに、タイバニの製作秘話とNEXT PROJECTについて直撃した田村P×松井P特別対談も掲載。最終回は迎えたが、まだまだ続く数々の"仕掛け"でタイバニファンを今後も楽しませてくれそうだ!

TIGER & BUNNY 最終回上映会イベント
『TIGER & BUNNY ～ ありがとう! そして、ありがとう!!』熱狂レポート!!!

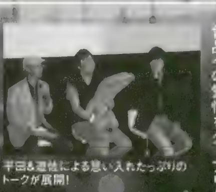
去る9/17(土)深夜に開催され、公開規模は日本各地で44館86スクリーン! 総動員数は約2万2千人! 史上初となる劇場でのツイート&鑑賞スタイル! とにかく大盛り上がりを見せた"歴史的イベント"の様子をレポートします!

<出演>平田広明(ワイルドタイガー役)、遊佐浩二(ルナティック役)、井上剛(スカイハイ役)、さとうけいいち監督、西田征史(シリーズ構成・脚本)、桂正和(キャラクター原案・ヒーローデザイン)、尾崎雅之エグゼクティブプロデューサー、田村一彦プロデューサー、松井千夏プロデューサー

ってことで、新宿バルト9への潜入取材を敢行! 会場はとにかく溢れんばかりの女性、女性、女性。グッズ販売コーナーと女子トイレは長蛇の列(ちなみに男子トイレはガラガラ)で、タイバニは女性に熱烈な支持を得たのだなあと改めて実感。開演直前の虎徹&ユーリによる、小芝居風アナウンス「注意を守れない時はタナトスの裁きを～」なども、ステキで、かゆい所に手が届くファンサービスもバッチリでした。最終回の上映は、携帯でツイートしながら鑑賞という画期的なスタイルで、大きな一体感を得られたカンジ。このプレビュー形式は、今後定番化しそうな予感です。そして、トークショーでは、虎徹役の平田広明らキャスト陣が"感無量"の思いを語り、さとう監督はファンへの感謝の思いを感涙しながら綴るなど、作品への愛情をタップリと吐露。そして、NEXT PROJECTに加えて「また虎徹とバーナビーのセリフを書きたいですね」(西田征史)というコメントなど、新しいエピソードを存分に期待させるあたりも、ファンにとっては嬉しい限りのイベントに。

史上初の記録づくし、ファンも感嘆、となったこの最終回イベント。今後は、NEXT PROJECT第1弾イベントを皮切りにさらなる展開を見せてくれそうです!

さとうけいいち、西田征史、そして桂正和らも愛情に満ち溢れた製作秘話を……


平田&遊佐による思い入れたっぷりのトークが展開!

まだまだワイルドに続く『TIGER & BUNNY』の"仕掛け"

●イベントを展開!
NEXT PROJECT第1弾イベント
『TIGER & BUNNY』HERO AWARDS 2011
11月13日(日) 神奈川県民ホールにて開催

●大好評DVDも続々リリース!
10/26(水)リリース
Blu-ray初回限定版⑥7,350円(税込)3話収録。
桂正和描き下ろしイラスト使用特製ブックケースなど初回限定5特典付き。

●10月より再放送をスタート!
TOKYO MX
10/4(火)スタート 毎(火)後11・00～11・30
BS11 10/7(金)スタート 毎(金)後6・30～7・00
※アニマックスでも絶賛放送中!!

最新情報はこちらでチェック!! HP▶http://www.tigerandbunny.net/ ツイッター▶@TIGERandBUNNY

最終回の盛り上がりが凄かったのと最終回以降の展開を取材したくて急遽企画した特集。(山)は出張先の北九州のライブビューイングで体感。満員でした～。 編集

田村一彦プロデューサー(サンライズ)×松井千夏プロデューサー(バンダイビジュアル)

TIGER&BUNNY GOOD LUCK! 対談!!

その面白さはもちろんながら、ツイッターの情報網を最大限に駆使しつつ、地上波とUSTREAMのほぼ同時放送という、テレビ史上初の試みも見事にハマった『TIGER & BUNNY』。その仕掛けの裏側について、そして、先日発表があったばかりのNEXT　PROJECTに関して田村P&松井Pに直撃した——。

——最後までマジ面白かったです。最終回を見終えても、もっと見たい"と感じました!

田村P「いやぁ。素直にうれしい限りです。タイバニはスタッフが一丸となってゼロからチャレンジしたオリジナルの作品でしたが、ファンの方に愛されるモノになったって実感しています」

松井P「バンダイビジュアルとしても久しぶりのオリジナル作品だったので、"大きな作品にしよう"と、かなり力が入っていたのですが、ファンの方々の応援のお陰で最後まで放送できました。特にタイバニはファンの方々の声や応援の大きさをダイレクトに実感できた作品になりました」

——最近はテレビを見ながら呟く視聴スタイルが定番化しつつありますが、視聴者の声が届きやすいという意味でも、特にタイバニはソーシャルネット(SNS)との相性がいいアニメだと感じました。

松井P「確かにそうですね。オフィシャルのツイッターアカウントを立ち上げた当初はフォロワーが数百人で、スタッフと"1000人目指したいね"って話していたんです。ところがUSTREAMの放送が始まってからまさに桁違いにフォロワーが増えて、6万7千人(9/20現在)を超えるまでになりました」

——松井Pはオフィシャルツイッターの"中の人"でもあるわけですが、フォロワーからの支持を集める工夫はされていたんですか?

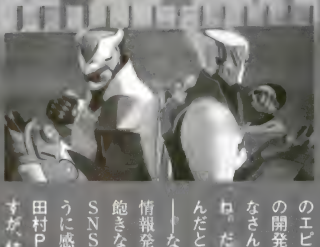
松井P「放送の1時間前と10分前に、"準備はいいですか?"と呟くことを最初に決めたんです。1時間前なら家に帰れるし、10分前ならお茶を用意してトイレに行けると思って(笑)。メールマガジンを配信する予定がなかったので、最初はツイッターがその役割を果たしてくれればと考えていました」

——なるほど、速報性が強いからメルマガよりも攻めの情報提供ができますね。

松井P「とにかく商品のリリース情報やイベント情報などは早く発信しようと心掛けました」

田村P「松井さん、この半年間は完全にツイッター担当でしたね。イチ速く情報を出してくれるので僕たちもホントに助かりました(感謝)」

松井P「本来はツイッターの担当ではなかったんですよ(苦笑)。ただ製作現場に携わっていると、声優さんのアフレコ現場でのエピソードは面白いし、商品の開発エピソードなんかも、みなさんに伝えたくなるんですよね。だから積極的に参加できたんだと思います」



——なるほど、ファン目線での情報発信だから、フォロワーも飽きないわけですね。田村PはSNSとの相性に関してどのように感じましたか?

田村P「新しい発見だったんですが、特にオリジナル作品は、ツイッターのようなSNSと相性が良いと感じましたね。テレビを見た翌日に、学校や職場でみんなとワイワイ話すのが楽しいのと同じ感覚なんですよね。でも今は、見た瞬間に勝手に妄想して先読みして、それがネット上でその日のうちにコミュニティーになる。それが楽しいですよね。あと、土曜の夜という"夜更かしがしやすい時間帯"もSNSと相性が良かったんじゃないかなと思っています」

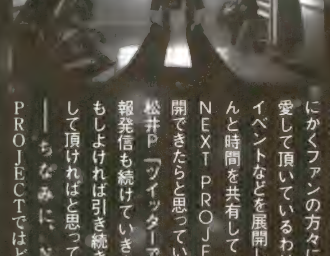
——そういったツイッターでの反響は、USTREAMでの視聴者数に直結しましたよね。最終回にかけてどんどん増えて、最終回には視聴者数超を7万7千人超え(!!)を記録しました。

松井P「やはり視聴して頂いている人数がわかると"今この瞬間に、こんなにもたくさんの方々に見て頂いてるんだ"というのがダイレクトに伝わりますよね」

田村P「人数がわかるというのは非常に大きいですね。スタッフもタイバニを制作しながら、土曜の深夜はみんなで一緒になってUSTREAMで見ているんです。するとツイッターのタイムラインが目に入るんですよね。"あーこういうこと思ってるんだなあ"って。それで一部修正したこともありますし……」

——一部修正ですか?

田村P「例えばですね、1話を見た視聴者の方々がそれぞれのヒーローに対して強い思い入れを入れていただいていたんですよね。本名より企業さんのお名前で呼ばれていたり(笑)ですので、ヒーロー達のセリフ周りを一部修正しました」



松井P「そういった経緯などもあって、放送後にはファンの反響の大きさから、少し台詞を増やすことになったんです」

田村P「でも、基本的なストーリーは全く変えていません。ラストのウロボロスマークで終わるのも、企画当初からあの雰囲気のシーンで終わらせる事は決まっていましたね」

——非常に意味深でありながらも爽快感のあるラストでしたねぇ(思い出して感動)。

田村P「(笑)ありがとうございます」

——もうひとつ、個性的なヒーローたちの成長劇であり人間ドラマとしても楽しめる所もまた、タイバニの大きな魅力だと思うんですが

田村P「これは構成・脚本の西田征史さんと西田さんチームの才能のスゴさですね。タイガー&バーナビー2人の独特の空気感と、ヒーローたちの奥深いドラマは西田さんのエッセンスなくしては作れなかったと思います。そのおかげで皆が愛されるキャラになりましたから」

松井P「西田さんによって生み出された見切れるだけのキャラ折紙サイクロンは、私の予想を超えてすっごく成長したキャラです。最後まで人気キャラでいてくれたことが私は嬉しいです」

田村P「僕としても、桂(正和)さんから事あるごとに"早く折紙サイクロンに手裏剣を使わせてやってくれ"とリクエストを頂いてたんですが、終盤にやっと見せることができて良かったです。しかしながら、桂さんに一生懸命考えて頂いたヒーローたちの"メカ的な見せ場"があまり作れなかったのは、僕の中では後悔しているんです。ですからNEXT PROJECTでは、メカ的な部分もどんどん見せていければと個人的には思っています」

——それは楽しみですね。では、すでにお話にも出ているNEXT PROJECTについてお伺いしたいのですが……。

田村P「まずは11/13のイベント(コラム参照)で何かが起こります。とにかくファンの方々にせっかく愛して頂いているわけだから、イベントなどを展開してみなさんと時間を共有していく中で、NEXT PROJECTを展開できたらと思っています」

松井P「ツイッターでの最新情報発信も続けていきますので、もしよければ引き続きチェックして頂ければと思ってます」

——ちなみに、NEXT PROJECTではどのようなストーリー展開を予定しているんですか?

田村P「僕としましては、この作品は誰もが主人公になれる要素があると思っているんです。ルナティックが主役の物語ができる可能性なんて十二分にありますよね?」

——面白いですよねぇ……ということは、もしかしたらNEXT PROJECTではバディアクションではない可能性も?

田村P「もちろん『TIGER & BUNNY』でやります。内容はまだまだ未定ですが……」

——では、お2人のリクエストも込みで、NEXT PROJECTでやってみたい事は?

松井P「タイガーとバーナビーの落ち着いたコンビっぷりをもっとしっかりと見てみたいですね。あとは、ドラゴンキッドが故郷に帰るエピソードなんかも興味がありますよ?」

田村P「ドラゴンキッド、いいですよね〜。僕はとにかくスピンオフがしたいです。『ベン&斎藤さん』とか」

——っ!!「ベン&斎藤さんTHE MOVIE」で映画化を希望します!!

田村P「わかりました。考えておきます(笑)」

——(笑)。では、最後にブロス読者にもグッドラック!という事でメッセージをお願いします。

松井P「テレビブロスさんには早くから取り上げて頂いて、読者のみなさんにもタイバニに長くお付き合い頂きありがとうございます。これからもどんどん続いていくので、末永い応援よろしくお願いします!」

田村P「タイバニはファンの人たちに愛されて一緒に成長できた作品です。今後もみなさんが楽しみにしてくれる限り、いろんな展開をバシバシ作っていきたいと思っていますので、楽しみにしていてください」

デザイナー　このページのデザインをしているときは、フライパンやキュウリパックのシーン画像をタイトル周りに使用する意味がよくわからなかったのを覚えてます。

米たにヨシトモ監督 ビギニング! インタビュー!

その個性的すぎる風貌から、いったいどんな人物なのか? まさかNEXTでは? などと我々の興味も最高潮のままに、米たにヨシトモ監督に直撃インタビュー! その見た目から予測のできない物腰の柔らか～い口ぶりで語っていただいた「T&B」のお話は必読ですよ～。

●撮影 内野秀之

──まずは、米たに監督が『T&B』と関わったきっかけから教えてください!

「企画が始まった頃から、私も『T&B』の現場にいたのですが、完成までに合計で4年ぐらいかけて練りに練った作品なんですね。その間にパイロットフィルムを作っては"面白そうだけど、ウケなさそう"という不安もあって、"この企画は失敗するんじゃないか"と思っていた時期もあったんです。ただ、作り手が面白いと信じて真剣に取り組めば、ユーザーも楽しんで受取ってくれるハズだ……、と。そういう思いで第1話を送り出したのを覚えています」

──では、第1話が放送された時は、感慨もひとしおだったのでは?

「放送前には震災もあったので、放送自体できるかどうか……という状況でしたが、この作品を見た人たちが元気になってくれれば、という願いがとにかく強かったですね。作品としては、企業ロゴを背負って戦うヒーローたちの悲哀や人間性、そこがコメディータッチで描かれていく部分が斬新でしたので、作品の魅力と、可能性はとても感じていました。ただ、いざ視聴者の反応を見ると"え? そこがウケるの!?"という予想外の発見も多くて、とにかく『T&B』の反響は、私にとって驚きの連続でしたね」

──そんなファンの反響が広がる中で劇場版の監督を担当されることになったのですね。

「はい。テレビ版では第1話と後期のOPの絵コンテを担当していて、もっとたくさんお手伝いをしたいと思っていたんですが、まさか劇場版で監督をすることになるとは……、と(笑)。実写の作家である西田征史さんと、漫画家でいらっしゃる桂正和さん、それにデザイナーでもあるさとうけいいち監督といった、まさに奇跡的なスタッフィングの上にできた作品なので、"俺みたいな普通の男が作っていいのか!?"という思いもあったのですが……(笑)」

──何をおっしゃいますっ! ちなみに、監督として参加されてみていかがでしたか?

「やはり映画となると、大きな仕掛けや山場を入れたくなるモノなんですが、この『T&B』劇場版は、私の知りうる他のアニメ映画とは全く違う方法論で作られています。というのは、映画としてウケる要素をあえて外して作っているんですね。でも『T&B』として外せない要素は絶対に守っている。つまり、強引な足し算はせずに、理に適った引き算を心がけたのです。ただ、引き算でヒットを目指すというのはとても勇気がいることなんです」

──確かに。でも"理に適った引き算でヒットを目指す"という所がとても『T&B』っぽいですよね。そんな意味で劇場版の見所はどこでしょう?

「ヒーローたちの際立たせ方ですね。"コレを映画でやっちゃうの?"と私も驚くような方法で、ヒーローたちの内面を描いています(ニヤリ)。それと、西田征史さんがテレビ版では描ききれなかった部分を、整合性を取りながら掘り下げている部分じゃないでしょうか。テレビ版で描ききれなかった部分を劇場版では補完しているのですが、これはスタッフと本当に長い時間、それこそ真剣に意見をぶつけ合ってもがき苦しんだ中で、たどり着いた決着点でもあります。ファンのみなさんにとっても、私たちスタッフ陣にとっても『T&B』は宝物。だからこそ世界観はできうる限りいじらずに、整合性を取りながら、意外性のある部分を掘り下げたわけですが、その落としどころまでスタッフ全員でこれだな、という実感がすごくあります。その末に"普通ならここを掘り下げるべきだけど、あえてココを!"という部分がたくさん出てきますが(笑)、そのあたりはぜひ観ていただきたいですね」

──確かに、各ヒーローの背景や、スカイハイの愛犬ジョンも気になるところですね。

「ジョンですか!?」

──はい! そのあたりも注目してますね～

「そこに着目しますか～(苦笑)」

──(笑)ちなみに、テレビブロスは創刊25周年を迎えたのですが…。

「それは、おめでとうございます! そんな記念の号で『T&B』が表紙を飾るなんて、素晴らしいですね。テレビ欄が載っている雑誌の中で、いつも絶対にやらないような事に挑戦してるじゃないですか。"巻頭特集なのにそれやっちゃうんだ"みたいなね…」

──あ、まさに『T&B』的な…。

「(笑)。そんなブロスさんの心意気を買ってます。あ、誌面も買っていますけどね」

──わわ、ありがとうございます!

よねたに・よしとも●'63年5月12日生まれ。'89年「笑ぅせぇるすまん」でアニメ監督デビュー。「勇者王ガオガイガー」('97年)、「Dororonえん魔くん メ～ラめら」('11年)劇場版「ドラえもんズ」シリーズなど数々のアニメ作品を手がける。実は自他ともに認める大のカレー好きだが、その辺のお話は、次号で掲載(予定)!?

いよいよ9/22㊏公開!!!

劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-

松竹・ティジョイ系列で公開

今年も「TIGER & BUNNY」が劇場版で話題と仕掛けを事件に変える!

ヒーローたちによるショーアップされた悪党退治を派手に描いた痛快バディ・アクション『T&B』。そのわかり易い内容ながらヒーローの悲哀を活写し、さらには世界観にまでマッチさせたプロダクトプレイスメントによる広告展開、史上初となった地上波とUSTREAMのほぼ同時連動放送(最高同時視聴者数はナント約9.3万人!)、日本各地の映画館で2万人以上(!)を動員したライブビューイングによるイベント展開など……。昨年4月の放送開始以来、とにかく数々の仕掛けと話題を"事件"に変えてきた本作だが、劇場版でも、その"仕掛け"は数々展開されている模様だ。TVシリーズの再構成と言いつつも、ヒーローたちの名台詞と名場面はそのままに、新規映像の数々に新しいストーリーを交えた『T&B』ワールドが展開されることは間違いなさそう。ブロスもガチで楽しみにしてマス。

▲ピークを過ぎたおじさんヒーロー虎徹と、新入りながらクールかつド派手に活躍するバーナビー。この新旧の2人が真逆の性格、反発するヒーロー観、そして世代ギャップにあえぎながらもコンビを組むのだが……。

!ってことで、次号より"『T&B』超ド短期カウントダウン連載"がスタート、か!?

昨年11月に2作品同時制作が発表された"劇場版"の全容が徐々に明らかになってきたところで、我々テレビブロスも総力取材をビギニング! だがしかしっ! そんなアレコレを紹介するのも(たとえ文字が小さいとご叱責を受けるテレビブロスといえども)誌面が足りそうにありません…。そこでっ! 次号より劇場版の公開の直前まで、"超ド短期!! カウントダウン連載"をやる(予定)でっす! 記念すべき連載第1回目では昨年発売した桂正和さん描きおろしテレビブロス(2011年5/28号・写真右)のプレゼント(あの人たちの直筆サインが入るかも…大丈夫!? なんかも予定しているよ!

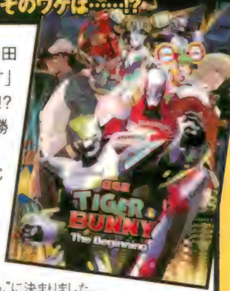
※超ド短期連載はあくまでも予定です(7月7日の七夕の日現在)。次号の内容は予告なく変更の可能性もありますので ご容赦ください。

TV Bros.創刊25周年記念号に表紙&カラーセンター企画特集です。と同時に、短期連載もやりたいと決まる前からノリだけで見切れ気味に告知してますね(汗)。 編集

START UP!!『TIGER & BUNNY -The Beginning-』

～劇場版公開おめでとう! そして、創刊25周年おめでとう!! from『T&B』～

どうも、創刊四半世紀を迎え、21世紀の現在でも白黒誌面で頑張っちゃってる方、テレビブロスです。今回は昨年の放送開始前より陰ながら応援し続けてきた「TIGER & BUNNY」を、ピンナップ付き(テレビブロスっぽくないよね～)で、なんとカラーでの特集を展開! ってことで、『T&B』のみなさんから創刊25周年をお祝いしてもらいつつ、9月22日に公開を控えた劇場版のお話もちょいちょいっと紹介しますよ～。ん!? なぜにちょいちょいっとなのか!? そのワケは……!?



とにかくおめでたい記念のプレミアム号にカラーページでご登場いただくのは、虎徹&バーナビーを演じる平田広明さん&森田成一さん。劇場版のお話からテレビブロスについてまで、ワイルドに! クールに! 語っていただきました。

TIGER & BUNNY × TV Bros.

構成・取材・文 山本 泰行

©SUNRISE T&B MOVIE PARTNERS

ワイルドタイガー／鏑木・T・虎徹
平田広明
×
バーナビー・ブルックスJr.
森田成一
ワイルド&クール対談

●撮影＝濱尾香智子

ひらた・ひろあき●8月7日、東京都出身。A型。アニメ『ワンピース』サンジ役、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』ジャック・スパロウの吹き替え等、数々のアニメ作品、映画の吹き替え、ナレーションなど幅広く活躍。第11回東京アニメアワードで鏑木・T・虎徹役で声優賞受賞。

もりた・まさかず●10月21日、東京都出身。A型。アニメ『BLEACH』黒崎一護役、『戦国BASARA』前田慶次役などアニメ作品、ナレーションのほか、俳優としてドラマや舞台などでも活躍。ラジオ『VIRTUAL ADVENTURE 2 星空サンライズ』(FM NACK5)にも出演中。

――劇場版公開決定、おめでとうございます! まずは劇場版が決まった時の感想を伺いたいのですが…。

森「これは僕の頭の中で勝手に思っていたことなんですが、TVシリーズがスタートした最初の頃に"これは劇場版も作るだろうな"という感触があったんです。『T&B』が面白いのは間違いなかったので、もう勝手に"やるべきだ"と(笑)。ですから、劇場版が決まったときも驚かなかったですね。ただ、TVシリーズですべてを出し切った感覚もあったので、スクリーンではどんな『T&B』を提供できるだろうか…と、不安と期待の入り混じった感覚はありました」

平「僕が驚いたのは"映画を2本作ります"って発表された事ですね。僕たちのみならず、ファンの皆さんに対しても、しょっぱなから2本作りますって発表しちゃったからね。こりゃ『男はつらいよ』の寅さんを追い越しちまうぞって……」

※『男はつらいよ』劇場版は全48作品

森「寅さんって、それはすんげぇ先長いっすよ!」

――つまり、タイガーだけに寅さんなワケですね!

平「!? そ、そうですよ!」

森「(苦笑)今、気づいてなかったでしょ!?」

平「んぁ!? 我ながらうまいこと言ったでしょ」

――(笑)では、ゆくゆくは"寅さん"を超えるシリーズ化が目標ということで。

平「!! 台本だってテレビシリーズとは比べられないくらい、相当重かったのに、そんな大変そうなこと……楽しそうですね(ニヤリ)」

森「夏に1本、お正月に1本で1年2本ペースですよね…絶対に無理だけど、楽しそうですね(ニヤリ)」

平「でも、まあとにかく目の前の劇場版を頑張りたいと思いますよ(ギラリ)」

森「そうですね(キリッ)」

――『T&B』といえば昨年のTVシリーズで地上波&USTREAMでのほぼ同時放送(史上初)、ツイッターでの情報展開を繰り広げて、爆発的な話題になったことも、大きなファクターでした。そういった意味でファンからの影響も大きかったのではないでしょうか?

平「僕はネットで視聴する習慣がなかったもんですから、最初の頃にUSTREAMの視聴者数が"1500くらいだった"と言われても僕にとってはピンと来なかったんです。でも放送中にどんどん反響が大きくなって、嬉しさと共に、"やっぱり面白いよな"って僕の中で確信になりましたね。作品の面白さは分かっていましたから」

森「TV放送前は下馬評が酷かったんですよ。だけど、オリジナルの作品で、放送から約1年後に劇場版を公開することができるというのは、まさしく視聴者、ファンの方々のお力の賜物だとハッキリ感じています。だから自分の気づかないところで、きっと影響は受けていると思いますね」

平「確かに、ファンの方々の応援に、ものすごく後押しされた部分はありますね。特に皆さんと直接会えるイベントで実感できるんですが、やはりファンの応援は心強かったですね」

森「昨年の最終回上映イベントでは、日本各地の皆さんとライブビューイングで結んで、一体となって鑑賞できましたしね……」

平「そうだね。昭和の映画館ってさ、きっとあんな感じだったと思うんだよ。歓声や笑い声があがって、ライブビューイングとはいえ一体になってスクリーンを楽しんで。僕はあの興奮をずっと覚えていて、劇場版でもそんな興奮を味わってもらえたらって思っています」

――楽しみですね～。楽しみといえば、平田さんも最近ツイッターを始めたそうで。

平「遅ればせながら、時々つぶやいてます。一発目は『T&B』でつぶやかせていただきましたけど、すんごかったよ、反響が! ツイッターでは虎徹ばかりではないと思いますが、この夏は、舞台もあって劇場版もあるので、"虎徹率"は高いでしょうね」

――森田さんはツイッターの影響は?

森「TVシリーズではバーナビーのスーパークールな"ツンキャラ"が後半デレキャラに変わったわけですが、その時に「バーナビーのツンを返せ!」というツイートがすごく流れてきました(笑)」

――それはスゴい反響ですね!

森「僕のせいではないので困りましたけれど(苦笑)、まぁそれもわかるな、と(笑)。なので、そう言った方々に、"劇場版ではあのツンが帰ってきますよ!"と言えるのでホッとしています(笑)」

――『T&B』の放送前後で身の回りに何か変化は?

森「そうですね…。英語混じりで次回予告を演らせていただいたんですが "イングリッシュ"ならぬ"バニングリッシュ"と呼ばれていて。以来、僕の使う英語は"バニングリッシュ"で定着してます。それと、平田さんが呼び始めた僕のあだ名"バニかず"もすっかり定着してしまって…」

平「よっしゃ!」

森「"よっしゃ!"じゃないんですけどね」

平「いや、まだ"森田"と呼んでいる人もいると思うので、これからは誰もがバニかずと呼ぶように仕掛けてやる!」

――では、本誌で拡散しておきます。

平「ありがとうございます。正式には、"ばにた ばにかず"なんです」

――表記は決まっているのですか?

平&森「バニはカタカナで田は漢字です」

――では、下の名前は?

平「(森田を遮って)えーっとね、ばにかずのかずを漢数字の一にすると、ただのバニーになっちゃうので……」

森「!? いつのまにそんなことまで!」

平「だから、カズは平仮名に変えました。なので"バニ田バニかず"です」

森「ひらがな!? 人の名前を勝手にぃ!」

平「ま、いいじゃない!」

※ちなみにその後ラジオで、平田さんのあだ名は"1分おじさん"に決まりました。

――ちなみに、テレビブロスが創刊25周年とあいなりまして、メッセージを寄せていただければと…

平「こりゃ、おめでとうございます!」

森「創刊25周年! スゴイですね! おめでとうございます!!」

平「25年 25周年 25年前……。あ、もう大人だったわ。ちょうど、お仕事をいただくようになって、少しづつテレビ欄に名前が出るようになった頃ですね。そう思うと感慨深いなあ」

――ちなみにテレビブロスはご存知ですか?

平「昨年の桂(正和)先生の描きおろしの表紙を特集していただいたでしょ? 久々にコンビニに走りましたよ」

森「僕もあのブロスは買いました」

――それは嬉しいですねえぇぇ!

森「テレビブロスってどんな対象にもグッとマニアックに突っ込んでいくカンジがありますよね。エッジが効いていて、僕はいいなといつも思っています」

平「ん!? バニかずってそんなにテレビ誌読み比べてんの?」

森「ブロスはけっこうエグってるので、特殊な雑誌ですよね?」

――はい。最大級の褒め言葉です!

平「じゃあ、我々もどんな風にエグられるのか楽しみだね」

――それはもうワイルドにエグっていこうと思ってますよ～!

編集 ワイルドに吠えていただいた平田さんとクールに決めていただいた森田さんには、25週年のコメント&ポーズの依頼も快く応えてもらえて最高の取材でした!

実はこのピンナップは背景の色を決めるのに相当時間がかかってます！ 校了ギリギリまで悩み抜きましたね･それほど甲乙つけがたい2パターンでした。

編集

デザイナー

ということで、前回、校了ギリギリまで意見を戦わせた後、当時(山)が泣きながらボツにしたバージョンを特別に掲載いたします。クールバージョンです。

超ド短期連載！ WHAT'S UP!『TIGER & BUNNY』

ついに始まりました！『T&B』超ド短期連載!! 連載第1回目は**はじめが肝心**と言われますが、実は**嘘から出た真実**で企画を通しちゃったこの連載。とはいえ、**案ずるよりも産むが易し**……否、**当たって砕けろ！** な気分でもって、とにもかくにも"タイバニブロス"ビギニングでっす。

SUNRISE/T&B MOVIE PARTNERS
企画・構成・取材・文　山本 泰行

平田広明×森田成一 タイバニ対談

記念すべき連載第1回目にご登場いただくのは、やっぱしこのお2人。前号に続き、まさかの2号連続登場です。今回は、劇場版の見所を語ってもらったぞ！

森田「劇場版は、TVシリーズの印象的なシーンやセリフが随所に盛り込まれているので、初見の方でも『T&B』の魅力をハッキリと認識いただけると思いますし、ファンの方にはある種〝懐かしさ〟さえ感じていただけると思います」

平田「いわゆるTVシリーズの最初の頃の設定なので、僕たちにとっても印象に残るセリフってのがたくさん出てくる。でもさ、重かったでしょ？ 劇場版の台本」

森田「ええ。とても重かったです」

平田「最初に台本を読んだときは、TVシリーズからのセリフの転用も多くて〝こりゃ、お客さんを飽きさせるんじゃないか…〟とチョット心配してたんだよね。だけど、読むにつれて〝だからこのシーンが必要なのか！〟の連続で。良く出来た完成度の高い台本だなって印象だったよ」

森田「そうですね。単に再編集しただけでなく、思いっきり新作カットが入っている…しかも、すべてのカットが整合性をもって作られているので、TVシリーズを入念に見た人でさえ〝気づかないんじゃないか？〟って程、キレイに混じり合っていますよね。映画だから〝凝縮して省略〟したのではなく、劇場版で初めて謎が解ける部分もふんだんに出てくるから、劇場版の後にTVシリーズを見ると、発見が多くてきっと楽しいですよ」

平田「うんうん。TVシリーズで最後まで放送された作品ではあるけれど、この『T&B』ってのは、ソリの合わない虎徹とバーナビーがバディ（コンビ）になる〝最初のきっかけ〟が非常に大事だと思っている。劇場版では、その反発し合う部分を丁寧に掘り下げたところが見所でもあるよね。だけどさ、スタッフから〝泣く泣くカットするシーンがあります〟と連絡が来てさ〝そのセリフは早口で喋るから、なんとかならない？〟って思った…もちろんそうはいかないんだけどさ（苦笑）」

森田「でも削っても何事も無かったかのようにつながっているのが凄い。これだけ情報量の多い作品だと修正は相当大変な作業だと思うんですが、それでも一切スキがないんですね。これは、米たに監督はじめスタッフさんたちが、妥協せずに頭を付き合わせて魂を込めた賜物だと思うし、情熱と愛情を注ぎ込んだのが見てとれるような台本でした」

平田「確かに、ただでさえ重たい台本だったけど、それ以上に〝重いもの〟を感じたね。だからこそなんだけど、こういうカットしなきゃいけないシーンが一杯ある作品ってのは、これまでの経験上でとてもいい作品になる確信があるの。薄皮さえはぐような、まるでボクサーの減量のような作品だから」

森田「それでも、僕のセリフは復活したそうですけどね」

平田「んぁ！ マジで⁉ でも、オレの希望ばかりだと、ただのギャグになってしまうし…やっぱカットされるのは虎徹のところかぁ。チェッ」

森田「とはいえ、完成版は僕たちも見ていないので、その辺も楽しみに待ちましょうよ」

平田「そうだな！ あ！ ひとつ断言できるのは…ワイルドタイガーは相変わらず、いい感じのガニ股で走ってるところ（笑）」

森田「そこは見逃せない部分ですね（笑）」

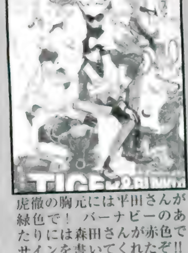
ひらた・ひろあき●8月7日、東京都出身。A型。TVシリーズから1年を振り返り「もう1年も経つの!? やだねぇ。でも同じスタジオ、同じ顔ぶれってのはやりやすかったですね。みんなもそう思って演じられたと思います」。

もりた・まさかず●10月21日、東京都出身。A型。アフレコの思い出は「TVシリーズでは、後半ツンデレの"デレ"ばかりだったのが、劇場版では一転して"ツン"のみでしたので、アタフタしたことが思い出……困ったことでしたね」。

撮影　蓮尾美智子

テレビブロスも"ネクストプロジェクト"始動しまっす！

ヒーローサイン付き テレビブロス プレゼント・済ジェクト 第1回



虎徹の胸元には平田さんが緑色で！ バーナビーのあたりには森田さんが赤色でサインを書いてくれたぞ!!

昨年発売された『T&B』表紙（桂正和描きおろし）のテレビブロス（2011年5月25日号）に、ヒーローを演ずるキャストの皆様からサイン&ヒーローの名前を頂くというプロジェクトが今号よりスタートします（←思いっきり見切り発車）。そして今回なんと!! 平田広明さん&森田成一さんにサインをいただいてまいりました～。ありがとうございまっす！

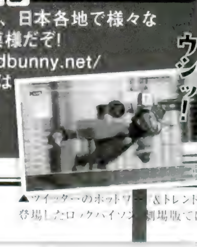
で、せっかくなので、この『T&B』超ド短期連載の間にヒーローのみなさんのサインを集めようというのがこの企画！ 集める様子は次号よりレポートします！ 目指すは表紙に描かれた8人のコンプリート（目標）ど～なるコトやら、続きはwebで…はなく！ 次号に続く！

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』

2012.9.22 ROADSHOW

劇場公開まであと53日（8月1日現在）

●そして、公開までのあいだは、日本各地で様々なプロジェクトが展開されている模様だぞ！
詳しくは http://www.tigerandbunny.net/
そして、ツイッターが見られる人は今すぐ @TIGERandBUNNY をフォロー&チェックだ！



▲ツイッターのホットワード&トレンド（つぶやき数のとても多いワード）にまで登場したロックバイソン。劇場版ではその活躍にも俄然期待がかかる

●『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』監督 米たにヨシトモ

米たに監督と語らう タイバニ・トーク Vol.1 「ジョンとギャップとスパイスと」

◀夏は毎日食べるほどのカレー好きと語る監督

——僕、犬のジョンが大好きなんですよ！ ジョンが出てくるお話（TVシリーズ#15）なんて、泣けちゃって泣けちゃって…

「**わかる。**私もね、大好きなんです。ただ…」

——ただ？

「**ジョンは作画がとっても大変。他のアニメなら〝こりゃ作画できないだろう！〟っていう程、毛並みがバサバサで動かしづらいデザインなんです。**だからある意味では、**すごく贅沢な犬なんですよ**」

——さすがジョンですね～ 贅沢と言えば、米たに監督はとにかくカレー好きである、と

「どこで調べたんですか？」

——ソースはツイッターです（したり顔）

「なるほど（笑）。実は、何年か前から胃腸が弱くなって。それで、体力の衰えを感じていたのですが、その頃にカレーを食べたら元気になったんです。人生には、スパイスが必要なんですよ。**〝スパイスこそ我が命〟です**」

——それはまさに名言ですね！ ちなみに監督の好きなカレーのタイプというのは？

「カレーは、インドカレー、欧風カレー、タイカレーに大別できて、どれも好きなんですが、最も好きなのはスパイスが効いたインド系カレーですね。中でも**日本人がアレンジしたインドカレーが好きですね**」

——インド人が作ったものではなく？ うーん⁉ でも、なんとなくわかります！ では、監督的にカレーを嗜むコツってありますか？

「ホールスパイス（※1）を取り入れるといいですよ。好みもあると思いますが、香りもたちますのでよりスパイシーさを楽しめます」

——本格的に辛いものがお好きなんですね！

「**実は甘いものも好きなんです**」

——!?

「特にアイスクリームが好きですね。実はね、冷たいアイスを食べることで、体は温めようって働くんです。だからアイスは冬にこそ食べたほうが健康にもいいんです（※2）」

——辛い甘い&熱い冷たいのギャップがスゴイですね！

「あ！ 確かにギャップも大事ですね。**スパイス&ギャップというのは『T&B』を監督するうえでも大切にしている部分なんです。**スパイスもギャップもあざとく使っては逆効果ですが、気づかれないようにさりげなく使うことで、〝んんっ？〟というような、魅力的なものになる。その辺はカレー&アイスと同じじゃないでしょうかね」

——なるほど旨い！ いや上手い！ 厳しい夏場はカレー&アイスをお供にタイバニ鑑賞ってのもオツですね！

（次号「ベン&斎藤さん」に続く！）

※1　ホールスパイス　砕いたりパウダーにせず、原型をそのまま残した形状のスパイスのこと
※2　「アイスは冬にこそ良い」あくまでも個人の意見です

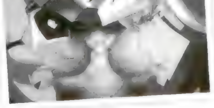
撮影　内野秀之

これがノリと勢いで始まったド短期連載ですね。実はリード文に1話～5話までのサブタイトルを忍ばせたのですが、誰にも気づいてもらえませんでした…。　編集

T&B news

超ド短期連載!

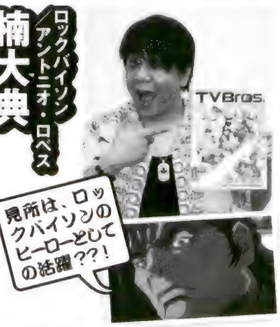
WHAT'S UP!『TIGER & BUNNY』



第2回目の超ド短期連載は、ヒーロー演ずる出演者のみなさんに、テレビブロスの暑苦しいアンケート的な質問に答えていただくSP企画でっす! 前編の今回はこちらの3方にご登場いただきました!『タイバニ』への熱い思いと共に、三者三様の猛暑の凌ぎ方にも注目ですヨ~!!

SUNRISE T&B MOVIE PARTNERS
企画・構成・取材・文/山本泰行

ロックバイソン/アントニオ・ロペス 楠大典



――まずは「映画化決定!」と聞いた時に思わず漏れた第一声とその時の様子を教えてください!

「うし!! またまた皆をギューッとしてやるぜ」と、ジャンプしながら喜びました。

――この劇場版で、楠さんが改めて感じた『T&B』ならではの面白さは?

改めて皆の仲の良さとチームワークの良さをスタッフさん含めて思いました。そんな皆で作った作品を楽しんでください。そこが面白い!

――ちなみに、『T&B』に出演してみて、ご自身に劇的な変化はありましたか?

1日に「ウシッ」て10回は言うようになりました。

――それは劇的な変化ですね! では、力強さに悲哀を忍ばせたヒーロー! ロックバイソンを演じてみて、楠さんが考える〝ヒーロー観〟に変化はありましたか?

活躍するヒーロー、裏で支えるヒーロー、ヒーローは色んな所に沢山いるんだと思います。

――劇場版で改めて感じた、ロックバイソンの1番好きな所と、2番目に好きな所を

①堅い所、色々役だつ。②やわらかい所、性格は人あたりがよくやわらかい。

――劇場版の見所をギュウッとお聞かせください!

改めて、それぞれのキャラをわかった上での収録なんで、全体が見所です。

――ちなみに、今年のモ~烈な夏の暑さの凌ぎ方を教えてください!

暑いからこそ、肉を食べ、堂々としながら麺を食う!

――いやぁこの夏は堂々と麺を喰らうに限りますね! ありがとうございます!

ドラゴンキッド/ホァン・パオリン 伊瀬茉莉也

――まずは、「映画化決定!」と聞いたときの第一声やリアクションを教えてください!

「ぃよっしゃー!!」と思わず、ガッツポーズしました!

――目に浮かびますねー! では、伊瀬さんが改めて感じた『T&B』の魅力とは?

世界に通用するグローバルな感じ…と言うんでしょうか。シュテルンビルトという架空の街での出来事でありながら身近に感じられるリアリティがあるところだと思います。

――なるほどですね。ちなみに『T&B』への出演前後で劇的に変わったことは?

『T&B』の凄いところは、業界内にも「ファンです!」と言ってくれる方が多くて初めてお会いした方でも話のキッカケになったりすることがあります。改めて沢山の方に注目されてる作品なんだなと実感しました。

――『T&B』との出会いで伊瀬さんが考える"ヒーロー観"に変化などはあったのですか?

変わらないですね。私にとってのヒーローは「身近にいる人が誰でも成り得るもの」だと思っています。

――劇場版で改めて感じた、ドラゴンキッドの1番好きな所と、2番目に好きな所を!

①マイペースなところ。「自分は自分」と思ってる所がスキです。
②天然っぽいのに実はしっかり者なところです。

――それでは…伊瀬さんならではの、猛暑の凌ぎ方を教えてください!

黒酢を毎日、飲む事!

――体も柔らかくなりますし、美容にもよさそう! 試してみます!!

ファイヤーエンブレム/ネイサン・シーモア 津田健次郎

――まずは「映画化決定!」の一報を聞いたときの第一声を教えてください!

第一声は「ファイヤ~ん!」(笑)。最高に嬉しかったです。

――劇場版で、津田さんが改めて感じた『T&B』の魅力とは?

壮大な世界観、等身大の人間の葛藤、そしてポップな映像と疾走感etc…。数え上げればキリがない程に魅力的ですね!

――では、『T&B』へ出演されたことで何か実感されたことは?

タイバニを通じてキャストの皆さんや、スタッフの皆さんと出会えた事が、とても幸福です。そして、タイバニを応援して下さる皆さんとの出会い!!

――ちなみに、おネエキャラのヒーロー・ファイヤーエンブレムを演じられて、〝ヒーロー観〟に変化はありましたか?

ファイヤーエンブレムのようなヒーローも素敵だなと思います。色んなヒーローの姿があって、自分のヒーロー観が広がりましたね。

――なるほどですね。ではファイヤーエンブレムを改めて演じてみて1番好きな所、2番目に好きな所を!

①カッコイイ! やる時はやる! そして包容力 ②可愛い♥ 女子のキュートな部分がス・テ・キ♥

――包容力! ちなみに…、テレビブロスって雑誌はご存知ですか?

もちろん知ってます! 「タイガー&バニー」をプッシュしてくれる、とても素敵な雑誌です! これからも宜しくお願いします!

――ぎゃあー!! 嬉しい! では最後に、津田さんならではの、この猛暑の凌ぎ方を!

暑い夏は心をファイヤーして、更に熱くすることよ! 熱くなるのよ! ファイヤーをファイヤーするのよ!

――わかりました!!! ファイヤーをファイヤーしてみます!!

●『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』監督 米たにヨシトモ

米たに監督と語らう タイバニ・トーク「ベン・ジャクソンと斎藤さん」

Vol.2

◀表情が読めないながらもニヤリとする監督

――僕、米たに監督ならコイツが好きだろうって気になってるキャラがいるんですよ!

「ほほぉ。誰ですか?」

――ベン・ジャクソンと斎藤さんです。僕の思い込みですが、米たに好みではないか、と。

「いやいや。**放送当初は最もウケないキャラだと思っていました**(笑)。しかしながら、2人ともウケが非常に良いですし、**斎藤さんなんて、女子からの人気がすっごく高いんですよね。**これには本当に驚きました。ですから劇場版でも大事な部分を背負ってますよ、この2人は(笑)。登場時間はかなり短いのですが、存在感をアピールしまくっています。本来なら劇場版となれば、真っ先にカットされそうな脇役ですが(笑)。長いアニメ史上においても、かつてなかったイイ味出してるキャラクターなもんで」

――僕のようなベン&斎藤さんファンが喜びます。そして"かつてない"といえば、新キャラ・ロビンですね…。

(写真下)

「ロビンは、すでに脚本の西田(征史)さんがある程度温めていたキャラで、話し合いの中で固めていって、劇場版でいよいよお目見えすることになったキャラなんです」

――チャラ男ですよね。ロビンは。

「(ニヤニヤしている)」

――自転車乗ってるでしょ? 変速ギア付きの?

「(ニヤニヤしている)。デザインは、私の方で練らせていただいた後、桂(正和)先生にお願いしたんですが、**いろんなミスリードやフェイクを狙った姿になってます(ニヤリ)**」

――くっ! 監督は表情が読めないなあ。でも、ロビンは敵でしょ! 敵なのですよね!?

「(ニヤニヤしながら)彼はNEXT能力者ですが一筋縄ではいかないキャラ。ある意味、映画で登場するような新キャラの**セオリーを無視した問題児になった**、と自負しています。そう言う意味では、とても『T&B』的といえるかもしれないです」

――はっ! そっちの"的"ですか! では、米たに監督が最もシンパシーを感じているキャラは?

「そうですねぇ。どのキャラも思い入れが強いので絞れないですが…強いて言うならば、ユーリ・ペトロフが好きですね」

――自分の正義を振りかざすタイプですか!

「仲間もいない中で、我が正義のために孤独な戦いに挑んでいく**ユーリのような男は、応援したくなってしまうんです**」

――なるほど。闇な部分を抱えつつも、勧善懲悪では説明できないキャラですよね

「そう。ユーリ扮するルナティックは社会的に成敗できない悪党を陰ながら裁いてしまう、カタルシスを感じさせてくれますしね」

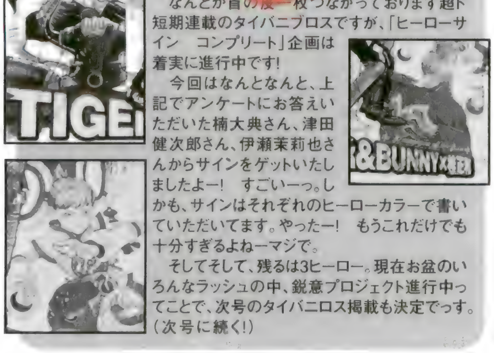
――そういえば、ユーリってTVシリーズの第1話に見切れてましたよね!?

「そうそう、少しだけ出ていましたよね。ですから、そのシーンを思い出していただきつつ、**ユーリファンは楽しみにしてもらえればと思います**(ニヤニヤしている)」

――それは楽しみ! しかし監督、今日は終始意味深な表情でしたね、

撮影/内野秀之

ヒーローサイン付き テレビブロス プレゼント・プロジェクト 第2回



なんとか首の皮一枚つながっております超ド短期連載のタイバニブロスですが、「ヒーローサイン コンプリート」企画は着実に進行中です!

今回はなんとなんと、上記でアンケートにお答えいただいた楠大典さん、津田健次郎さん、伊瀬茉莉也さんからサインをゲットいたしましたよー! すごいーっ。しかも、サインはそれぞれのヒーローカラーで書いていただいてます。やったー! もうこれだけでも十分すぎるよねーマジで。

そしてそして、残るは3ヒーロー。現在お盆のいろんなラッシュの中、鋭意プロジェクト進行中ってことで、次号のタイバニロス掲載も決定でっす。(次号に続く!)

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』

2012.9.22 ROADSHOW

劇場公開まであと39日(8月15日現在)

●公開初日(9/22)には「WORLD PREMIERE」も開催決定! なんとライブビューイングは日本全国113劇場で実施! 興奮&感動間違いなし!のワールドワイドなイベントはぜひお近くの劇場で! 詳しくは http://www.tigerandbunny.net/ そしてツイッターが見られる人は今すぐ @TIGERandBUNNY をフォローしよう!

デザイナー キャストコメントに米たに監督ミニインタビュー…今思えば1ページの分量じゃないボリュームです。ちなみに監督写真は第1回と別カットを使っています!

超ド短期連載！

WHAT'S UP!『TIGER & BUNNY』

やりました！ ついにタイバニヒーロー8名からのコメントをコンプリートォ！ 今回はこちらのお3方が登場です！
“タイバニ”、“残暑”、“テレビブロス”を主なテーマに答えていただきましたヨ～！
※「タイバニブロス」は今回が最終回です。長い間応援ありがとうございました！

SUNRISE T&B MOVIE PARTNERS
企画・構成・取材・文 山本泰行

ブルーローズ/カリーナ・ライル 寿美菜子

—まずは、映画化決定！と聞いた時の様子を教えてください。

小声で、やったぁ～!! という感じでした。キャストサイドでも映画化の話が何となく出てたのもあったり、公の場で発表される前の段階で教えてもらっていたので、周りに気を遣いながら喜んだ記憶があります。

—では、劇場版で再び演じてみて、寿さんが改めて感じた『T&B』の面白いところは？

いろんな見方が出来る作品というのが素敵なポイントな気がします。各世代で感じることも違う作品だと思うので、それこそ面白いと思います。

—『T&B』への出演前後で、劇的に変わったことがあれば教えてください。…やはり、〝スカーイハーイ！〟などのセリフを日常的に使ってしまうのでしょうか？

役者さん達とご飯へ行くことが好きになりました。人見知りということもあったり、先輩達の多い現場なので、はじめは特に緊張していたのですが、ご飯に行って、芝居や作品や他愛もない話をすることによって、現場への関わり方や意識が変わった気がします。

ちなみに〝スカーイハーイ〟と日常的に使いすぎる危険はないですね（笑）。でも「ありがとう…」まで言うと、その続きを言いたくなります。それだけタイバニのキャラクターは一人一人濃くて、素敵なんです。

—では、スーパーアイドルでいてクール（ぶっている）ヒロイン・ブルーローズを演じてみて〝ヒーロー観〟に変化は？

ブルーローズに限らず、どのヒーローも共感出来る部分があって、親近感のあるところもヒーローには大事な要素なんだと思いました。だからみんな身近なところから、ヒーローになれるんだと学びました。

—ではブルーローズを改めて演じてみて1番好きな所、2番目に好きな所を。

一番好きなところは、氷を使う技を持っているのに、心はとっても熱いところが好きです。

二番目は年相応の素直になれないところが好きです。

共通して言えるのは、芯が強いところだと思います。ブルーローズは私より年下ではありますが、とても尊敬します。

—寿さんならではの劇場版の見どころは？

作品としては、時間が少し巻き戻ってのお話なので、みんなとの距離感が遠くて少し寂しく見えるかもしれませんが、それによって見えるみんなの一面や会話の面白さはたくさんあると思います。

—なるほどですね！ ちなみに寿さん、テレビブロスってご存知ですか？

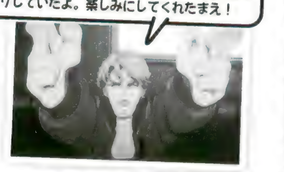
本屋さんで立ち読んだことが何度かあります。いろいろなマニアック且つコアな情報がたくさん載っている雑誌だなぁ～と思いながら読ませてもらっていました。特にタイバニの表紙は嬉しかったです。本屋さんで見つけた時に、ちょうど放送が始まって1ヵ月ちょっとだったので、タイバニに対するお客様の反応が表紙から伝わってきた気がしました。

—わ！ 嬉しい!! それでは、恒例のこの質問、猛烈な残暑をちょっぴりCOLDに凌ぐ方法を教えてください!!

ちょっぴりCOLDに過ごせる方法は…北海道に行くことです！ 先日ライブで北海道に行った時、本当に涼しくて驚きました。もし身近なところからなら、アイスを食べることをオススメします。体の中からちょっぴりCOLD！ ブルーローズのアイスとかがあったらいいですねぇ～。

—やはりアイスですね～「体の中からちょっぴりCOLD！ ブルーローズのアイス」は、ブロス編集部としても商品化を望みますっ!!

スカイハイ/キース・グッドマン 井上剛



—まず、映画化が決まったと聞いたときの第一声やその時の様子を…

最初に映画化の情報を知ったのが、昨年の「HERO AWARDS 2011」（11月）の時だったと思われてる方もいらっしゃるかもしれないですが、実は、それより少し前に伺っておりました。確か…「え、マジっすか!? 凄いっすね～！」って、何でちょっと他人事なの？って感じで言ったような気がします。

—劇場版で再び演じてみて、井上さんが改めて感じられた『T&B』の魅力とは？

もちろんヒーロー達の活躍を観ていても楽しめる作品なんですが、何よりクセのあるキャラクター達の日常や関係性が面白いですね。個性もバラバラで、「HERO TV」という番組上は競争相手になるんですが、随所で協力し合ったりと、ヒーロー8人で1つのチームなんだなぁ～と感じられるところがとても好きです。中でもスカイハイというヒーローが僕は一番好きですね！ 彼は面白いですよ！

—『T&B』に出演して劇的に変わったこと（口癖になっちゃったコトなど）はありますか？

プライベートで言えば、口癖に通じる部分もあるかも知れませんが、「ありがとう」を聞くと、〝そして…？〟ってつい思ってしまうことですね。一時期は買い物をするたびにもどかしかったです（笑）。言われたら言われたでビックリしますけど。仕事面で言えば、業界内の方々もタイバニに注目されていて、全然違う仕事現場で「タイバニ観てましたよ～面白いですね！」と言われることが多くて嬉しい限りです！

—では〝ヒーロー観〟に変化はありましたか？

二枚目だけど三枚目というヒーローは過去にもありましたが、そこに天然という要素が加えられたことで、僕の中でも斬新なヒーロー像として印象深く残りましたね。また、TVシリーズの最終話で虎徹が「いいだろう？ 一人ぐらいカッコ悪いヒーローがいたって」と言っていますが、タイバニが持つヒーロー観というのは、まさにこういうことなんだと思います。

—劇場版で改めて感じた、スカイハイの1番好きな所と、2番目に好きな所を

やはり天然なくしては語れないスカイハイですからね！ 真面目に変なことを言うところが素直に一番好きです。次に好きなところは、ストイックなところでしょうか。〝毎日毎日、朝のジョギングに始まり、トレーニング、夜のパトロールなど市民の安全のためにそこまで時間を費やせるなんてちょっと真似できないですね。そんな生活を思うと、シスへの恋の悩み（TVシリーズ#15）がいかに彼の中で重大事件だったのかがうかがえます。

—なるほどですね… ちなみに、今年の強烈な残暑を凌ぐ方法を教えてください！

ここに来てすごく普通の質問だったので、思わず質問文を二度見しましたが、僕は暑さには弱い方ですぐ汗だくになってしまうんですよ。なので、基本的に外に出なくていい時は、エアコン頼みでインドアで凌ぎます…ヒートアイランド現象にまんまとやられております。いや、地元の佐賀にいた頃はそれは外で遊ぶのが好きな少年だったんですよ？ 夏休みなんて宿題そっちのけで毎日出掛けては、セミを捕ったり、友達と川で遊んだりしたものですよ。懐かしいですね～って何の話ですかこれはぁ！

—ところで井上さん！ テレビブロスって雑誌ご存知ですか？

テレビブロスさんのことは存じております！ おりますが、じゃあ買ったことあるかい？って聞かれてしまうと、あるような～ないような～という感じになってしまいますので、本当に申し訳ないです！

—（とんでもないです！）

しかし、このようにタイバニを大胆に特集して頂けるということに関しましては、ありがとう！ そして、ありがとう!! といつもより二割増しのいい声でお伝えしたいです！

—二割増しのいい声、頂きました！ そして、ムチャぶりへのご返答もありがとうございます！

いや、ムチャぶりだったんですかーい！（笑）

折紙サイクロン/イワン・カレリン 岡本信彦

—まず、映画化決定！と聞いた時に思わず漏れた第一声を教えてください!!

「よっしゃー！ また見切れられるウウ！」…と思いました。好きなキャラクターをまた演じることができるのは、やっぱり嬉しいです。あと今回もバッチリ企業名に注目していただければ幸いです。

—注目します！ では、この劇場版で岡本さんが改めて感じた『T&B』の魅力は？

ヒーローというだけあって全員個性豊かなんですが、まずその個々のキャラクターが好きです。そして、その突出したバラバラの個性がタイガーおじさんによってどんどん集まる感覚がさらに好きだったりします。

—『T&B』へ出演前後で劇的な変化、たとえば見切れ癖が付いたりしなかったでしょうか？

タイバニ関連の仕事で写真をとる場合はなるべく見切れようとしています（笑）。やりすぎて世に出てない写真もあるんじゃないでしょうか。

—（笑）ちなみに岡本さんの〝ヒーロー観〟に変化はありましたか？

どうにもできない悩みや事件を解決して、みんなの笑顔をとり戻してくれるのがヒーローだと思っています。ですので、昔も今もヒーロー観は変わっていません。

—では折紙サイクロンを改めて演じてみて1番好きな所、2番目に好きな所を。

一番の魅力は成長じゃないでしょうか。劇場版のイワンは時間軸的にも初期のイワンなので、いつも1人でいるんです。

二番目に好きなのは目つきの悪さでしょうか。多分何も知らない人がイワンを見たらネガティブキャラクターだとは想像つかないと思います。まるで悪役ですよね。

—ですよねぇ… ちなみにテレビブロスってご存知ですか？

もちろん知ってます！ 記事ではたくさん見切れさせていただきました。これからもよろしくおねがいします！

—こちらこそです！ では最後に、岡本さんのとっておきの残暑の凌ぎ方を教えてください！

この前運動したら暑さが気持ちよくなりました。みんなでヒーローごっこをすればきっと夏場を健康的に乗り切れるはずです。でも、水分補給は忘れずにしてくださいね。

—わかります！ やっぱしヒーローごっこですよね！ ありがとうございました！

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』

2012.9.22 ROADSHOW

劇場公開まであと25日（8月29日現在）

●そして、現在テレビブロスでも総力取材を敢行中。次号は表紙&巻頭特集でお目見えです！ とっても頻繁に更新されるタイバニ作品情報は http://www.tigerandbunny.net/ とツイッター @TIGERandBUNNY でチェックだ！

DVD&BD 発売！

『TIGER & BUNNY SPECIAL EDITION』（全2巻）が発売決定!!

各巻90分の総集編で、#1～#13の「SIDE BUNNY」はバーナビー目線で、#14～#25の「SIDE TIGER」は虎徹目線でプレイバックするうえ、新作パート&新規ナレーションも収録！

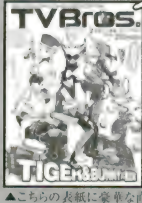
©SUNRISE/T&B PARTNERS, MBS

『TIGER & BUNNY SPECIAL EDITION』
○SIDE BUNNY　2012年12月21日発売
○SIDE TIGER　2013年1月29日発売
各巻
BD初回限定版 ¥6,300　通常版 ¥5,040
DVD初回限定版 ¥5,250　通常版 ¥3,990
発売・販売元:バンダイビジュアル

ヒーローサイン付き テレビブロス プレゼント・プロジェクト 最終回

済

ということで「見切り[illegible]」でスタートしたこちらのプロジェクトも[illegible]コンプリートで最終回です！ 桂正和[illegible]テレビブロスに、8人のヒーロー（[illegible]）サインが収められました!! この世界に1冊しかないヒーローサイン付きテレビブロス、公約通り読者プレゼントにいたします!! んがっ！ こちらの連載、あまりに大好評だったため、なんと次号で“劇場公開直前タイバニ特集”を決定！ その特集内で、プレゼント要項を発表いたします！ そしてしかも、桂正和さんや米たに監督のサインもワイルドにゲット！（←マジ）。



▲こちらの表紙に豪華な直筆サインが描かれました!!

キャストコメントはアンケート取材だったのですが、とにかくみなさん質問に突っ込んでくれたりして面白い！ ですからノーカット全掲載でお届けしました。

編集

どうも、テレビ雑誌の中でも、いまだ白黒ページで頑張ってるほう、テレビブロスです。そんな我々が、これまで応援してきた作品『TIGER & BUNNY』(以下、『タイバニ』)がついにいよいよ劇場版公開されるってことで今回は一世一代の総力特集！ し・か・も！ なななななんとテレビブロス的2大プロジェクト(以下参照)も敢行でっす！

企画・構成・取材・文　山本 泰行(ものかきや)

©SUNRISE/T&B MOVIE PARTNERS

▲白黒でわかりにくいが、各ヒーローのサインはそれぞれのイメージカラーで書かれているぞ！

1 5地区表紙刷り分けプロジェクト！

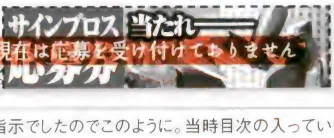
2 ヒーロー全員サイン&サイン付きTVBros.(桂正和書き下ろし表紙)プレゼント！

済

テレビブロス8/4号から[illegible]3回連続掲載の超ド短期連載「タイバニブロス」内で展開し[illegible]このプロジェクト。ヒーロー8人に加えて、桂正和氏、西[illegible]史氏、米たにヨシトモ氏のサインも加わったスーパーメモリアルな[illegible]冊を1名様にプレゼントしまっす！

ご希望の方はハガキに住所、氏名、[illegible]齢、電話番号に加えて、特集の感想、"サインブロスは決して販売・転売いたしません!"の一言を必ず添えて、さらに、以下の応募券もシッカリと貼って…　〒104-8415　東京ニュース通信社　テレビブロス編集部「タイバニ」係へ。　締め切りは9月28日(金)必着でっす

※なお、応募者がいない場合は担当編集者が全身全霊をかけて後世へ向けて完全保存いたします。タイバニに(テレビブロスにも！)愛のある応募をお待ちしています！ そして、お待ちしています!!



2012年10月13日号にて掲載　番外編

タイバニブロス Bros. T&B

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』WORLD PREMIERE 感涙リポート!!

取材・文／山本 泰行(ものかきや)

さる9/22に舞浜アンフィシアターで開催され、日本各地の劇場と、香港・台湾へのライブビューイングも展開。まさに"世界的"イベントとなった。

出演

平田広明、森田成一、寿 美菜子、楠 大典、伊瀬茉莉也、津田健次郎、井上 剛、岡本信彦
UNISON SQUARE GARDEN、NOVELS、Rihwa

劇場版の公開を含む3部構成、4時間に及ぶこの世界的イベントは、劇場版公開に加え、思い入れたっぷりのキャストトークに、『タイバニ』の世界観をそのまま凝縮したようなキャラソンライブ(本邦初公開)と、とにかく熱狂と感嘆と感動(劇場版は、個人差はあれど、泣けるんですよ！)であっという間に時間が過ぎてしまい、正直、取材メモを取り忘れることもしばしばだったよ失敬！

いや思うに、構成がしっかり練られた上で、制作陣の作品に対する愛情と理解力が深いからこそ、キャラクターとキャストの間にある境界線を"超えた"イベントになっていた。それ程に見る側としては没入して見れたし、タイバニイベントの醍醐味とも言える会場全体の一体感には感動さえ覚えた。……実はタイバニ放送開始前に取材した手応えでは"中年の男性ファンが痺れるようなヒーローアニメ"だと直感していたが、その予想に反して、とにかく女性人気の沸騰現象ばかりが目立つ。もちろんこの"現象"も凄いことだが、『The Beginning』を観ればわかるはずだ。中年男こそ惚れる男の物語になっていることが。サラリーマンの悲哀と、男の生き様を背負いながら、新しいヒーローの美学を見せる鏑木・T・虎徹の姿に大いに涙して欲しい。

(劇場版2もテレビブロスは全力で応援します)

▲『オリオンをなぞる』が流れると、舞台『TIGER & BUNNY THE LIVE』で話題沸騰となった手話ダンスで会場が一つになる一幕も

▲ワイルドタイガー、バーナビーのヒーロースーツも登場！ スカイハイは空を舞った！

劇場版の最新情報は
http://www.tigerandbunny.net/

デザイナー　劇場版公開時の巻頭特集です。"扉を破って欲しい"という指示でしたのでこのように。当時目次の入っていた部分はイベントレポートを再編集しました。

Pされる8人のヒーロー

歌って踊れるアイドルヒーローは女王様キャラで男性を中心に大人気。女子高生で学業やバイトも忙しい。水や氷を操る能力を持つ。タイタンインダストリー所属。

老若男女から幅広い人気を博し、ランキングトップに君臨するキング・オブ・ヒーロー。二枚目な風貌でいて天然キャラ。自由に風を操る能力を持つ。ポセイドンライン所属。

8人の中で唯一本名を名乗る新人ヒーロー。スーパークールな性格だが、実は正義や人気とは別の"思惑"を胸に秘めている一面も。コンビを組むことになったタイガーとは真逆の性格ゆえ、事あるごとに大ゲンカ。能力・所属ともタイガーと同じ。

自身が所属するヘリオスエナジーのオーナーでもあるおネェヒーロー。経営の苦労を知るためか、かなりの世話好きかつ男好き。自ら発した炎を操る能力を持つ。

ヒーローの英才教育を受けたカンフーヒーロー。自分のことを僕と呼ぶ"少女"。体から発した稲妻を操る能力を持つ。オデュッセウスコミュニケーション所属。

初心者の方も大丈夫

『TIGER & BUNNY』はこんな作品でっす！

舞台は「NEXT」と呼ばれる特殊能力者が存在する巨大都市「シュテルンビルト」。そこには、企業に所属し、スポンサーのロゴを背負って宣伝しながらも、犯罪から街を守る会社員のヒーローたちがいた。彼らの活躍はテレビ中継されショーアップされてはいるが、その活躍度でヒーローの進退に影響するというとてもシビアな一面をもつのがヒーロー業界なのだ。

そんなヒーローは性格も能力もバラエティーに富んだ8人。その中で、ピークの過ぎたおじさんヒーロー・ワイルドタイガーは人気の起爆剤にと、スーパールーキー、バーナビーとコンビを組むことに。ところが、気性が荒くて頑固なワイルドタイガーとスーパークールで生意気なバーナビーは衝突ばかりで、平和を守るどころかトラブルメーカーに…。

虎徹&バーナビーの迷コンビの成長と活躍を基軸に、それぞれのヒーローたちの葛藤や悩みも描ききったことで、登場キャラそれぞれに感情移入できる作りになっているのも魅力のひとつだ。

『タイバニ』をHEAT UPさせる基本情報

◎シュテルンビルト

物語の舞台となる巨大都市。さまざまな人種が集まり、ヒーロー以外の一般市民の中にもNEXT能力者が存在。そのため、特殊能力者が犯罪を起こすことも。

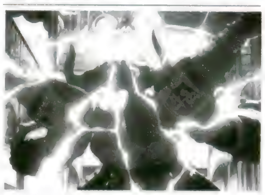
◎HERO TV

ヒーローたちの悪党退治を完全生中継で放送するテレビ番組。軽快な実況に、ド派手にショーアップした演出は、まるでスポーツ番組のようだが、街の平和に直結する番組ということもあって注目度はつねに絶大だ。"人気&企業の宣伝＞正義"という視聴率至上主義的な一面も。

◎キング・オブ・ヒーロー

ヒーローは活躍ばかりでなく人気も大命題。彼らは活躍によって加算されるポイントでランク付けされ、年間を通して人気No.1ヒーローには、キング・オブ・ヒーローの称号が与えられる。

◎NEXT



人並み外れた能力を操ることのできる能力者のこと。その能力はさまざま。自分でも気づかないうちに能力を発動させてしまう場合もあれば、能力を巧みに発動させて悪に手を染める者も…。

TVシリーズ放送時に『タイバニ』がHEAT UPしたワケ

2011年4月2日にテレビで放送スタートした『タイバニ』。放送を重ねるごとに人気、注目度がどんどんヒートアップし、最終回は社会現象になるほどの大ヒットを記録。果たしてそのワケはどこにあったのか？

実在の広告を背負うヒーロー像にヒートアップ

ヒーローキャラにプロダクトプレイスメントを大胆に導入。そうすることで"アニメは知らずとも、広告ロゴは知っている"という、視聴者に"親近感"を抱かせることになった。しかも、宣伝しつつ悪に立ち向かうという世界観が、視聴者目線と絶妙にリンク。異世界感と現代社会のリアルが共存するという、不思議な世界観の構築に成功。そこがまた大きな魅力になったといえる。

USTREAM&twitterなどSNSによる全国一斉(ほぼ)同時視聴でヒートアップ

地上波とUSTREAMのほぼ同時放送(史上初)を展開し、日本全国の視聴者がほぼリアルタイムで感動を共有するという視聴スタイルで、話題と評判が東奔西走。4カ月連続で#tigerbunnyがHOTワード1位を記録するなど、SNSでの人気も沸騰した。

TVシリーズ最終回はイベント展開！日本全国でヒートアップした！

昨年、TVシリーズ最終回放送タイミングで行われた最終回上映イベント『TIGER & BUNNY～ありがとう！そして、ありがとう!!』では、日本全国44館(85スクリーン)で開催され、約23000人を動員、USTREAM配信の総視聴者数は93000人以上を記録。10万人以上がほぼ同時に感動を味わった。

※そのイベントの様子はテレビブロス2011年10月1号「GOOD LUCK! TIGER & BUNNY」特集内でレポートを掲載した。

ここは僕の大好きなページです。四隅には『タイバニ』の"虎"と"兎"、初めての劇場版公開の"祝"、それに編集担当の"喜"をあしらっています。 編集

喜 HEAT UP!『TIGER & BUNNY』

9/22 ROADSHOW!

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』

松竹・ティジョイ系列にて公開

数量限定特典『マスコットでもワイルドに吠えるぜ!! メタリックver.』付き前売券が各映画館にて絶賛発売中! 9月21日まで!!

●公開初日(9/22)にはWORLD PREMIERE &ライブビューイングを開催するぜ!!

気になる内容は、こんな感じらしいぞ!
第1部:キャラクターソングライブ　**第2部**:「劇場版TIGER & BUNNY -The Beginning-」上映　**第3部**:キャストトーク&アーティストライブ(UNISON SQUARE GARDEN、NOVELS、Rihwa)　ヒーロースーツ(ワイルドタイガー、バーナビー・ブルックス Jr.、スカイハイ)も登場! ライブビューイングのみの独占映像あり! マジ!? スゲェ!
※ライブビューイングチケットは絶賛発売中!　詳しくはe+(イープラス)HPにてご確認ください

●そうだ、京都に行こう!!

9/23(日)には、京都の「MOVIX京都・Tジョイ京都」にて、舞台挨拶が決定!　平田広明、森田成一、尾崎雅之(サンライズ)が登壇!
※チケット販売に関する詳細は劇場HPにてご確認ください。

●あるぞ!　劇場カフェ!!

「TIGER & BUNNYカフェ」を以下の劇場で開催。オリジナルドリンクの購入で、オリジナルコースターがもらえるんだぜ!　※実施劇場:新宿バルト9、ユナイテッドシネマ豊洲、横浜ブルク13、T・ジョイ京都ほか

●公開記念特番だって放送するぜ!!

MBS系列で「芸能界タイバニ部　部長東野幸治」の放送が決定! 東野幸治、山里亮太(南海キャンディーズ)、中田敦彦(オリエンタルラジオ)、小島瑠璃子がタイバニトークに花を咲かせるようだぜ!
※放映日時・放映局などは公式HPにてご確認ください

「数量限定週替り入場者プレゼント　HEROカード(全10種)」は、劇場を訪れる週によってカードの中身が変わるぞ!　(特典は選べません。また無くなり次第終了となります　配布内容・スケジュールなど詳細はHPで!)

◀担当編集のお目当てはMr.レジェンドのカード

Blu-ray & DVD

『TIGER & BUNNY SPECIAL EDITION』(全2巻)
SIDE BUNNY　2012年12月21日発売
SIDE TIGER　2013年1月29日発売
バーナビー目線&虎徹目線で「タイバニ」をプレイバック。劇場版と合わせて見れば面白さ倍増だ!
各巻 BD初回限定版 ¥6,300　通常版 ¥5,040
DVD初回限定版 ¥5,250　通常版 ¥3,990

『TIGER & BUNNY THE LIVE』
2012年11月22日発売
声優である平田広明、森田成一が虎徹、バーナビー役を熱演! さらに、「宇宙刑事ギャバン」の大葉健二らが出演した舞台版「TIGER & BUNNY THE LIVE」をDVD化! プレオーダーに30万件の応募が殺到した話題の舞台だ!　(「ZEPP DiverCity TOKYO」(8/24〜9/1)にて公演)
BD版 ¥8,190　DVD版 ¥7,140

発売・販売元 バンダイビジュアル　©SUNRISE/T&B PARTNERS, MBS

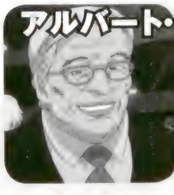
要注意人物はコイツらだ　クセモノキャラたち

マリオ
「HERO TV」の実況アナウンサー。「あぁ〜っとぉ!!」と臨場感たっぷりに実況。犯人を捕まえるようすをみごとエンターテインメントへと昇華させてしまう影の主役だ。

アニエス・ジュベール
「HERO TV」の敏腕プロデューサー。視聴率至上主義を貫き、たとえヒーローに危険が及ぼうとも無茶な指示を出しては派手な見せ場を演出する強引&勝気な性格。

Mr.レジェンド
ぽってりお腹の中年体型だが、虎徹が子供時代に憧れた初代スーパーヒーロー。引退後の動向は不明だが、数々の功績を残し相当な人気を博した伝説的存在。

ユーリ・ペトロフ
司法局に務めるヒーロー管理官兼裁判官。司法手続きという側面からヒーローを補佐する。その反面で、"個人的な正義"を貫こうとする一面も…。



アルバート・マーベリック
シュテルンビルトの企業をまとめあげるメディア王で「HERO TV」の仕掛け人。温和で面倒見のいい人格者でヒーローたちのよき理解者であるが…。

SHOW U

ロックバイソン
／アントニオ・ロペス

強力なパワーが自慢の古株ヒーロー。人気は下降気味でタイガーと下位を争う。ただ、同世代の虎徹とは飲み仲間であり古い親友。能力は強靭で硬い皮膚。クロノスフーズ所属。

ワイルドタイガー
／鏑木・T・虎徹

人気の旬も実力的なピークも過ぎたベテランヒーロー。不器用ながら、正義に燃える熱血漢。亡き妻とのあいだに一人娘がいる。能力は5分だけ身体能力が100倍になるハンドレッドパワー。アポロンメディア所属。

折紙サイクロン
／イワン・カレリン

テレビの中継画面に見切れることで、スポンサーのアピールに全精力を注ぐ忍者ヒーロー。内向的な性格ながらその風貌は派手。ヘリペリデスファイナンス所属。

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』がさらにHEAT UPするワケ

ヒーローたる魅せ場(変身シーン)

王道ヒーローアニメでありながら、TVシリーズにおいて描かれていなかった重要なファクター「ヒーローたちの変身シーン」を、劇場版では完全に活写。変身シーンに隠されていた意外性にあふれた驚きのギミックは大きな魅せ場の一つだ。

躍動する新キャラ、ロビン・バクスター

劇場版でひとつの魅せ場を背負うのが、このロビンだ。ナメた感じでヘラヘラしているが、ある特殊能力を使うNEXT。そのスタイルと能力によって、最大の魅せ場となる、立体構造のド派手な遊園地を舞台に、タイバニ史上最速のハイスピードアクションが展開!　8人のヒーロー、そしてMr.レジェンドまで巻き込んだ前代未聞の事件の顛末とは!?

劇場でも楽しい"仕掛け"が待っている

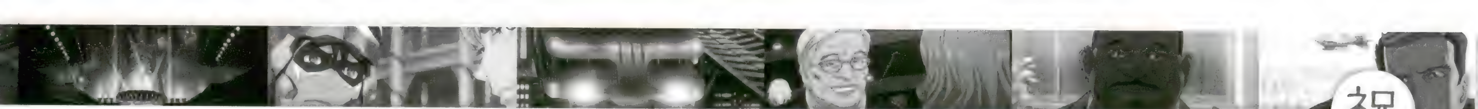
本編ラストには「WEEKLY HERO COUNT DOWN」の結果を発表! これはファン投票で選ばれた「KING OF MOVIE HERO」上位5人を本編ラストに週替わりでスペシャル映像として流すというもの。本編ラストにお楽しみ(しかも週替わり!)あり、というタイバニらしい贅沢な仕掛けだ。

▲担当編集の予想では、1位は折紙サイクロン

次ページからのSPインタビューでさらにHEAT UP

兎

デザイナー　作品の勢いを出すために奥行感のあるレイアウトデザインを心がけたページです。ヒートアップしていた(山)に乗せられてお祭り感覚で作ったように思います。



ヨシトモ INTERVIEW!

創刊25周年記念号、そして超ド短期連載にも登場いただいた、米たにヨシトモ監督。今回はいよいよ劇場版公開直前ということで、改めて独占インタビューを敢行！ 作品について、ヒーローについて、そしてカレーについて…とアレもコレも深く深く切り込んで聞いてきました！

撮影（米たに監督）、インタビュー・文（P6〜P9） 山本 泰行（ものかきや）

——弊誌の連載企画「タイバニブロス」に引き続き、今日もよろしくお願いします！ もしかして、今日もカレーを…？

「はい、食べてきました」

——（笑）流石です。では早速ですが、劇場版公開直前ということで、まずは今の手応えを！

「手応えは凄くあります。まず、とにかく細部まで丁寧に作り込んでいるという部分。〝ここは見せたほうがいいだろう〟という部分は、たとえどれだけ細かいパーツも、モブ（端役）も〝ここまで凝っているのか〟というくらい表現しているので、驚いてもらえるんじゃないか、と思っています。それに、すべてのカットではないですが、テレビシリーズよりも絵を大きく描いてるんです。ディテールアップで上映するので、劇場版ではかなり密度の濃い表現になりますよ」

——ちなみに、どれくらい大きなサイズで描いているのですか？

「テレビシリーズの時よりも4倍くらいの大きさで描いてます。そのために動画を入れるカット袋も大きくなってしまって…とにかく重いんです、筋肉痛になるほど（笑）。でも、それだけ1カットの重みも大きいと感じています」

——筋肉痛とは！ タイバニはUSTREAMで視聴しているファンも多いから、見た目の印象が凄く変わるでしょうね。

「スクリーンで観ると〝別作品か！〟っていうくらいギャップがあると思いますよ。音楽も劇場用に5・1チャンネルで録り直していますし、映画館で見ていただけたら、五感で受ける迫力が全く違うものになっていると思います」

改めて見つけ（てしまっ）たタイバニキャラの新発見!?

——それだけ細かく作業をされていたら、劇場版で初めて気づいた新発見もあったのでは？

「ありました、本当にたくさんありました！〝実はこうだったのか！〟という設定が山ほど出てきて。例えば、ワイルドタイガーの旧スーツでは、ワイヤーを手から勢いよく発射させるんですが、テレビシリーズでは、その発射構造が描かれていなかったんですね。ところが、大量に発掘された設定資料をじっくりと読み込んでいくと、その発射方法が細かく描かれていた。ほかにも企画段階の頃から、いろんなスタッフが細かい設定や機能、パーツに至るまでを事細かに描き残していて、でも長い年月の中で、描いた本人も忘れていることさえあって…。劇場版では、そういった部分もさりげなく追求して表現していますよ」

▼これがワイルドタイガーの旧スーツだ

——それは細かいですねっ！ 具体的には、どのヒーローのどのような部分を？

「ヒーローはみんな手首の所にPDAを装着しているんですが、虎徹だけは〝ある理由〟からみんなと逆の手に付けているんですね。ほかにも、ドラゴンキッドのヒーロー時の後ろ髪の結い方とか、ブルーローズが持っている銃の中に入っている液体の正体とか…」

——な、何が入っているのですか？

「実は…ただの水なんです」

——それが彼女のNEXT能力でもって、とってもCOLDな液体に？

「そうそう、しかも、カートリッジ式で圧縮された水を発射するんです。今まで活かされなかったそのあたりの表現も出てきますよ」

——カッコイイ！ それは商品化して欲しいっ！ 武器といえば、僕はロックバイソンのドリルが大好きなんです（真顔）。

「あのドリルも、なぜ横向きについているか、なんですよね。攻撃として使うためのものなら、どう考えても前向きについているハズなんです」

——っ!! 確かに…。

「なぜ横に付いているか、知りたくありませんか？」

——めっちゃ知りたいです!!!

「フフフ…それは、劇場版で明らかになっています。ほかに機能的なことで言うと、スカイハイの新事実も劇場版で判明します」

——えええ!?

「これは、桂（正和）先生から、劇場版を製作するうえで〝空を飛ぶときはココの部分指摘いただいた部分で、そこも劇場版で初めてお目見えするさりげない設定になります」

——おぉ。興奮しますね！

「なにげに難しかったのがファイヤーエンブレムですね。実は、立体構造になっている胸の模様の処理や、マントの自然な流れにも気を遣いました。ファイヤーエンブレムはCGで描画されたキャラなので、筋肉のつき方やクビレなどとても繊細な作業になりました。劇場版では、その辺りもかなり面白く表現しているので、注目して欲しいところですね」

——テレビブロスで放送当初より注目している折紙サイクロンの見所は？

「…見切れているのは体だけではなかった、ということが判明します（笑）。さりげなくエッセンスとしてではありますが…」

——監督のコメントも見切れ気味なのが流石です。ちなみに、タイバニブロス（8／18号）では、ユーリの話題で監督と盛り上がりましたが、今改めて気になるキャラは？

「……ロイズです」

——ロ、ロイズ…アレキサンダー・ロイズ!?（※）

「はい。理由の一つに、彼は虎徹と絡むシーンが多いので、必然的に作り直すカットも増えてしまったんですね。そんな作業を重ねていく中で、彼への感情移入が深くなっていきました」

——な、なるほど

▲彼がロイズだ。確かにイケメンの面影も…

「彼は左手の薬指に指輪をしているんですよ。きっと彼はかつてはかなりのイケメンで、ラブロマンスがあった。そして彼はなぜ今このポジションにいるのか？ しかも、シュテルンビルトであの職業に就くというのはかなり優秀な男だと思うんです。今ロイズの話を描きたいくらい、私の中でブームが来ています」

——確かに、興味が尽きないですね。今後ロイズのスピンオフ・ストーリーにも注目しておきたいと思います（個人的に）。

タイバニ音楽にも欠かせなかったカレーのスパイスの効果!?

——劇場版ということで、我々は音楽にも注目しています。ご担当はテレビシリーズと同じ池頼広さんですよね

「はい。それはもう何度も何度も池さんの所へ通い詰めて…」

——やはりカレーを食べては池さんの所へ？

「ええ、池さんの所へ行ってはカレーを食べ…、あ、池さんと一緒にカレーも食べました」

——カレーで打ち合わせ!?

「はい。〝やっぱこのカレーにはナンだよね〟って意気投合もしたりなんかして…」

——さてはインドカレーですね。米たに監督はチャイも飲むんですか？

「はい…チャイは田村Pも好きですね」

——田村一彦プロデューサー（※）もその場に？

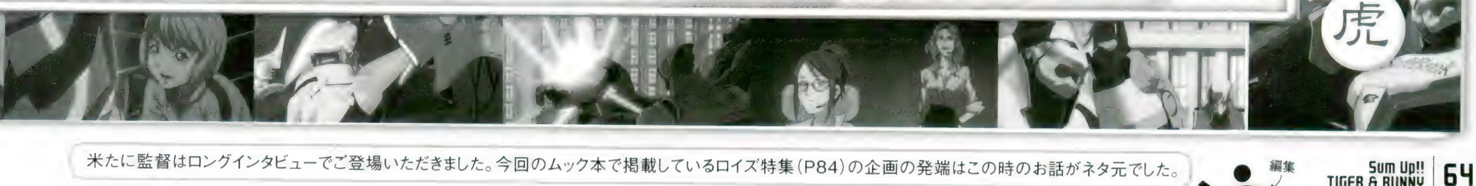
「タイバニでは田村Pがとても重要な役回りを担っているんです。隅から隅までこれだけ能力に長けたスタッフが揃っていて、しかも私のようなクセのある男が監督をして（笑）、それぞれから出てくる違う意見や主張をちゃんと話し合ってまとめあげていく為に、田村Pが労を惜しまず駆けずり回ってくれて、本当に感謝しています。きっとこのテレビブロスが発売される日も徹夜で頑張っていると思います」

——まさに田村Pは作品を陰で支えるヒーロー的存在ですね…。あ！ 米たに監督、劇場音楽に関してのお話に戻りますが…。

「池さんに対しては、〝満足した〟というよりも、満足させられたって感じです。池さんは、テレビシリーズの時もそうだったんですが、冒頭からラストまで、ピッタリと尺にハマるように、作曲された楽曲を編集してくれるんですが、それを劇場版でも丁寧にこなしてくれました。まず最初に、私から相当な分厚さのオーダー表をお渡しして、楽曲の制作に入っていただいたんですが、楽器収録前に作るシンセサイザーによる曲を聴いたときの印象は〝おおっ！ こうきたか!!〟と驚きが大きかったですね」

——いきなりかなりの完成度だったワケですね。

「オーダーを超えるものがあったんです。ただ、私としては映像表現上のこだわりがあったので、更に細かくオーダーをさせていただいたんです。その時は、池さんも〝そうは言っても難しいよ？〟というような ↖



喜

HEAT UP!『TIGER & BUNNY』

素振りだったんですけれど、いざオーケストラの収録になったら、私のオーダーも盛り込んでしっかり調整が成されていた。しかも楽曲の魅力がさらに増幅されていて、その完成度と迫力には改めて驚かされましたね」

——監督のオーダーを取り入れながらも池さんの主張もきっちり表現されていた、と

「そうそう。あの打ち合わせの時は、私の話を半分は聞いていないようすだったのに、実はしっかり憶えてくれていたんだ（笑）と感動しました。劇場版は、テレビシリーズでは使われなかったタイプの、意外性にあふれた新曲が登場します。これは映像にスゴくフィットしていて、ある意味、音楽のおかげで〝劇場版とはこういう作品だ〟という主張がより明確に見えた名曲だと思ってます」

——監督の表情から、もの凄い満足感が窺えます

「（ニヤリ）スゲー満足です」

——ところで、池さんとカレーを食べながら話したことが気になります

「ナンとライスを食べ比べ、映像音楽としてのバランスと配分とその在り方を大いに語り合いました。その時、池さんは納得したり渋ったりでしたが、カレーのスパイスのおかげで、脳髄にズドーンと響く刺激的な方向性が見えたんじゃないかな？〟作曲家がこのナンのように仕事をしても、手柄はカレーみたいに監督が持ってっちゃうんだよな〜〟とか楽しそうにボヤきながら（笑）」

——ナンてステキなエピソード！

「楽曲が完成した日は、池さんと2人で…あ、田村Pもいましたが、池さんのご自宅でシャンパンを出していただいて乾杯したんですよ。そのシャンパンは世界一の味で…人生で一番美味しいお酒でした」

タイバニを手がけたことで見えてきたヒーローアニメの向う側

——最近は、ヒーローものがフォーカスされることも増えてきたと思います。米たに監督は現代のヒーローものとタイバニに対してどのように感じられていますか？

「このタイバニという作品が、ヒーローものの新しい可能性であることは間違いないと思います。もちろん、〝全く新しいヒーローアニメ〟という漠然とした可能性は、はるか昔から存在していたのだと思いますが、えてして従来の価値観とは相反する設定やテーマの作品というのは、様々なしがらみもあって表現しきれないものなんです。例えば、〝王道ヒーローものでありながら、おじさんが主人公で、しかも必ず敵にバトルで勝てない〟というのは、歌舞伎でいうところの〝よッ！ 待ってました〟や十八番の部分を捨ててしまうようなもの。でも、敵に勝てる若い相棒がいることで、新しいヒーローもののスタイルが出来上がった。タイバニは〝王道のヒーローもの〟の奥にあった深い可能性を改めて発掘し直した、アニメとしての歴史が切り替わった、まさにその〝瞬間的〟な作品でもあるんです」

——敵に勝てないばかりか、負け方が見事ですよね、虎徹は。

「ただ、そのやられ方が絵になるんですよ、虎徹は。だからこそ、彼の〝やられの美学〟は徹底的に追求して描いています」

——実は王道のヒーローものから逸脱している設定も多いのですね。

「おそらく、これまでのヒーローものを見てきた方にとっては、脳内のどこかで〝ヒーローとはこういう存在だ！〟という概念が強烈にあると思うんです。だからこそ新機軸であるヒーローの裏側の部分、つまりサラリーマンであるという設定、やられた後に相棒に花を持たせる主人公の姿を受け入れて楽しんでもらえたんだと思います。ただ〝新しい〟だけでは〝可能性〟のまま終わったと思うんですね。これまでのヒーローものの長い歴史が培ってきたものがあったからこそ、たどり着いた境地…。それがタイバニの世界観なんじゃないか、と今改めて実感しています」

——なるほど、なるほど。

「それと、このタイバニって作品は、限界を限界だと思わない人たちが作ったことで、限界を突破してしまった作品でもあるんです。先のロンドン五輪では、なでしこジャパンが体格では勝る相手に対して、知恵を絞って緻密に練られた作戦と、そして何よりチームプレイで戦い抜いたと思うのですが、私たちも、まさにそうだと思います。アニメという競技場で、力技だけでは成しえなかった領域を目指した。実写系の脚本家に漫画家のデザイン、こだわりまくる作画監督や美術監督、CGワークに色彩設計、このチームだからこそ、みんなでたどり着けたのだと思っています」

——そんな米たに監督にとって、タイバニとはどんな作品として刻まれましたか？

「タイバニは、ヒーローものの定義や限界を決めつけてかからない人たちが混ざり合って作ったことで、限界を突破してしまった作品。この〝限界を超える〟という感覚は、生きていく上でもとても大事だと思いました。私自身もこれまでは、自分の考えの枠組みのようなものが、ぼんやりと出来てしまっていたのですが、タイバニはそれをぶち破ってくれた。人って、自分の〝限界〟を勝手に作ってしまっている部分があると思うのですが、限界だと思った時点で既に可能性を否定しているんですね。限界は超えることができるんだってことに、改めて気づかせてくれた作品になりました。そのおかげでアニメという分野の中では金字塔を打ち立てた。劇場版もその手応えと実感は凄くあります」

——ディテールにこだわり抜いて、かつ新しいスタイルを確立させた『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』で魅せる「米たに演出」を心から楽しみにしています！

加速するタイバニへの思い——
監督 米たに HEAT UP

PROFILE

よねたに・よしとも●'63年5月12日生まれ。'89年「笑ゥせぇるすまん」でアニメ監督デビュー。『勇者王ガオガイガー』（'97年）、『Dororonえん魔くん メ〜ラめら』（'11年）、劇場版『ドラえもんズ』シリーズなど数々のアニメ作品を手がける。弊誌連載によって、カレーに加えて甘いもの好き、アイス好きであることも判明。

加速ポイントは遊園地シーン

階層ブチ抜きゆえに、スケール感のある遊園地になっています。横への広がり的な空間だけでなく、縦方向…高低差のある派手な遊園地になっているんですが、そんな立体構造の面白さも、余すところなく物語の中に活かしています。遊園地ってジェットコースターが見えてくると無条件に盛り上がるじゃないですか？ この作品でもきっとその辺りが鍵になると思います。それはもうとてつもない加速ポイントだと思いますよ（ニヤリ）

ヒーローたちのアドリブ合戦

アドリブはみなさんガンガン入れてきます。それでも10のうち採用するのは1くらい。ただ、それぞれがキャラの魅力をふくらませてくれるとても重要で大切な〝1〟になっています。そんな中で苦労したのはファイヤーエンブレムですね。彼はCGで描画しているので、アドリブに合わせて口元のCGを作り直さないといけないですから、（役の）津田健次郎さんのアドリブが加速する（暴れる）と、スゲー楽しいけど戦々恐々でした（笑）。一方で、役柄上、アドリブの余地がなかったのがバーナビー特にクールな芝居で、森田成一さんは相当苦労したと思います。そんな中、必要なアドリブを高い次元で入れてくる平田広明さんには何度も感服させられました

※田村一彦P
『TIGER & BUNNY』を手がけるサンライズプロデューサー。昨年のテレビブロス（2011年10月1日号）の特集「GOOD LUCK！『TIGER & BUNNY』」では、バンダイビジュアル松井千夏Pとの対談で登場いただいた

※アレキサンダー・ロイズ
劇中に登場する虎徹の上司。〝ヒーロー＝サラリーマン〟を象徴するちょいとイヤミなキャラだ

兎

編集 この時のインタビュー時間はおよそ2時間！ このムック本のインタビューもそうですが、僕の煩雑な質問にもいつも丁寧に答えていただきました。

加速する『タイバニ』ストーリー――

脚本・ストーリーディレクター

西田征史

HEAT UP interview!

撮影　蓮尾美智子

――西田さんにとって初のアニメ脚本となった『タイバニ』ですが、まずは手応えを聞かせてください。

「やりたいことは全部出来たと思います。僕はもともと舞台の作・演出家なのですが、いつも出演する役者さんには必ず見せ場を作りたいと思っているんです。作品は違えど『タイバニ』でもその意識は変わりませんでしたから、登場するすべてのヒーローに輝くような見せ場が作れたんじゃないかな、と感じています」

――西田さんの秘蔵キャラだった斎藤さんもファンの間で注目が集まりました。

「喜んでもらえていたら幸いです(笑)」

――役者の芝居とアニメの動き、大きな違いもあったと思うのですが。

「お芝居をやっていると、ほんの些細なリアクションにその人のキャラクターが出ると思っているんですが、『タイバニ』は最初に僕がイメージして描いたリズムや世界観が、そのまま絵として表現されていたので、凄く驚きました。キャラの動きはアニメーターさんが本当にこだわってらっしゃって、些細な動きだけで特徴が出せる事が凄いと感じたし、だからこそ実写と同じ感覚で書くことができたんだと思います。特に戦闘シーンは、会話や傷つき方、やられ方などは書くんですが、弾の色や具体的な動きなど絵で表現する部分が毎回格好良くて。不思議だったのは〝こんな動きで〟と細かくすり合わせをしたワケじゃないのに、アニメーターさんがイメージ通り表現してくださる…意思の疎通が出来ていたこと。僕も放送が毎回楽しみでした」

――ドラマ作品との違いを意識した部分は？

「スピード感です。1時間の連ドラよりも1話の尺が約26分と短い分、スピード感を増しているんです。1時間の内容と同じくらいの満足感を感じていただきたかったし、お話の凝縮感はすごくこだわりました」

――1話26分を駆け抜ける感じですね。

「そうですね。テレビシリーズは毎話全速力で駆け抜けた感じでした」

――しかも、視聴者も一緒になって加速できたと思います。

「そこが一番ですね。みんなで一緒に盛り上がる楽しさ…お祭りのように盛り上げていただいたなと思います。USTREAMは僕も同時に視聴していたのですが、一緒に盛り上がる感じは体感できました。『タイバニ』は僕たちが勝手にやっていることに対して、視聴者の方にツッコんでもらうというスタンス。そこは今も一貫しているんですが、そのツッコミがダイレクトに入るという刺激も大きかったですね」

――では、映画化決定と聞いた時の印象は？

「実は劇場版の発表前から〝映画やるかも〟と噂にはなっていたんです。ただ、実際に〝やりましょう〟となったときに、僕としては25話ですべて終わらせたつもりでしたので、かなり悩みました。まず1作目は時間的に総集編になるとの話だったので、総集編を作るにしても、例えばモブとして毎話に出て来ていた〝逃げ惑う少女〟目線で話を振り返るなど、違う視点のストーリーラインはどうかと提案したりして。ただ、やはりファンの方はもちろん、初めて見る方にも楽しんでもらえることが一番でしたので、どこの時間軸を切り取って描くのがいいか考え抜いた結果、〝ここに…〟」

――つまり、冒頭シーンをリファインすることになったわけですね。

「物語の冒頭ならば、初めて見る方も世界観に入っていただけますし、テレビシリーズで描いていない裏設定を〝遊び〟として入れることで、ファンの方にも発見があると思ったので、1話～2話の時間配分がベストだと思いました。ただ、難しかったのは、映画だからといってもシュテルンビルトを壊滅させるような巨大な敵が出てきたら、3話からの展開が別物になってしまう恐れがあるんです。つまり、そんなに強大な敵を倒した後に虎徹とバーナビーが、あの距離感でいるだろうか、と。これは、大きな問題でした。ですから、あくまでも『タイバニ』の世界観と印象はそのままにしつつ、でも1・2話の印象だけがちょっと変わる、ということを狙って」

――では西田さん的な映画の見せ場はどこでしょう？

「やっぱり虎徹とバーナビーの距離感です。2人の出発点の中の一つの区切りとなっていますので、そこを見て欲しいですし、テレビシリーズとはまたほんの少しだけ2人の距離感が変わる感じも楽しんでいただけたらと思います」

――特に映画を意識した部分はあるのですか？

「セリフですかね。本来、テレビと映画の差を意識する部分というのは、セリフの説明量だと思っているんです。映画はその場で、じっくりと観ていただけるという感覚だから、説明を省いてもその前後の展開で感じとってもらえる間がある。ところがテレビは、チャンネルを変えたり〝ながら〟で作業ができるメディアなので、セリフで説明するように意識しています。ただ…『タイバニ』は会話劇と思っているので、他の映画を書く時よりはあまり意識しなかったかもしれないですけど」

――会話劇もまた『タイバニ』らしさですものね。そんな中で、今回は脚本・ストーリーディレクターとして参加されていますが。

「実はテレビの時から、サンライズさんが僕のセリフのニュアンスを尊重してくださって、毎回アフレコ現場に行って、舞台演出をしているときと同じような感覚でセリフのニュアンスを役者さんに伝えていたんです。劇場版からは、その作業に肩書きをつけましょうと言っていただいて。ただ、アニメの現場で新鮮だったのは、僕が直接役者さんに伝えるのではなく、音響監督さんから役者さんに伝えて頂くところ。役者さんに直接言うには恥ずかしい指示なんかを、音響監督さんに言わせてみたり(笑)。そんな指示を音響監督さんが言わない時もあるので、〝そこだけはなんとかお伝えしてください!!〟とお願いしたり(笑)。僕にとってこれまでにない新しい発見でした」

――(笑)、では最後に西田さんにとって『タイバニ』はどのような作品として刻まれましたか？

「これまでアニメの脚本を書くという意識を持ったことがなかったので、最初にこのお話をいただいたときは、悩みもしたのですが、本当にやれてよかったと思っています。アニメの可能性の広がりってものすごくあって、アニメだからこそ表現できる事はたくさんありますし、アニメだからこそ描けることもある。それにアニメは世界に向けても発信されますし、そういった無限の広がりを実感することができた作品なので、出会えて本当に良かったと感じています」

PROFILE

にしだ・まさふみ●脚本家・演出家・小説家として、ドラマ『ママさんバレーでつかまえて』(作・演出)、ドラマ&映画『怪物くん』(脚本)、ドラマ『妖怪人間ベム』(脚本)、映画『ガチ☆ボーイ』(脚本・出演)、映画『アフロ田中』(脚本)、NHK教育番組『シャキーン』(構成)、など幅広く活躍。映画『妖怪人間ベム』(12/15公開)の脚本も担当。オリジナル小説『小野寺の弟・小野寺の姉』が発売中。

最後まで文字量の多い特集なので読者の皆さんにはどう伝わっていたのか、いささか不安もありますが、いざ読んでみると面白いインタビューなんですよね。
デザイナー

HEAT UP!『TiGER & BUNNY』

加速するヒーローたち、その誕生秘話——

キャラクター原案・ヒーローデザイン 桂 正和

HEAT UP INTERVIEW!

撮影　丸山修一

PROFILE
かつら・まさかず●1962年12月10日生まれ。'83年、週刊少年ジャンプ(集英社)に「ウイングマン」で連載デビュー。『電影少女』『I"s』などヒット作を続々と発表する。現在、週刊ヤングジャンプで『ZETMAN』を連載中。

——企画段階からキャラクター原案、ヒーローデザインとして参加されていたわけですが、まずは今改めて手応えをお伺いしたいのですが

「そうですねぇ…すごく不思議な感覚、というのが正直な気持ちでしょうか。ストーリーを作る流れの中で、ヒーローたちのデザインをしていたら、またちょっと違った印象があったかもしれないんですが、ヒーローデザインを始めた企画段階では、まだ具体的な内容が固まっていなかったので、物語の中で息づくキャラ、というよりはおもちゃ…製品のデザインをした、という印象がどうしても強いんです」

——デザインする段階ではまだキャラ設定も確立していなかったのですか？

「サラリーマンのヒーローである、という設定は決まっていて、その中で〝熱血漢〟だったり〝クール〟だったり、というようなイメージはありましたが、具体的なストーリーがまだ決まっていなかったので、ほとんどゼロの状態からデザインをしたんです」

——では、デザイン当初に桂さんが抱いていたイメージと、実際の放送では印象の違う部分も？

「それは多分にありますね（笑）。最初に企画を聞いたときは〝タイムカードを押して出社する会社員（＝ヒーロー）〟というのを、思い浮かべてましたから。デスクを並べてヒーローたちが事務仕事をして、事件が起こったら、その事件の犯人逮捕までの様子がテレビで実況中継され、終わるとまた事務仕事に戻るという。例えば、ヒーローたちがトレーニングルームでワイワイと集まるような、西田（征史）さんの描く明るいテイストは、僕が聞いていた段階では全く無かったですから」

——桂さんの最初の印象としてはサラリーマン色が強かったのですね

「そうです。企画段階でコメディーとは聞いていましたが、僕の中では勝手にブラックなコメディーをイメージしてました。全員がスーツを着て、会社同士のライバル関係の中で揉まれるという部分がもっと色濃く描かれるような。ですから、僕が一人デザインしながら妄想していた物とは違った作品になってましたね」

——ブラックユーモアの効いた虎徹とバーナビーも見てみたいですね～。では、キャラについてのお話を。桂さんの予想以上に加速して活躍したヒーローを教えてください

「スカイハイでしょうね。西田さんのキャラ付けが非常に面白いと思いますよ。外見とセリフと性格、それぞれにギャップがあるのに、キャラとして成立しているというのが可笑しいですね」

——しかも、ヒーローとしての格好良さも全うしたキャラですね。〝面白い〟といえば、折紙サイクロンはテレビブロス的に外せない名キャラなのですが

「コイツはね、忍者なのに派手に傾（かぶ）くという、日本を間違って認識してしまったキャラとしてデザインしたんです。だから、脚本になったときは、面白い扱い方をしているなぁと思ったんですよ。『TIGER & BUNNY』の世界観にマッチしているんじゃないですかね」

——〝見切れる〟という特技はデザインにも盛り込まれたのですか？

「いや、〝見切れる〟というのはデザインをする前に聞いていたんですが、その時は〝見切れる〟という意味が一瞬把握できなかった（笑）。ただただ〝見切れるのか…〟と面白がってデザインしたキャラです」

——では最も『タイバニ』の世界観にマッチしたと思うヒーローは？

「最もかどうかは解らないですけどファイヤーエンブレムですね。彼は、フェニックスのモチーフで火を操るというイメージの中で、どうやってデザインをしようかと考えたときに、8人＋αのバリエーションの中で最終的にアメコミ風に割り当てたんです。デザインラインとしては、もしかしたら、スカイハイのようなデザインになった可能性もあったんですが…」

——まさかのおネェキャラですものね

「実は後から聞いたんですよ、おネェキャラって。まあ、『タイバニ』の仕事はそういうの多かったです（笑）」

——!!!　マッチョのラインが美しいデザインはおネェキャラとマッチしてますが…？

「オカマとか気にせずに、バリエーションの割り振りの中でピッタリスーツになったのだけど、図らずもキャラとデザインがフィットしてますね（笑）」

——（笑）。では、もっと活躍して欲しかったヒーローというのは？

「あくまでも〝アクションヒーロー的な活躍〟という意味ではワイルドタイガーです。もちろん作品としては非常に魅力的なキャラクターになったと思うんですけど…このスーツを着てあまりアクションしていないからなぁ（笑）。〝いわゆるヒーロー番組〟の主役のつもりでデザインしたので、ここまで三枚目に振り切れる役だとは思ってなかったんですよ。ただ、これは作品とまったく離れたところでの感想で、もうちょっとヒーローとしてのかっこいいアクションで見せ場があったら嬉しかったですね（笑）」

——ワイルドタイガーと言えばガニ股走りのイメージさえありますが、デザインはとてもクールで精悍ですよね

「彼は、メイド・イン・ジャパンの匂いがしっかりとするように心がけてデザインしたんです。それと、ヒーロー的なことで言えば、バーナビーが大活躍なのは嬉しいですね。彼はワイルドタイガーができたからこそ、その対抗として完成できたキャラなのですが、非常にバランスのいいコンビになったと思います」

——熱血キャラのワイルドタイガーが緑で、スーパークールなバーナビーが赤という、一般的なイメージとは逆の色使いですよね

「ああ確かに（笑）。でも、僕が依頼を受けた時点で虎徹は〝中年・パンチが得意〟くらいしか決まってなかったし、実は2体とも黒っぽいデザインにして欲しい、というオーダーだったんですが、僕は黒にしたくなくて。若いバーナビーを赤にして、僕が主人公ととらえていた虎徹をあえてサブっぽいカラーにしたいなと考えて、デザインしたんです」

——そうだったのですね。でも、キャラと色が逆でも違和感がまるでないですね

「これは企画段階でコンセプトがまだ漠然としてたからこそ出来上がったデザインで、違和感がないのは偶然の産物でしょうね。もし細かい設定やストーリーが決まった上でデザインをしていたら、ワイルドタイガーもバーナビーも今のデザインにはなっていなかったと思います」

——図らずも常識を超えたデザインに…ストーリーのない段階で生み出されたデザインから、物語にフィードバックされている楽しさも感じます。最後に、桂さんにとって『タイバニ』とは？

「僕はキャラクターのデザインしかしていなくて、ストーリーがどうなるか、というのを考えなかったので、よくわからない部分もあるのですが、確かにそういう一面もあるかもしれないですね。逆に西田さんからすると、僕のキャラクターデザインを見て、そのキャラのドラマを膨らませながら面白がってストーリーを作ってくれたりしたら嬉しいですけどね（笑）。ともかく、デザインに関しては、キャラに上手くハマっているのは偶然の産物ですから、僕にとってはとても新鮮な感覚なんです。キャラへの愛情はあるけど、〝劇場公開〟と聞いても、ピンと来ないというような感覚も実はあるんですよね。ただ、いろんな偶然の絡み合いの中で作られた作品なので、やはり僕にとっては一線を画した〝不思議な作品〟として残るんじゃないか、と感じています」

編集　桂さんと西田さんには節目ごとにインタビューさせていただき、この本のP38～にも登場いただきました。広角的な『タイバニ』トークはいつも面白いです。

――まずは『タイバニ』と出会った時のエピソードを。

斎藤「2010年の暮れぐらいだったかなあ。桂正和さんがキャラクターデザインを手がけるアニメということで、最初は設定画のようなものを見せていただいたんです。タイトルもまだ『TIGER & BUNNY（仮）』でしたね」

田淵「ストーリーもなんとなくのプロットしかなかったので、スケールが大きく、解釈の余地がある楽曲にしようと考えました。そのスケールにうまくはまったのが『オリオンをなぞる』という言葉でした」

――では、ゼロの状態で制作されたのが『オリオンをなぞる』だったんですね。僕はてっきりヒーロー8人とオリオンの8つの星が連動してるのでは…などと深読みしたりして…。

田淵「（笑）脈略なく出てきた言葉です。でも、アニメを見るにつれて、不思議とリンクする部分が出てきて。お互いに意図せずアニメと楽曲が符合していったのは、僕たちにとって面白い経験でしたね」

――そうしてTVシリーズ1話を迎えたわけですね。

鈴木「僕は『TIGER & BUNNY』ってタイトルの第一印象から〝一体なんのアニメだ〟と思って少し心配でした（笑）。それで広島のライブの時に初回放送というので、ドキドキしながらみんなで見たんですが、OPで〝これは面白い！〟と感動して1話を見終わった時には完全に視聴者になって2話が楽しみになっていました」

田淵「なんとなくのイメージで、主人公がロボットで敵と戦う…漠然とそんな内容を想像していたんですが、全て1話で覆されました。企業がヒーローを雇う設定、ひ弱で人間臭い人がヒーローをやっている。これは規格外な作品だなと思いました」

斎藤「僕自身、しばらくアニメを見ていなかったので、かなり久しぶりに見たアニメ作品だったんですが、引き込まれましたね。田淵の言うように規格外だけど王道のヒーローもの。僕のようなアニメから離れた大人でも、すんなり入っていける作品だなと感じました」

――『タイバニ』のみならずアニメのOPにユニゾンの楽曲が流れることに、思うところはあったのでしょうか？

田淵「曲はアニメの片隅にある役割だと思っているので、アニメ作品になってしまったからには、視聴者の立場であろうと思っているんです。アニメ好きな人達が『タイバニ』を見た時に、隅っこで曲も気に入ってくれたらいいな、という感じで思いは入れないようにしています」

――では『リニアブルーを聴きながら』はどのような思いで制作を？

田淵「まず作品に対してのリスペクトを絶対に忘れちゃいけないという感情がありました。そしてTVシリーズ、劇場版と連作する上で意味を持たせたい、と。そこでユニゾンのスタイルでもあるポップな疾走感は外さないようにしながら、狙いとして加速度をさらに上げました。歌詞に関しては、TVシリーズを全部見終わった後に、『オリオン〜』で書ききれなかった作品への思いを込めて、改めてイチから主題歌を作る狙いもありました」

斎藤「『タイバニ』を好きだという人たちが『オリオン〜』を好きで聞いてくれているという実感もあったので安心感があった反面、昔からユニゾンを聴いてくれている人達にこそ聴いてもらえる楽曲にしようという思いもあって…ロックバンドとしてやり続けてきたユニゾンの世界観はブレないようにしなきゃと思っていました」

田淵「そうだね。それと、僕自身アニメファンとバンドのファンがクロスオーバーする必要はないと思っていて、そこの部分と距離感を保ちながら、作品に対しての一番のファンだという気持ちで楽曲制作を行うようにしています。やっぱり音楽のエキスパートとして声をかけていただいているので、その立場から〝こんな曲はどうですか？〟という提案する気持ちをいつも差し出せるようにしています」

――歌詞で『タイバニ』を投影した部分というのは？

田淵「『オリオン〜』では書けなかった虎徹とバーナビーの距離感を投影したい、とは思っていました。最後まで距離感が埋まらない2人を描くにあたって、〝最後まで届いていない〟というニュアンスに乗せて書きました」

――2つの主題歌を経たうえで、いよいよ『The Rising』の主題歌となる『harmonized finale』がリリースされます。

田淵「僕の中で何に関しても三部作を念頭に置いている部分があるんです。三部作というものにロマンを感じていて、逆に言えば3作目はラストを意味するんですね。『オリオン〜』の延長線上で加速させた『リニアブルー〜』のその次を考えた時に、この楽曲で三部作を作り上げるという狙いをもって違うテイストのものにしようと決めました」

――それで、タイトルにも「finale」と？

田淵「劇場版2作同時制作の話が出た時から、物語がしっかりと着地するイメージで書きました。もちろんこの物語が続くことはいいことだと思いますよ。だけど今の段階では劇場版2作品という決められた枠の中

作品に対してのリスペクトは絶対に忘れちゃいけない

『タイバニ』の主題歌を手がけてきたUNISON SQUARE GARDENが、『The Rising』の主題歌『harmonized finale』を2月5日㈬にいよいよリリースする。フィナーレを彩るための美しいメロディーラインが特徴の楽曲についてはもちろん、3人と一緒にタイバニをじっくりと総括する

SQUARE GARDEN

で、明確な終着点であることは間違いないので、終わったという感じ…カセットデッキの停止ボタンが押された、その感慨が出せればと思っています」

――楽曲を最後まで聞くと読後感といいますか、終わったあとに芽生える切なささえ感じさせます。

田淵「映画を見終わって〝あぁ終わったんだな〟という感情はすごく意味のあること。『The Rising』を見終わった後に〝心地よい喪失感〟を味わってもらえたら、作品の楽しみ方になるんじゃないかなとは思っています」

鈴木「僕は最後の雰囲気を演出するためにシンバルを大事に演奏しています。それとドラマーとしてこの楽曲に対して僕ができる精一杯の提案は、テンポを少しだけ落とすことでした。言葉が流れずに耳にしっかりと残るテンポにすれば、静かな中にグッとこらえるような力強さを曲に与えられると感じました」

斎藤「終わりを歌うのは残酷ではありますが、儚さや美しさを楽曲から感じ取れたので、このメロディーに自分を投影できればなと思いました。普段だとバンドの温度感にボーカルを乗っけていく、というパターンなのですが、この楽曲では珍しくボーカルに演奏を合わせるアレンジを1箇所入れました。そうすることで歌詞の内に秘められた力強さを歌で表現できたんじゃないかと思います」

鈴木「僕たちの楽曲の根幹には、不遇な中でも未来に向かって頑張って勝ち取ろうという気概や、ドブの中から手を伸ばして掴み取る強さがあって、その根幹の部分が『タイバニ』と近いような気がしているんです。だからこそ、バンドマンとして悩んだり苦悩したりする自分の姿を、ヒーローとして悩む虎徹に重ね合わせることができる。不思議な感覚ですが『タイバニ』のヒーローたちの姿を通して、自分たちのことを考えさせられた感じがあります」

――それでは、みなさんにとって『タイバニ』はどんな作品として残りましたか？

鈴木「ヒーローとはなんだろう？って改めて考えるきっかけになったアニメです。そういえばサッカーをやっていた当時、僕はキーパーで、練習は辛かったですが、捕れるギリギリのシュートを掴んだ時のヒーロー感が大好きだったな、とか。今もヒーローになりたい自分がいることを思い出したりとか。『タイバニ』は珍しくヒーローの裏舞台を描いていたんですが、それが故に頑張っている自分を投影しながら『タイバニ』のキャラ達と一緒に頑張ろうと思えたので、心に残る作品になりました」

――鈴木さんは2011年に剣道を始められたそうですが、もしや『タイバニ』がきっかけだったのですか？

鈴木「違いますね（笑）。確かに夏前に始めましたが11月には辞めていました。ハマると長いんですが長続きする趣味が少ないんです。今はボルダリングをやっています」

――ボルダリングは長く続くといいですね…。では、田淵さんにも改めて『タイバニ』への思いを。

田淵「アニメ本編の面白さも然ることながら、制作スタッフの気概に共感できたところでしょうか。自分がやっていることの信念に自信があるからこそ、やり続けて結果を残した。本当に面白い作品はこういった気概から生まれるものだと思ったし、僕たちも共感したところが大きかったです。制作スタッフ一人ひとりの魂みたいなものや愛が、キャラクターに宿ることでエンターテインメントに昇華されているし、そこが凄いと思う。それを別の次元だけど音楽でやろうとしている僕たちにとっても励みになったし、僕たちにとってもいいタイミングで出会えた、と思いますね」

斎藤「強いだけがヒーローなのではなく、弱さがあるからこそ、みんながそれぞれ自分を重ねたり感情移入することができる作品なんだなって改めて思います。そんな作品で『オリオン〜』をはじめ僕たちの楽曲がいろんなところで歌ってもらえたり、盛り上がってもらえたりして幸せです。楽曲もすごく大事にされているな、と感じることのできた作品です」

――では、最後に『The Rising』に期待することを。

田淵「すごくシリアスな作品になるであろうことは、僕が『タイバニ』に期待していたところでもあるので、そこがとにかく楽しみです。ラストの着地点まで色濃く掘り下げたドラマを描いていただけると嬉しいです。そして、観終わったあとに、今頃虎徹はなにやってんのかなあとか、そんなノスタルジックな思いにふけりつつ、お客さん全員が、作品の一部に自分も溶け込めたという感覚に浸っていたら嬉しいですね」

Profile

UNISON SQUARE GARDEN

斎藤宏介（Vo/G）、田淵智也（B/Cho）、鈴木貴雄（Dr/Cho）からなるスリーピースロックバンド。'04年7月結成。下北沢を中心に活動を展開、そのポップなメロディーに乗せた独特の語感、世界観、圧倒的にパワフルなライブパフォーマンスが注目を浴び'08年7月に「センチメンタルピリオド」でメジャーデビュー。'14年2月9日㊐〜「UNION SQUARE GARDEN TOUR 2014 "桜のまえ"」を全国10カ所（11本）で展開

『The Rising』を観終わったあとに、心地よい喪失感を味わってもらえれば

タイバニスペシャルトーク

UNISON

NEW RELEASE

「harmonized finale」

2014年2月5日㊌ RELEASE
初回限定盤 ¥1,800（税抜）
通常版 ¥1,333（税抜）

『ネメシス』は今までの僕にはない世界観…とても大きなチャレンジでした

TVシリーズ後期OP曲『ミッシングリンク』でさっそうとメジャーデビューを飾ったNOVELS。彼らのターニングポイントにもなった前作『アースダイバー』を経て『The Rising』のOP曲『ネメシス』を含むニューアルバムを2月12日㊌にリリース。彼らが曲に託した思いをじっくりと聞いた。

タイバニスペシャルトーク
NOVELS

——まずは『タイバニ』の第一印象を。

竹内「最初の印象は〝なんなんだろうこれは?〟でしたね（笑）。僕自身アニメを頻繁に観ない人間でしたし、『タイバニ』に関しては更に、今までのアニメには無い全く新しいエンターテイメントの形でしたから。確か、その後すぐに1~3話までの映像を頂いて1人で観たんですが、ユニゾンのOPが映像上に流れていたので、それも含めた直接的な感想として、この後〝どうしよう…〟と思いました（笑）」

——（笑）プレッシャーもあったわけですね。そんな中で『ミッシングリンク』はどうやって制作を?

竹内「お話を頂いてからの日々は本当に悩みに悩みました。ただ、ヒーローとしての虎徹の気持ちをなんとか楽曲に反映させたいなと漠然と思っていたので、当時わずかだった作品の資料を補うように他のヒーロー作品を観て、ヒーローという人達が味わう喜びや悲しみ、フラストレーションを想像しイメージを固めていきました。模索する中で実はヒーローの真髄って、一概に賞賛を浴び続けているセンセーショナルなものだけではないな、と思えてきたんです。虎徹が悩み苦労する人間関係や娘の事、存在価値…は、僕らみたいな特別な能力の無い一般人が抱えている悩みにも集約されていると思って」

——より身近な感覚である、と?

竹内「例えば昔夢見ていたことが結果として形は変わってしまったけど、今を生きる大人たちの懸命さに重なる部分があったり。突き詰めて考えるほど、そういう部分こそ僕らアーティストが楽曲に汲み取らないといけないと思えてきたんです。だから『ミッシングリンク』に関しては、広い意味で僕が「ヒーロー」と捉えたイメージの集大成がそのまま具現化できたと思います」

——そうして『The Beginning』でのOP曲も手がけられることに。

竹内「『The Beginning』のお話を頂く前から書きたいテーマは既に決まっていたんです。実はお話を頂いて『アースダイバー』を制作していた頃、ちょうど僕は左胸の突発性肺気胸という病気で入院していたんです。入院中は制限が多く、その中でも辛かったのが喋ったり笑ったりすると完治が遅れるという理由で、1日に談笑時間は30分程度と決められていました。基本的に面会は謝絶していて、そのせいか毎日不安と孤独感でいっぱいでした」

——それは苦しく辛い経験でしたね…。

竹内「そんなある日に、僕と同じ症状の70歳くらいのおじいさんが、1人で休憩室にいる時に声を掛けてくださって少しのあいだ喋ってくれたんです。身体が健康な状態なら何も思わなかったかもしれません。でもその瞬間、理屈抜きに「このおじいさんは同じ限られた時間を僕にくれたんだ」と感じたんです。その日を境に、わずかな時間ながらほぼ毎日その方とお喋りするのが日課になり、話を重ねる毎に〝わずかな時間の出会い〟を深く考えるようになっていって…そういう思いの中で構築していった歌詞なんです」

——…時間も命も限りあるからこその〝価値〟を痛感する歌詞でした。

竹内「当時の自分と虎徹がヒーローとしていられる残りの時間、その2つを多少なりともダブらせて見ていたんだと思います」

——メロディーに関しては?

竹内「この歌詞が映画館のオープニングで流れた時、爽快で透明で、それでいて心にフワッと残るようなラインにしたいと思いながら作りました」

——では『The Rising』のOP曲について話を。

竹内「まず台本を頂いた時に〝ヤバイ!これは一曲では書ききれないな〟と直感的に思ったんです…でも、なんだかんだ言って書いたんですけどね（笑）。これまでの『タイバニ』のイメージとはガラッと変わる印象を受けたので。それで、色んなパターンを試しながら、これまでの僕にはないイメージ…自分の中での少し〝変化球的なイメージ〟でメロディーをある程度作ってしまってから、歌詞に取り掛かりました。歌詞も今までの僕にはないものを書こうと必死でした。…書き上げた歌詞を読み返している時、自分の世界観やテイストも変わってしまうのではないかと恐怖する部分も多々ありました」

——下手をすると自分を壊してしまう、と。

竹内「だから本当にチャレンジでした。でも、プロデューサーに見せたときに〝君が今まで書いた歌詞の中で1番良いよ、これで行こう〟という、物凄く意外な返事が返ってきて。その言葉には未だに驚いたままなのですが（笑）」

——まさにNOVELSにとって新境地の楽曲になったのですね。タイトルに込めた思いは?

竹内「『ネメシス』はギリシャ神話に出てくる「義憤」の語源で知られる女神からきています。この女神は他者の復讐をなだめる側面と、自分自身も復讐者としての側面、その二重性を持っているんです。この楽曲も同じように人の二重性をテーマにして書きました。僕らが日常で思ったりする〝この人の事はすごく好きだけど、意地悪したい〟だとか〝好きだ

けど幸せになって欲しくない〟という、公共の場において大声では言えないような、否定したいけど存在している人の感情の一部分〝シャーデンフロイデ（他者の不幸を喜ぶ感情）〟に苦悩する〝人〟が自分なりの答えを見出すまでについて書きました」

——歌詞を書き上げた時に感じた恐怖は、今は？

竹内「きっと僕が『タイバニ』に対して感じている〝変わって欲しくはないけど、変わってもっともっと面白くなるところも見たい〟という二重性も楽曲の中で重ね合わさって昇華されているんじゃないかなと思います」

——では『タイバニ』の作品の話を、印象的なエピソードは？

山田「TVシリーズの終盤、仲間がマべられて（※）いる時のベンさんと虎徹のエピソードです。いつでも息子を心配してるオヤジの愛の大きさ温かさを感じられた一番お気に入りのシーンです。マべられてるのか分からない沈黙の時のベンさんの表情、そしてマべられてなくて安堵した虎徹の表情が印象的でしたね。『タイバニ』には様々な形の〝愛〟が多く出てくると思うのですよ、家族愛や仲間への愛、一人の女性への愛、バディ愛。僕たちが音楽活動をしていく中でも同じように愛してくれる大事なオヤジ達がいてくれてですね、それにダブって見えたせいか特に輝いて見えたのがこの二人のお話でした」

——確かにじわじわくるシーンでした。

山田「それと内容というよりもビックリして、結果すごく印象的になったシーンが、『The Beginning』で明らかになった各ヒーローの変身シーンや能力の詳細です。特にスカイハイの浮くだけってのにはビックリしました。それなのにあの自信満々な感じ、より一層好きになりました（笑）。折紙サイクロンの投げた手裏剣を拾いに行くシーンもいいですね（笑）」

——めちゃ細かいところまで見てますね！

山田「特殊な能力があっても企業に勤めてたり人間臭かったりしたところが、ただのヒーローアニメにならなかった要因の一つかなとも思います。…それと14話になって『ミッシングリンク』で作られたOPがUstreamで流れた瞬間の衝撃は忘れられません！ すごく沢山の人と一緒にOPを見れたことが本当に嬉しくて…エピソードではないですが圧倒的に一番印象的な瞬間でした」

——『タイバニ』の独特の世界観について感じておられることを教えてください

楠本「ヒーローなのに会社員で、視聴率を意識して戦うという内容が今までのアニメになくて斬新だと思いました。それと、『タイバニ』はヒーロー一人ひとりの個性とストーリー性がとても色濃くて、全部のキャラが好きですね。普通だとあまり描かれないヒーローゆえの苦悩を描いていて、それゆえの強さもまた魅力でした」

——では『The Rising』に期待していることは？

吉田「『The Beginning』と違い、ストーリーも完全新作ということですし、どんな展開になるのかが一番興味のあるところです。個人的には色んな意味でスカイハイが報われる展開があると嬉しいです（笑）」

——（笑）いい彼女も見つけて欲しいですね。では、最後に『タイバニ』がNOVELSにどんな存在として刻まれましたか？

竹内「とても大きな、言葉では言い表せない程のものを頂いたと思っています。僕らはテレビシリーズ後期OPが自身のメジャーデビュー作でもありましたし、この作品を通してたくさんの人と繋がり合う機会も頂きました。自分たちが様々な意味で飛躍的に成長するキッカケをくれた作品でもあるし、それと同時に物凄く悩まされた作品でもあります。3度にわたって楽曲を手がけられたのは誇りに思います」

——最後に2014年NOVELSの展望を。

竹内「僕らが思ってることって実は前もこれからも多分ずっと変わらなくて。ただただ、より良い作品を作って、それをリリースしてたくさんの方々に聴いてもらうことです。そして、観に来て下さる方々の心に残るようなライブを演りたいです」

『ミッシングリンク』は広い意味で「ヒーロー」を捉えたイメージの集大成

NEW RELEASE

『ネメシス』に加えて『ミッシングリンク』、『アースダイバー』など全12曲収録予定のニューアルバムを2月12日㈬リリース！
¥2,667（税抜）

Profile

NOVELS

竹内真央（Vo/G）、楠本正明（G）、山田裕起（B）、吉田翔人（D）からなるロックバンド。'07年、愛知県出身の4人によって結成。深い物語性のある歌詞世界にドラマチックなメロディーラインで脚光を集め、'11年8月に『ミッシングリンク』でメジャーデビューを果たす。

※マべられる＝記憶を操作、消去されることの略称。"記憶の操作"を能力に持つマーベリックに由来。

TV Series テレビシリーズ

『ミッシングリンク』 NOVELS

2011年8月3日発売　¥1,000
TVシリーズ　第2期OP曲

虎徹とバーナビーのバディぶりが一変する第2期OPを彩ったのはNOVELSのメジャーデビューシングル曲。ドラマチックなメロディーラインと『タイバニ』の終盤に向けたうねりのあるストーリーを予見するような歌詞が印象的なロックナンバー。第1期とはテイストの違う展開を象徴するように、オープニングからシリアスモードのカラーに染めた。

『オリオンをなぞる』 UNISON SQUARE GARDEN

2011年5月11日発売　¥1,200
TVシリーズ　第1期OP曲

記念すべき『タイバニ』第1期OPを飾ったのはユニゾン5枚目のシングル。華やかに軽やかに"新未来"へと連れ出してくれるポップナンバー。歌詞カードを確認したくなるような"千里眼"や"空前絶後"といったフレーズが、流れるようなメロディーラインに溶け込んでいて、ついリピートで聴きたくなる。シングルなのに7曲入りというのも、お得で凄い。

『マインドゲーム』 珠妃

2011年9月7日発売　¥950
TVシリーズ　第2期ED曲

シリアスなストーリーが一気に加速していく第2期。そのED曲に抜擢されたのは女性シンガー珠妃の記念すべきファーストシングル。各話ごと終盤に見せ場の多い展開が印象的だった2期のラストシーンを、ドラマチックに演出したのがこのミディアムナンバーだ。EDカットでは虎徹やバーナビーたちヒーローがオフの表情を見せているところも印象的。

『星のすみか』 藍坊主

2011年4月27日発売　¥1,000
TVシリーズ　第1期ED曲

『タイバニ』の大きなテーマの一つでもある"絆"を藍坊主の視点で描いたという12枚目のシングル。本編が終わったあとにフッと流れてくる印象的なメロディーと力強いフレーズに、思わず心奪われてしまうロックナンバー。EDカットでは、後半の物語で虎徹とバーナビーの"絆"のカギとなってくるピンズを示唆するシーンが盛り込まれていた。

The Beginning ザ・ビギニング

『アースダイバー』 NOVELS

2012年　9月26日　¥1,000
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』OP曲

『タイバニ』初の劇場版のオープニングを飾った2ndシングル。疾走感に溢れた、抜けの良いロックナンバーだ。NOVELSの壮大で広がりのあるメロディーラインが、物語のスタートを感じさせる爽やかな曲調だ。しかし一方で、限りあるものに対して"価値"を問いかけるような深い歌詞世界がじんわりと印象を残すNOVELSならではの仕上がり。

『リニアブルーを聴きながら』 UNISON SQUARE GARDEN

2012年9月19日　¥1,200
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』主題歌

『タイバニ』の始まりを描いた『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』の主題歌。『タイバニ』シリーズを観た上で描き下ろされた『オリオンをなぞる』をさらに加速させたポップチューン。映画のエンディングシーンを爽やかな観終わり感とともに、これから始まる『タイバニ』ワールドの新たなスタートも感じさせる"贅沢"な1曲になっている。

ヒーロー活劇に、深みを持たせた楽曲

放送開始当初、深夜に放送スタートした『タイバニ』だったが、何よりもオープニング曲のスーパーポップな勢いとノリを目の当たりにして、ザッピングを止めた人もいたのでは？　TVシリーズ、劇場版と、それぞれに『タイバニ』の世界観にしっかりとリンクした主題歌、OP、EDが添えられていたことで、お互いを引き立て合ったのが『タイバニ』の音楽という側面。それはサントラ、キャラソンにも共通して言えることだ。

特にサントラの、凄み。音楽を担当したのはそのスケール感で海外でも注目を浴びる池頼広氏だ。ヒーロー活劇でありながら人情も描く『タイバニ』は、群像劇としても楽しめる作品。ショースタイルでコメディータッチなシーンもあるが、そのときに流れるBGMが虎徹の哀愁を表現していたり、不屈の魂を表していたりBGMもまた奥深い。

『約束』 Rihwa

2012年　10月3日発売　¥1,260
『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』挿入歌

劇中で虎徹と亡き妻・友恵の間に交わされた"約束"に思いを乗せた美しいメロディーのバラードはRihwaの2ndシングル。まるで友恵から虎徹への手紙のようにして書かれた歌詞が、崖っぷちでもヒーローを続ける虎徹の心象風景を描き出しているようで、思わず感動してしまう一曲。劇中、この曲が流れる虎徹と友恵のシーンも感動的なシーンだった。

Sound Track サウンドトラック

「劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-」オリジナルサウンドトラック

2012年10月31日発売　¥3,000

劇場版用に作られた新規BGMを収録。より重厚感と音の厚みが増した仕上がりになっている。中盤以降のキーマンとして登場するロビン・バクスターとの対決シーンを盛り上げる楽曲「TIGER & BUNNY vs Robin」や、物語の舞台となった壮大な遊園地「BIG TREE」のスケール感を表現した楽曲など全21曲。また、DISC2にはこのCD発売日に誕生日を迎えたバーナビー・ブルックス Jr.(CV.森田成一)のバースデーソングを収録。

TVアニメ「TIGER & BUNNY」オリジナルサウンドトラック

2011年10月19日発売　¥3,300

スケール感の大きな楽曲でTVシリーズを彩ったオリジナルサウンドトラック。手がけたのはドラマ『相棒』などで注目を集める池頼広氏。『タイバニ』ではお馴染みの曲から、ジャズ、ブルース…大人のエッセンスが織り交ぜられた全44曲／2枚組。スーパーユニット「B.T.B」による楽曲「夏の恋はお疲れサマー」(作詞:西田征史)も収録。

Variety バラエティ

TIGER & BUNNY「HERO RADIO」バラエティCD「Stern Bild Station!」

2012年9月26日発売　¥2,500

森田成一氏がパーソナリティーを務めるラジオ番組『HERO RADIO』から派生した"ラジオ風"バラエティCD。ゲスト平田広明氏との『タイバニ』をテーマにしたクロストーク&ミニドラマに加え、リスナーから募ったフレーズで作詞をしたオリジナルソング(「OK, YOU JO×IN US!!」折紙ロックハイ、「愛♡Scream!!!」乙女☆クラブ)も収録。

「TIGER & BUNNY THE LIVE」オリジナルサウンドトラック

2012年11月28日発売　¥3,000

まさかの舞台化で話題をかっさらった「TIGER & BUNNY THE LIVE」のオリジナルサウンドトラック。音楽はTVシリーズに引き続き池頼広氏が担当。よりライブ感のあるアレンジになっており、違うテイストの『タイバニ』ワールドが堪能できる1枚になっている。「Kotetsu -Brian Guitar Ver.-」などの"THE LIVEアレンジ"も聴きどころだ。

Character Song キャラクターソング

TVアニメ「TIGER & BUNNY」キャラクターソング「BEST OF HERO」

各ヒーローのキャラソンを集めた聴き応え十分のアルバム。タイトルを見ればどのヒーローのキャラソンかわかる、まさにTheキャラソンのオンパレード。ヒーローの個性を最大限に活かしたメロディーと遊びの効きまくった歌詞に、ファンならずとも楽しめる1枚になっている。BONUS TRACKの「嗚呼、HERO SUIT」は筆者も度肝を抜かれた快作。

2012年2月8日発売
¥3,000

TVアニメ「TIGER & BUNNY」キャラクターソング「GO NEXT!!」

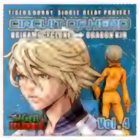
歌って踊れるヒーロー界のスーパーアイドル、ブルーローズの定番ソング「GO NEXT!!」。c/w曲にはカリーナ・ライルが歌う「My Song」を収録(歌はどちらも寿美菜子)。クールな嬢王様キャラのブルーローズの歌声から一転、しっとりとやさしく歌うバラードを歌い分けていて、楽曲から2つのキャラを感じ取ることもできる。作曲はどちらも池頼広氏が担当。

2011年7月6日発売
¥1,200

TVアニメ「TIGER & BUNNY」キャラクターソング「正義の声が聞こえるかい」

ワイルドタイガー(平田広明)×バーナビー(森田成一)の年の差ヒーローコンビによるデュエットソング。曲間には2人のレコーディング風景のミニドラマも収録されており、『タイバニ』ストーリーとキャラクターソングの世界観が完全に一致! タイガーが人情を熱く歌い上げる「はみだし者讃歌」、バーナビーがロック調で格好よく歌う「POWER OF JUSTICE」も収録!

2011年8月24日発売
¥1,500



TIGER & BUNNY -SINGLE RELAY PROJECT-「CIRCUIT OF HERO」Vol.1～Vol.6

各¥1,200
※Vol.7、Vol.8の発売は未定

「TIGER & BUNNY」シリーズ コンセプトCDが展開中!

クオリティーが高いことでファンを喜ばせるのと同時に、ファンじゃない人の度肝を抜いている『タイバニ』のキャラクターソング。その理由は楽曲(=キャラ)への愛情がそのままダイレクトに伝わるからで、昭和のキャラソンを聞いて育った世代にも納得のラインナップが揃う(驚)。そんな中、現在展開中の『TIGER & BUNNY -SINGLE RELAY PROJECT-「CIRCUIT OF HERO」』が凄い。リレー形式で2人ずつのヒーローが登場し、自らの楽曲とリレーのバトンを渡す相手とのデュエット曲の2曲が収録されている。Vol.1～6まで展開中。意外なコンビによるデュオも楽しいが、抜け目なく遊びの効いた曲を持ってくるので、1枚1枚にドラマもあるとても楽しいコンセプトシリーズだ。

TV Series｜テレビシリーズ

悪と戦い、人生を戦い、視聴率と戦うヒーローたち

テレビ業界は数年前に"デジタル"化し、視聴率は形骸化すると思いきや、今もってとても重要なファクターとなっている。視聴率ももちろん大事なことだとは思うが「視聴率が取れてない番組はつまらない」という時代は遥か、遥か昔に終わった。

『タイバニ』に出てくるヒーローはショーアップされたテレビの世界の人たちであり、タレントである。人気と視聴率を獲得できなければ、リストラにさえ遭う…そんなしがない会社員である。彼らは悪と戦い、人生を戦い、視聴率と戦う。ある意味では正義よりも視聴率を優先する世界である。ややもすると自己欺瞞さえ通用する華やかな社会で、彼らは汗を流して戦っている。まるで現代のサラリーマンのように。

中年ヒーロー・ワイルドタイガーは人生崖っぷちだが「俺たちヒーローは、平和を守れりゃ、それでいいんだよ」と真っ直ぐに吠える。その姿はただ格好いい。21世紀の新しいヒーローアニメに違いはないが、その根底には紛れもなく昭和の熱い日本のヒーローの精神が息づいている。

そうやっておっさんの目を通して『タイバニ』を観ると力が湧いてくる。おすすめはやっぱり1話。30分で充分『タイバニ』の魅力がわかるはずだから。

第1巻

左　Blu-ray初回限定版　¥3,150
右　Blu-ray通常版　¥2,625

第2巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第3巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第4巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第5巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第6巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第7巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第8巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

第9巻

左　Blu-ray初回限定版　¥7,350
右　Blu-ray通常版　¥6,300

リーズナブルでコンパクトなDVD-BOXが1月29日に発売！

上で紹介した全9本が現在発売中の『タイバニ』Blu-ray。初回限定版は、桂正和描き下ろしの特製ブックケースに、特製ブックレット、スペシャルCDなど特典がとにかく豪華。特に各巻ごとに封入されているスペシャルCDには、本編では描かれていないヒーローたちの素顔が描かれる楽しいオーディオドラマが収録されている。また、第9巻のみ桂正和描き下ろしイラストを使用した全巻収納ボックスが特典になっている。

そして2014年、『タイバニ』全25話をよりリーズナブルに楽しめるDVD-BOXが1月29日にいよいよ発売される。コンパクトサイズな仕様も嬉しい。

1月29日発売!

『TIGER & BUNNY DVD-BOX』

¥12,600(税込)
※『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』公開を記念した期間限定生産(2014年10月31日まで)

表にはバディ、裏には6人のヒーローがデザインされた格好いいジャケット!

The Live ザ・ライブ

熱気と興奮 そして感動のラストに包まれた舞台版!

2012年8月24日〜9月1日に開催された舞台『TIGER & BUNNY THE LIVE』。アニメと同じく虎徹役を平田広明、バーナビー役を森田成一が演じ、『タイバニ』の世界感を限りなく"リアル"に舞台化! 完全再現と言い切っても過言ではない出演者のキャラクター&ヒーロースーツの再現度の高さもまた凄い! 舞台上ではタイバニキャラが躍動し、シュテルンビルト市民となった観客席が舞台を盛り上げる。観客も出演者となり渾然一体となった劇場感は爽快。そんな中でもひときわ眼光鋭く異彩を放つのが大葉健二だ。ヒーローアカデミーでのトレーニングシーンやバトルシーンは『タイバニ』ワールド×JAEアクションが融合する見せ場の一つ。特撮ファン、アクションファンも堪能できる1本となっている。

『TIGER & BUNNY THE LIVE』
Blu-ray ¥8,190 DVD ¥7,140

The Beginning ザ・ビギニング

『タイバニ』初の劇場版は、始まりの物語を描いた快作

『タイバニ』初となる劇場版は、虎徹とバーナビーの出会いを描いた『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』。TVシリーズ1話でカットされたシーンやエピソードに加えて『タイバニ』らしい遊びの要素も盛り込んで再構成。虎徹とバーナビーの出会いのエピソードを際立たせつつ、TVシリーズのストーリーに深みを持たせる"補完"的な位置付けにもなっている。実は、ヒーローアニメでは敬遠されがちな"会話劇"や"戦わないバトルシーン"にあえて見せ場を置いている本作。TVシリーズの面白さがあってこそ成立する部分でもあるが、"実写テイスト"をアニメに盛り込んだ西田脚本を、米たに監督のディレクションにより従来のヒーローアニメとは違う角度から光を当ててみせた、ヒーローアニメの新境地ともいえる作品だ。

『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』

左	Blu-ray初回限定版	¥9,240	DVD初回限定版	¥8,190
右	Blu-ray通常版	¥5,040	DVD通常版	¥3,990

Special Edition スペシャルエディション

虎徹とバーナビー、それぞれの視点から見た総集編

TVシリーズを2作品の総集編(各90分)で『タイバニ』すべてを振り返る総集編。ただ物語を時系列に追いかけるわけではなく、1話〜13話をバーナビー目線、14話〜25話までを虎徹目線で振り返ることで、当時の2人の"主観"がよりハッキリとわかる内容となっているのが見所。

ジェイク・マルチネスとの「セブンマッチ」の結着までを描く『SIDE BUNNY』では、バーナビーによるナレーションが新録されている。前半部分で気持ちを表面に出すことのなかったバーナビーの心情が総集編の隙間を埋めるように語られることで、物語に深みが増す仕掛けだ。

虎徹の能力減退に伴うシリアスストーリーを軸に、バーナビーの過去が明らかになっていく『SIDE TIGER』は、虎徹によるナレーションが新たに収録されている。

そして面白いのは「新作パート」だ。『SIDE BUNNY』ではバーナビーがヒーローたちを自宅に招くというエピソードが、『SIDE TIGER』では虎徹の自宅にヒーローたちがやってくる話が盛り込まれ、TVシリーズでは見ることのできなかった虎徹、バーナビーのちょっとした一面が垣間見える展開となっている。ファンにとって嬉しいのは音声特典のオーディオコメンタリー。まるで虎徹とバーナビーのような平田広明&森田成一のフリートークでじっくり振り返ることができる。

『TIGER & BUNNY SPECIAL EDITION SIDE BUNNY』
左 Blu-ray初回限定版 ¥6,300
右 Blu-ray通常版 ¥5,040

『TIGER & BUNNY SPECIAL EDITION SIDE TIGER』
左 Blu-ray初回限定版 ¥6,300
右 Blu-ray通常版 ¥5,040

Event イベント

豪華特典満載の歴史的イベントDVD

『TIGER & BUNNY』のNEXT PROJECT第1弾となるイベント『TIGER & BUNNY HERO AWARDS 2011』の模様を収録。主題歌&エンディングを担当したアーティストのライヴ、生ツイッター企画を盛り込みながら、ヒーローを演じたキャスト陣によるスキット、「HERO AWARDS 2011」の発表など、アニメの世界観を疑似体験しているようなイベントとなった。映像特典は桂正和氏、西田征史氏も参加した「最終回上映イベントトークダイジェスト」。

『TIGER & BUNNY HERO AWARDS 2011』
Blu-ray ¥7,140
●キャラクターデザイン羽山賢二描き下ろし特製スリーブ仕様。パンフレット縮刷版付きと豪華!

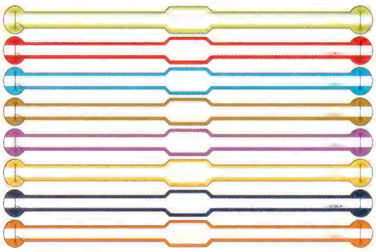
紹介した作品はすべて発売・販売元:バンダイビジュアル

バリエーション豊富すぎるグッズの数々もまた『タイバニ』ならではの面白さ。ここでは、過去に発売された関連グッズからおもしろおかしくて、そして本気で欲しいと思った逸品をTV Bros.が独断で厳選! こんなグッズもあったのか! とクスッとしていただきながら、今後発売されるグッズへ思いを馳せてみては!?

※販売終了している商品もあります。商品の詳細は各メーカーまでお問い合わせを!

Lifestyle ヒーローなライフスタイルを彩れ!

TIGER & BUNNY モーニングセット
(ムービック)



PDA風メモ
(ムービック)

アイパッチ風安眠マスク
(ムービック)

鏑木酒店 手ぬぐい
(ムービック)

名刺ケース 6種
(ムービック)

ルナティック柄ブランケット
(プレミアムバンダイ)

Ware ヒーローなフォルムを纏え!

バイクヘルメット(タイガー&バーナビー)
ララビットマーケット

BEAMS×TIGER & BUNNY×BANDAIパーカー
(左からワイルドタイガー、バーナビー、ルナティックの各モデル)

ファイヤーエンブレムマスク
(ムービック)

タイバニブランド香水
NESCRE Perfume of TIGER & BUNNY シリーズ(各3150円)

Ver.WILD Roar / Ver.Super Rookie / Ver.COLD & HOLD

Ver.Thanatos / Ver.MIKIRE / Ver.Windmaster

サイクルジャージ
(ワイルドタイガー、バーナビー)

ワイルドタイガーゴムマスク
(ムービック)

Highend ヒーローなハイエンドモデル!

ルナティック ZIPPO
(サーファーズ パラダイス)

タイバニ×レッドモンキー ハイエンド腕時計
(左から虎徹、バーナビー、ブルーローズ、イワンの各モデル)

バーナビー・ブルックス Jr. サングラス
(プレミアムバンダイ)

Fashion
ヒーローなファッションの粋！

バーナビーデザイン
ライダースジャケット
（コスパ）

バーナビー
シルバーリング
（コスパ）

虎徹ベスト
（プレミアムバンダイ）

虎徹ハンチング
（プレミアムバンダイ）

イワンモデル
カーゴパンツ
（プレミアムバンダイ）

ロックバイソンモデル
本革ベルト
（プレミアムバンダイ）

イワンモデル
ジャケット
（プレミアムバンダイ）

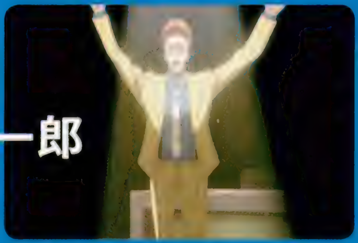
Figure
ヒーローをその手の中に！

フィギュアーツ
ZEROシリーズ

S.H.Figuartsシリーズ

アニエス・ジュベール
as 甲斐田裕子

マリオ
as 太田真一郎



斎藤さん
as 岩崎ひろし

ベン・ジャクソン
as 宝亀克寿

アレキサンダー・ロイズ氏にみるヒーロービジネスの流儀

アレキサンダー・ロイズ役
横島亘スペシャル・コメント！

サラリーマンパパの娘の子育てヒント

パパ必読の6つのヒント！

その男 ユーリ・ペトロフ

ユーリ役遊佐浩二ミニインタビュー！

TV Bros.タイバニ特別編集チームが
総力を挙げてエディットしたラインナップ!

ヒーローを支え続ける名脇役 04 +3

キャスト スペシャル・コメント付き!

ヒーローを
支え続ける
名脇役
1

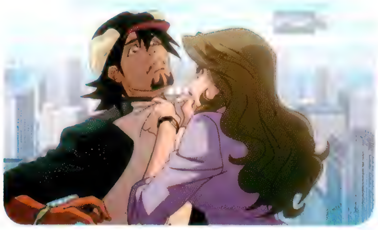
ボンジュール、ヒーロー

「HERO TV」凄腕プロデューサー

アニエス・ジュベール

視聴率至上主義を貫く
冷徹でクレバーな強い女性

低迷していた「HERO TV」にプロデューサーとして赴任。たとえヒーローたちの身に命の危険が及ぼうとも無謀な「CMまたぎ」を指示、ド派手でいて緊張感を煽る見せ場を演出し、視聴率向上を成し遂げた凄腕。視聴率至上主義で冷徹ともとれる性格だが、冷静な判断力で事件解決の糸口を見つけ出すクレバーさも。彼女の即断が、ヒーローたちを度々救うことに。



いつも怒りながら指示を出している印象のアニエスだが、現場への介入も多く体を張った身代わり捜査さえ行う。ヒーローたち以上に犯人逮捕への使命感を燃やす一面も。

アニエス・ジュベール役
甲斐田裕子さん スペシャルコメント!

――まずは、初めて『タイバニ』と出会った時の第一印象を教えてください。

「まず絵を見て、〝この絵、知ってる!! 私が学生の頃、美しい絵だなと思っていた桂さんだ!〟と一気にテンションが上がりました。その中で、アニエスは〝美人だけどキツそうな人だな。演じたら楽しそう〟と思いましたね」

――では、実際に演じてみて、印象はいかがだったでしょう?

「最初こそ、『厳しくテキパキ仕事をこなす怖い上司』な感じでしたが、虎徹やヒーロー達との信頼関係ができてくると、『頭の切れる愛ある上司』に感じられて、演じていて嬉しかったです。チャーミングな所も多々あるので、可愛らしく感じています」

――仕事(視聴率)に対してみなぎる自信と女性の色気を兼ね備えたアニエスですが、彼女の印象的なシーンは?

「やはり、シリーズ最後の大ドンデン返しでのヘリからの登場でしょうか。まさか、こんな活躍をしてくれるとは思っていなかったので、我ながら誇らしく、そして、やはり視聴率は忘れないところがアニエスだな、と」

――…つい惚れてしまう名場面でした。ちなみに、甲斐田さんのお好きなアニエスのセリフは?

「『ボンジュール、ヒーロー』の台詞は大好きです」

――…つい惚れてしまう名台詞でした。そんなアニエスの魅力は?

「強い彼女は、演じていて思い切りよく発散できるので、とても気持ちいいです。その強さに隠れた優しさ、ほんの少しの乙女っぽさも好きです。自分とは正反対だから楽しいのかも」

――ストーリーが進むごとにアニエスならではの〝乙女〟な部分も描かれていて、終盤では冷徹だけではない愛のある魅力的な女性に感じられました。では、甲斐田さんが感じておられる『タイバニ』の魅力を。

「オリジナルであるが故に、演者みんながそれぞれのキャラクターとのシンクロが強く、ヒーロー達と同じように、演者達の仲間意識もより高く、良い現場でした。それが、作品の見えないパワーになっている気がします。スタッフ・キャスト、みんながこの作品が大好きなんです」

――甲斐田さんにとってヒーローとはどんな存在でしょう?

「最初、『タイバニ』のヒーローの設定が難しく感じて(ヒーローなのに企業名がついていたり、『HERO TV』という番組だったり)。でも、わかるにつれて、とても人間的なヒーロー達に魅力を感じています。本当にこんなシステムがあったら面白いですね」

――きっとすごい視聴率が取れるでしょうね! 最後に、アニエス・ジュベールへメッセージを。

「いつでも貴女らしく、一直線に進んでください。次に会う時には、恋に悩んだり、弱い部分が見えたり、いつもと少し違う姿を演じたいな、なんて期待しています。それがグングン伸びる視聴率につながるかも…、ですよ(笑)」

ヒーローを支え続ける名脇役 2

さあ、事件発生です

ヒーローの活躍を実況でサポート
マリオ

ヒーローによる緊迫した捕物帳を、その声でエンターテインメントに昇華！

「あぁ～っとぉぉ!!」という「HERO TV」の実況でシュテルンビルトではお馴染み。抑揚を効かせつつも臨場感たっぷりの実況で、思わず視聴者を釘付けにしてしまう実況レポーター。不意に起こる事件現場でも昼夜を問わず駆けつけ迫真レポートを行う。事件解決後のヒーローへのインタビューや、イベント司会など各方面で引っ張りだこの人気者。

マリオの実況の声こそ記念すべき「タイバニ」第1話の第一声。「HERO TV」の番組説明とヒーローの活躍が"実況形式"で伝えられており、「シュテルンビルト」という世界観へすんなり入り込めた人も多いハズ。「生意気なのはボディだけじゃなぁいっ!」などマリオ発の名言も多い。

マリオ役 太田真一郎さん スペシャルコメント！

―まずは、始めて『タイバニ』と出会った時の第一印象を教えてください。

「スポンサーを背負って戦うという設定は、"斬新で面白い"と思いました。ヒーローとお金、自分の中で相反するイメージだったのですが、この二つがどう融合するのか楽しみでした」

―マリオはその"融合"の部分の一翼を担う役割だったとも思います。始めてマリオを見た時の印象は？

「細っ!!」

―確かにひときわ細いです(笑)。そんなマリオは生放送の実況レポーターですが、太田さんご自身、タイバニならではの意識した部分、また面白さや難しさを感じた部分は？

「時には人の生き死に関わる事もある実況なので、どういうテンションでやればいいのか……と戸惑う部分はありました。だからといって、テンションを落とし過ぎたら、『HERO TV』として成立しない気がしますし……、そのあたりは難しいですね」

―なるほど。ショースタイルの実況でありながら、派手さだけでなく、ややトーンを抑えた印象を受けるからこそ『HERO TV』という番組のリアルな雰囲気も感じられたのですね。では『HERO TV』の中から、最も心に残ったエピソードを教えてください。

「やはり、第1話のヒーローたちの登場シーンです。自分で実況をしながら、皆さんのカッコ良さ(アクションや登場するタイミング)にしびれました」

―そんなヒーローの中で、太田さんから見て特に好きなのは？

「ヒーローはみんな好きなんですが、あえて一人とするならば"スカイハイ"です。イケメンで実直、さらに犬好き。素敵過ぎます」

―愛犬ジョンの毛並みを見れば、どれだけ愛されているかわかりますものね。では、太田さんが感じておられる『タイバニ』の魅力を教えてください。

「ヒーローや、彼・彼女たちに関わる人たちが苦悩し、葛藤する姿にグッときます。ひとつひとつのエピソードで描かれ出てくるキャラクターの魅力こそが、作品そのものの魅力だと思います」

―太田さんにとってヒーローとはどんな存在でしょうか？

「"弱きを助け、悪を討つ"これが自分のヒーロー像でした。その思いに今も変わりはありませんが、この『タイバニ』という作品を通して、そんなヒーロー自身にも弱さがあって、それを乗り越えようとしている。ヒーローは陰ながら"己とも戦っているんだな"と感じました」

―その自らの弱さと戦うという部分に励まされたりもしました。では最後に、マリオへのメッセージをお願いします。

「現場の最前線に出て実況することも多々あると思いますが…、ケガが無いようにがんばってください！」

ヒーローを支え続ける名脇役 3

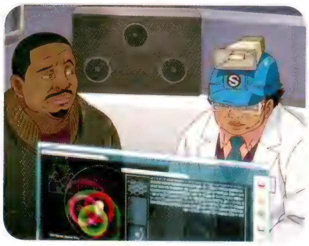
いいぞ!! おふたりさん!

字幕で語る超小声の技術者
斎藤さん

メカニックとして虎徹とバーナビーを支える ウィスパーボイスの天才技術者

アポロンメディアの技術者でワイルドタイガー、バーナビーのヒーロースーツを開発した。普段は冷静沈着で聞き取れないほどの小さな声＝ウィスパーボイスで話すものの、ひとたび拡声器を持てば、一気にハイテンション。その口調さえ乱雑になる。口は悪いものの天才的な開発技術で、虎徹やバーナビーを窮地から救ってきた。閉所恐怖症で無類のアイス好き。

自ら開発したスーツに絶対的な自信をもっており、メカ的ギミックへのこだわりも強い。機能的には無意味な「Good luck mode」によって、虎徹とバーナビーのコンビネーションを“確立”させた立役者でもある。



斎藤さん役 岩崎ひろしさん スペシャルコメント！

――まずは、初めて『タイバニ』と出会った時の第一印象を教えてください。

「ヒーローものということで、どのヒーローを演じるのかな？♥ ……という願望は、斎藤さんの絵コンテを見て現実に引き戻されました」

――(笑)！ では、斎藤さんと初めて出会った時の印象は？

「いつもの〝キャラ〟ね！ そんな軽い感じの出会いでした」

――斎藤さんはヒーローでこそありませんでしたが、演じてみての印象は？

「〝脇役〟であるにもかかわらず、じわじわと人気が出てきていることをスタッフやキャストの方たちに教えられ、がぜんヤル気が出ました！(笑)」

――ヒーロースーツへの底知れぬプライドに加えて、ウィスパーボイスという斎藤さんは独特なキャラでした。岩崎さんご自身、印象に残っているエピソードはありますか？

「斎藤さんの挿し絵がアフレコ台本の表紙を飾った第23話です！ それまでは字幕と大声の芝居だった斎藤さんが、なんと！ 頭に拡声器をつけて登場したのです。その面白さとアイデアに思わず〝最高!!〟とガッツポーズをしたのでした(笑)」

――そんなことが！ 岩崎さんのガッツポーズ見たかったです！ では、斎藤さんの魅力とは？

「ファンの皆さんが、斎藤さんのイメージをどんどん膨らませてくれたんです。『斎藤さんカワイイ!!』、『斎藤さん、めちゃフェアリー!!』と。これからも〝出過ぎない面白さ〟を目指します！」

――岩崎さんが感じておられる『タイバニ』の魅力を教えてください。

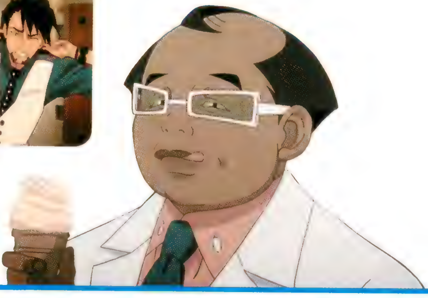
「脚本・絵・音楽・スタッフ・キャスト全て！ そして登場人物みんなが魅力的なことです！」

――ちなみに、岩崎さんにとってヒーローとは、どんな存在ですか？

「私のヒーローは、〝人を楽しませるエンターテイナー〟です！」

――斎藤さんもまた我々にとってヒーローでした。では最後に、斎藤さんへメッセージを。

「あなたは、私の宝物です。これからも仲良くしてください！」



ヒーローを
支え続ける
名脇役
4

すまねぇな、虎徹

虎徹のもうひとりの“相棒”
ベン・ジャクソン

虎徹の元上司であり唯一無二のファン
男の友情と絆を体現する“いぶし銀”

かつてはシュテルンビルトの出版社トップマグで虎徹の上司として働いていたが、ヒーロー事業部の撤退とともにリストラされた。しかし、リストラ後もワイルドタイガーのファンであることを自称し、タクシーの運転手へと転職した後もつねに虎徹の身を案じ続けた。虎徹の最大の理解者であり、虎徹にとっては欠くことのできないもうひとりのバディだ。

“壊し屋”の異名を持つワイルドタイガーの後始末を一身に背負い、損害賠償請求による赤字や人気低下など逆境にあえぐ虎徹の活躍を見守り続けてきたのがベンだ。リストラ後、虎徹の能力減退に誰よりもいち早く気づいたベンは、ヒーローとしての誇りを虎徹に伝えた。

ベン・ジャクソン役
宝亀克寿さん スペシャルコメント！

――まずは、初めて『タイバニ』と出会った時の第一印象をお伺いします。

「第一印象はアクションがアメコミヒーローを想起させるものでしたが、アメコミヒーローのスケールがテレビの画面の中で精密に創られていることに驚きました。発想が非常に面白く、近未来的な犯罪捜査の方法がかなり衝撃的に感じられました」

――そんな世界観の中で、ベン・ジャクソンと出会った印象は？

「ベンさんとの出会いは、俺に似てデジタルな時代についていけないアナログ人間かなと思い親近感を覚えました。人間が好きなベンさんの生き様が垣間見えて安心しました」

――実際に演じられていかがでしたか？

「ベンさんに対する思いは、TVシリーズも劇場版も、ベンさんの根の所は一緒だと思って演じました。人が人を大事にする。人が人として交感していくベンさんを大好きになりました。外見的には、ベンさんに似た人の役はかなり多かったので違和感はありませんでした」

――リストラに遭っても、虎徹を陰ながら支え続けるベンの姿にはグッとさせられました。

「年齢の衰えと共に能力減退に悩んでいる虎徹を見ても、ベンは虎徹がそれ位で終わる男とは思っていない。ベンさんには確信があり虎徹に対しては絶対的な自信と優しさがある。そのベンさんの静かな優しさと強さに感動します。」

――宝亀さんからみたベンの魅力とは？

「一人の男が才能のある男に魅了され、その才能を更に伸ばすことに全力を尽くす。天才と言われる男を絶対的に支えようとする男としての生き様をベン・ジャクソンに教えられ感動しました」

――虎徹を天才として捉えていた。

…僕もそう思います。ベンと虎徹にしか感じ得ない絆があったと思うと感動もひとしおです。では、宝亀さんが感じておられる『タイバニ』という作品の魅力を教えてください。

「まずスピード感、そして絵が綺麗だということです。各々のキャラクターの際立ちがよく、見ていて飽きませんでした。特に色使いが明るくて私は好きでした。それとフレイスメントロゴがユニークで妙にリアリティがあって、それも魅力の一つだと思います」

――ところで、宝亀さんにとって、ヒーローとはどんな存在でしょう？

「多くの人に愛され人々を魅了し続けることのできる人達。普通の人の常識では計り切れない世界を持っている人達。常に目標に向かって自分自身と闘い、人々に喜びを与えることを宿命づけられた人達。『タイバニ』のヒーロー達も、私の持つヒーロー観と同じだったので、私の中ではヒーローに対する感じ方に全く変化はありませんでした」

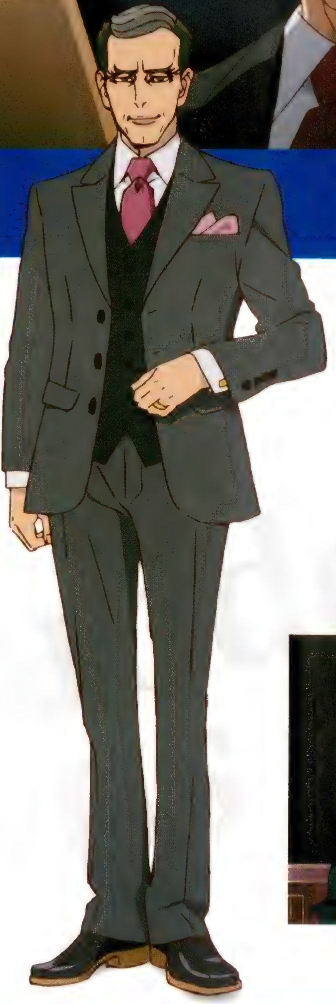
――では最後に、ベン・ジャクソンへメッセージを。

「自分の生きる道、
人としての優しさそして強さを、
いつまでも忘れず体に気をつけて！
再開の日を心待ちにしています。
敬愛するベン・ジャクソンへ」

ビジネスパーソン最前線
特別編

アレキサンダー・ロイズ氏にみるヒーロービジネスの流儀

今回の「ビジネスパーソン最前線」では、アポロンメディアのキーマンの一人、ヒーロー事業部のアレキサンダー・ロイズ氏をフィーチャーする!
シュテルンビルトを象徴するエンターテインメント・レスキュー番組『HERO TV』の制作会社を管轄に置き、新たにヒーロー事業に参入し、史上初となるコンビヒーローを結成させ売りだしたアポロンメディア。その道筋をロイズ氏の言動から探っていく。
先行きの見えない現代社会だが、チャンスは必ずある。この特集が今を生きるビジネスパーソンたちに、時代を勝ち抜く為のヒントになることを祈っている!



アレキサンダー・ロイズ氏とは?

アポロンメディア　ヒーロー事業部所属でシュテルンビルトにおいて、ヒーロー業界初となるコンビヒーローの上司。
そんな彼の言動をじっくりと観察すると、中間管理職ならではの“世渡り力”が見えてきた!
なお、氏の有名な口癖は
「イヤなら辞めてもらってもいいよ?」。
逆らう部下にはこのフレーズで黙らせ、物事を円滑に進めてきたのは読者のみなさんもご存知のとおり。

アレキサンダー・ロイズ役 横島亘さんに聞いた
ロイズの魅力、そしてロイズに一言!

——まずは、中間管理職であるロイズ氏の第一印象をお伺いします。
「第一印象は、とても冷徹で怖い感じでした。ニヒルな二枚目でオシャレ。普段からポケットチーフですからねぇ。私は披露宴のパーティーでしかかしたことないなあ。目もまつ毛が長いのかと思いきや眉毛が長かったので、村山元首相を思い出しちゃって、ちょっとビビりました(笑)。けっこう年齢がいっているのではと、ちょっとビビりました(笑)。髪の毛にも微妙にグレーが入っていますしね」
——演じる中でロイズ氏の印象や演じ方に変化はありましたか?
「まずは、低音で話すことが少なくなりました。いきなり2話目くらいから二枚目ダンディキャラはどこへやら、ヒステリックに虎徹を叱ってばかりいましたから。特に、オーディオドラマやゲームの中では、キレまくりの高音も出しまくりです。そして、虎徹&バーナビーのコンビをなんとか成功させるために、声とは逆にどんどん腰は低くなっていった。成功とともに、ご機嫌な時も増え感情も丸出し(笑)」
——彼のサラリーマンゆえの保身や出世欲もわかりやすいですよね。
「つまり、彼は仕事熱心なんですね。気が付いてみれば、そこには等身大の人間ロイズがおりました」
——彼からサラリーマンの悲哀などを感じることはあったのでしょうか?
「それはなんといっても上司に対する腰の低さ。こ

『ロイズ発言にみるビジネス用語の基礎知識』

ここではロイズ氏の8つの言動を取り上げ、ビジネスシーンで使える（かもしれない）ヒントを探っていく。そこに秘められたビジネスパーソンたるロイズ氏の信念にも迫っていきたい。

「君がワイルドタイガー？ あぁ、トラテツって名前だからタイガーか」（1話）

●記念すべき初登場シーンで主人公の名前にまったく興味がないロイズ氏。さらに「コテツです。鏑木虎徹」と訂正する虎徹に対して謝ることもなく「ふ～ん」と返すだけ。

➡ 魅力のない平社員は興味を持ってもらえないという恐ろしき企業体質を見せつけた名場面。

「そういう事は結果残してから言いましょうね？」（2話）

●初めてのコンビでの連携に失敗し、「あんな奴と組めません」と言う虎徹にピシャリ。

➡ チーム内で何かしらの不具合が生じた場合、責任を負うのは先輩社員であるべき。これは組織において鉄則だ。その理由がたとえどんなに不条理なものであろうと。

「バーナビー中心でお願いしますよ。あっち（ワイルドタイガー）は添え物なので」（6話）

●…露骨ッ！ あまりにも露骨に虎徹を“添え物”扱いするロイズ氏。

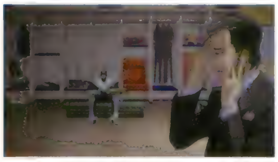
➡ しかしそれも組織社会にはありがちなこと。有能な新人は出世街道を駆け上り、結果を残せないベテランはリストラされないだけでも幸せを感じなければならない、嗚呼！

「社長が視察にいらっしゃったんだ。本来クビになってもおかしくない君に救いの手を差し伸べてくれた恩人だぞ？」（7話）

●視察に来たマーベリック氏に対し、愛想もなく「あん？」とつい生返事をしてしまった虎徹に、すかさずこうピシャリ。

➡ 企業に雇われているからこそ、仕事（ヒーロー業）ができ、お給料ももらえる。そのありがたみを痛いほどよく知っているからこその、お説教でもある。

「最近の若者にしては珍しく仕事熱心な男だと思ってたのに…」（7話）



●電話の繋がらなくなった有能な部下（バーナビー）のことを愚痴るロイズ氏。

➡ 若い社員に対して、「仕事に対してあまり熱心ではない」という先入観を持っていることは間違いないが、優秀な人材は認めようとする、決して年功序列ではないマインドを感じさせる一コマだ。

「ワイルドタイガー…ヒーローに休日なんてないぞ？」（10話）

●虎徹に対して無理やり有給休暇を取らせておきながら、その直後、華麗なる手のひらがえし。

➡ 刻一刻と変わるスピーディーな現代社会では、臨機応変に対応するのもビジネスパーソンの大事な資質。たとえ有給を無理強いした直後であろうとも。

「辞めて貰っちゃ困るよ！ 2度と言わないで辞めるなんて」（14話）

●目覚しい活躍と人気で、バーナビーとともにコンビヒーローとして一躍スターとなった虎徹へこの態度。

➡ “昨日の添え物が今日は主役”というのは、どんなビジネスシーンでもよくあることだ。状況変化を的確に読むのは大事である。

「次はバラエティー番組の収録。その後は、お正月アニメのゲスト声優」（15話）

●ここぞとばかりに仕事を入れるロイズ氏のセリフ。

➡ 時代を先取りする先見性――。ニーズがあればたとえ畑違いの業界でも攻めの姿勢を崩さない。そこはさすがロイズ氏、ビジネスパーソンの鏡だ。

れは涙ものですねぇ。ロイズが垣間見せるちょっとしたシーンが、『The Rising』での見せ場です。楽しみにしていただきたいですね」

――そんなロイズ氏の好きなところは？

「偉そうにしているだけではなく、かなり仕事ができるところです。実はオーディオドラマ＃3「アポロンメディア　ヒーロー事業部へようこそ！」で描かれています。そこでは1ヵ月分のやり残した仕事を1日で終わらせ、バーナビーに「事務の能力を有するNEXTでは!?」と言わしめています。なお、ロイズ語録には「結果出してからものを言いましょうねぇ」というのがあります（笑）」

――ちなみに、横島さんがロイズ氏とお酒を飲み交わすなら、どこで飲みたいですか？

「場所は……温泉に入れるところがいいなぁ。ゴルフ帰りにね。景色がよくて、地物の美味しいものでも食べながら〝ロイちゃん～、ちゃんと息抜きしてる？内面もいい感じだから、一人で抱え込まないようにしたほうがいいよ〟って話したり……」

――僕も〝ロイちゃん～〟と呼んでみたいっ！　そこでは、ちなみにどんなこと聞きたいですか？

「そうだなぁ、奥さんに仕事のこと愚痴るのは、美学に反する？　趣味は何？　動物は何か飼ってるの？でも、仕事であれだけ心を込めて腰低くできるのはすごいよ！　ある意味NEXTだね〟みたいな」

――（笑）。では、せっかくの機会ですので、ロイズ氏へ伝えておきたいことがあれば、この誌面を通して伝えておきます。

「〝ヒーローたちのように華々しいイベントなどに連れて行ってもらえなくても、縁の下の力持ちで頑張っていこうねぇ。もう若くはないから、体に十分気をつけてさぁ〟」

――それでは最後に、疲れたサラリーマン読者に向けて、メッセージをお願いします！

「まずは、一番近くにいる人を幸せにできるよう努力していきたいですね。それがすべてのパワーにつながっていくはずだから」

――うわぁ！パワーもらえました、明日から頑張ります！

「（ロイズ口調で）イヤなら、辞めてもらってもいいんですよ…（笑）」

娘の子育てヒント

手際よくスマートに仕事をしながら子育てもするという最近流行りのイクメン・スタイルは素敵…、ですが、そうはいってもサラリーマンパパはとっても大変。特に年頃の娘さんの子育てに四苦八苦するパパも多いことでしょう。そこで今回、サラリーマンの代表として鏑木・T・虎徹さんに密着。イクメンとはかけ離れた生活を送っている虎徹さんは、どうやって娘さんとコミュニケーションをとっているのか？　そこから見えてきた、育児のヒントを探っていきます！　現代社会で生きるサラリーマンパパのみなさんも必見です。

子育てヒント 其の一　娘との約束は死守すべし（1話）

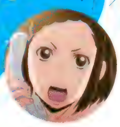
◀楓さんとの電話が至福の時間でもある虎徹さん。ニヤケた表情が物語ります

●虎徹さんは電話で「（スケートの発表会では）可愛い姿をちゃーんとこの目に焼き付けるからね！パパ、必ず行くぅ～♪」と約束したそうですが、その約束は果たせずじまい。突発的な仕事だけに、やむを得ないようにも思えますが…。

親が約束を守らなければ、約束を守らない子供に育つと言われます。しかし、大事な娘との約束が、絶対に休むことの出来ない仕事の案件と重なってしまう…。虎徹さんのように世のサラリーマンの方々に当てはまる人が多いのでは？　「仕事で行けないかもしれない」ということをしっかり伝えることが大事。そして、もし発表会に訪れ見届けることができたら「この目に焼き付けたよ、絶対に忘れないね」と約束してあげましょう。子育てもリスクマネジメントが大事です。

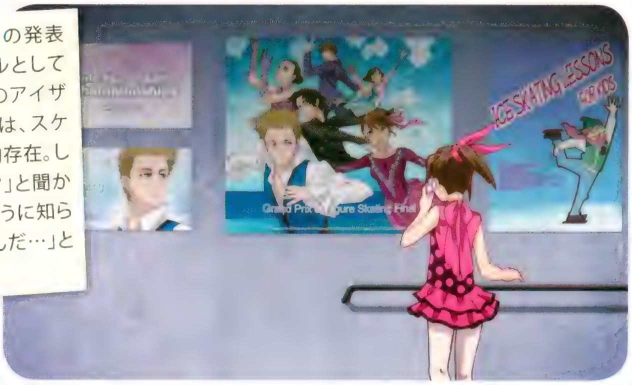
6つの子育てヒント

ちゃんとやってよね！



子育てヒント 其の二　娘の興味はしっかり熟知しておくべし（2話）

●フィギュアスケートの発表会では、看板のモデルとしても登場するほど人気のアイザック。楓さんにとっては、スケート界の"ヒーロー"的存在。しかし、いざ「知ってる？」と聞かれても、虎徹さんのように知らないと「へぇ、そうなんだ…」としか言えません。



▶ポスターに載るほど有名なアイザック。親としては押さえておきたい

親子の会話が希薄になっていると言われて久しいですが、それは親にも一因が。子供たちの"興味"が今どこにあるのか、はせめて知っておきたいものです。娘さんのその発言、もしかしたらパパの気をひこうとしているのかもしれませんよ。

今回のパパ

鏑木・T・虎徹さん

職業：サラリーマン
娘：楓さん

奥様を病気で亡くして以来、母親の安寿さんに一人娘の楓さんを預けて面倒を見てもらっているという虎徹さん。忙しいサラリーマンという職業上、つねに仕事へ備えておく必要があり、勤務時間や休みの日も不規則。そのため、楓さんとは別居状態で、なかなか会えない毎日を過ごしているのが悩みの種とか。

オトコの子育て!番外編!!

仕事に忙しいパパも必見!?

サラリーマンパパの

子育てヒント 其の五 娘の言動に落ち込まない (15話)

●楓さんから「話題が古い」、「つまんない冗談言うな」、挙げ句の果てには「髭がダサイ」と文句のオンパレードだと愚痴る虎徹さん。会社の後輩からも「確かに」と言われる始末で…。

▲虎徹さんの"娘トーク"を聞いてくれるのは良き後輩社員の方(右)とか

年頃を迎えた娘がパパのことをウザいというのは当たり前のこと。むしろ健全に成長していると誇らしく思うべきです。たとえグサッと傷つくことを言われても落ち込まないこと。むしろ笑い飛ばすくらいの余裕で構えておきましょう。

子育てヒント 其の六 娘の部屋に無断で入るべからず (17話)

▲本気で追い出される虎徹さん。それは、大人として認めてもらいたいあらわれかも…

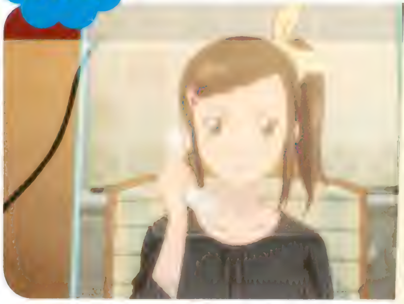
●まだまだ幼い娘といっても、10歳前後にもなれば立派なレディーです。ましてや無断で部屋に立ち入るのは父娘の信頼関係にも影響してしまいかねません。ましてやそんな場面を見つかってしまえば間違いなく「ヘンタイ」扱いされてしまうのは必至でしょう。

同じように、「パパと一緒にお風呂に入ろう」、「パパと一緒に寝るか?」といった幼少期であれば喜んでしてくれていたことも、当然のように拒絶されます。娘さんはパパが想像する以上に速いスピードで成長しているということを認めてあげましょう。

結論 娘との時間は大切に

親が考える以上のスピードで成長し、大人になっていくのが子供です。だからこそ、楓さんと関わりあえる時間を大切に過ごすのが何よりも大切です。たとえわずかな時間でも、ウソはつかず子供扱いせず時には正直に"大人の事情"も話してあげること。会話がまったくないよりも、多少言い合うくらいのほうが、お互いの理解がグッと深まるでしょう。

子育てヒント 其の三 子供扱いをするべからず



▲子供扱いされることに敏感な年頃の楓さん。パパに会えず寂しさもあるのでは?

●子煩悩でいつまでたっても、ついデレデレしてしまうパパも多いことでしょう。しかし、子供の成長スピードは親が思う以上に早いもの。褒めてばかり、子供相手の話し方ばかりでは、「いい加減、その話し方やめてよ!」とピシャリと言われてしまいます。

10歳前後ともなれば責任感もどんどんと芽生える時期。いつまでも子供扱いをしていては、子供の方が信頼されていないと感じることもあるでしょう。「すごいね～」と表面的に褒めるのはやめて、子供のことを信じて任せることも必要ですよ。

サラリーマンパパから見つけた

子育てヒント 其の四 娘へのプレゼントは徹底したリサーチを (10話)

●楓さんが大事にしていた"ぬいぐるみ"をなくしてショックを受けていると聞いた虎徹さん。これはチャンスと、巷で流行りのマッドベアのぬいぐるみをプレゼントに準備。しかし「あれだけはやめてね。可愛くないから」と渡す前から拒絶されてしまったようです。

▲娘から「コレジャナイ」と言われる虎徹さん。心中お察しします

子供には流行っているものをプレゼントすれば喜ぶという考えは大きな間違い。子供にも好き嫌いの好みがしっかりとあります。普段の会話から、子供の好みをさりげなく聞いておくことも大事ですよ。

ヒーローそれぞれに魅力的な特徴が光る『タイバニ』の中で、
ただひとり異彩を放つ孤高の存在ユーリ・ペトロフ。
この特集では謎に満ちた彼のこれまでの半生を追いつつ
オンとオフの深淵へと迫る。

ペトロフ

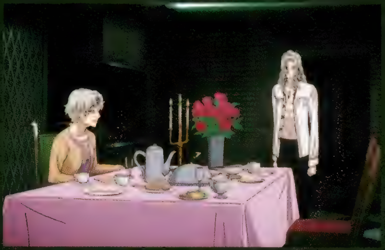
ユーリという司法局勤務の男――

ユーリの初登場

実は1話のワンシーンに見切れていたユーリ。折紙サイクロン以上の見切れ職人ぶりだった。

スーパールーキーへの期待

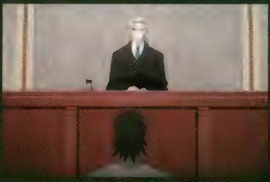
悪に対して恩情をかけないバーナビー。自分と同じ匂いを感じ期待をかけるユーリだったが…。



母親オリガと2人暮らし

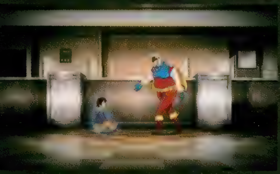
精神を病んでいるオリガ。2人のあいだに会話は成立しない。

シュテルンビルトの中枢部・ジャスティスタワーにある司法局に勤めるユーリ。言わば役人という安定した職業に就いており、その仕事内容はヒーロー管理官兼裁判官。職業ヒーローたちの“業務”を監査、犯人捕獲に伴って破壊した公共物の状況などを精査し、必要に応じて裁判官として“ヒーローたちをも裁く”仕事だ。スーツはいたって地味だが、ロン毛にド派手なネクタイの柄がアクセントに。



ユーリの凄絶な過去

Mr.レジェンドと虎徹



ハンドレッドパワーを制御できず、他人を傷つけてしまうことを恐れていた少年時代の虎徹。だが、その力でMr.レジェンドを助け諭されたことで、人を助けるヒーローになる夢を抱く。

父の教えが“正義”の発端

幼少期は優しい両親と幸せな生活を送っていたユーリ。「悪い奴を見かけたら見て見ぬふりをしてはダメだぞ」と諭す父こそ、伝説のヒーローMr.レジェンドだった。尊敬する父の言葉を胸に、ユーリは正義を胸に刻みこむ。

遊佐浩二さんと語らう ユーリさんの私生活 その1

――遊佐さん、ここではユーリの私生活を探るお話を伺います。もしユーリと飲みに行くならどこでどんな話をしたいですか?

「これは、僕がチョイスするよりもユーリに合わせるしかないと思うんですが、ほぼ間違いなくカウンターのあるバーでしょう。バーのカウンターで並んで飲むしかないですね。そして、多分仕事の話しかしないでしょう。きっと、本心は絶対言わないと思います」

――むむ…それは退屈ですね。

「疲れると思います。今想像するだけでちょっと疲れましたもん。彼は自分の正義を遂行するために、人生のすべてを費やしていますからね。多分プライベートなんかかなぐり捨てて生きていると思いますから…おそらく、2人で飲むだけでもすごく貴重な時間だとは思います。だけど、なんにも交わらないで終わります。間違いなく」

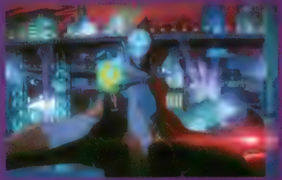
――例えば、赤ちょうちんのお店に誘うとかは?

「ユーリって温かいものを食べているイメージがないんです。おでんを食べてるユーリなんて想像できないでしょう。温かいもので口にするのは…コーヒーぐらいじゃないでしょうか」

その男、ユーリ・

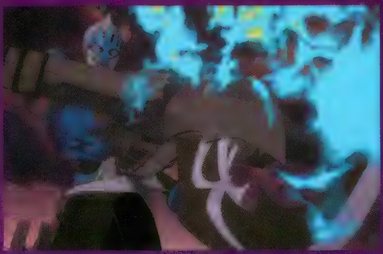
ルナティックという闇の断罪人――

死刑制度のないシュテルンビルトにおいて、殺人を犯した者に対しては死をもって断罪する闇の存在。彼の“罪は死をもってのみ償える”というある意味で偏狭な正義心は、幼少期の経験がベースになっている。ルナティックを象徴するマスクのデザインは、自らの正義を貫く信念を表しているのか。



超高温度の青い炎を武器

能力は高温度の炎。一般的に色温度は赤く白く青。強力な炎をボウガンに纏い、遠距離から的確に打ち抜く。



ヒーローの正義を侮辱

ヒーローたちに対しては「愚か」と挑発を続け、「ヒーローの正義など偽りの正義」と吐き捨てる。

虎徹との対決

自らの正義と全く対極の考え方をするのが虎徹。しかし正義を貫く信念の強さはもしかしたら同等なのかもしれない!?

遊佐浩二さんと語らう その2
ユーリさんの私生活

――では遊佐さんが想像するユーリの私生活は?

「仕事以外の普段の生活ですか? 彼の私生活は何にもないと思います。テレビを見るでもなく、ニュースを見るでもなく…とにかく彼はちょっとでも空いた時間があれば〝悪〟を探していると思います。もうずーっと検索検索検索だと思います」

――悪の検索を…(ゴクリ)

「あとはマスクとかの修理をしていたり。絶対に斎藤さんが作ったスーツよりもダメージを受けやすいですから。いや…スーツというか、普通にただの仮面ですからね。スーツとしての機能はないと思います。僕は、ルナティックの衣装(マント)は紙なんじゃないか、と思っているんですよ。ラジオ(星空サンライズ出演時)でも、〝じゃんじゃん燃やしてますけど、大丈夫ですか?〟って質問が来たので〝紙なので大丈夫です〟と説明しました。きっと「~事件捜査本部」とかの張り紙で書いた残りを再利用していると思います。彼にスーツを開発するだけの能力かどうかは未知数ですからね。」

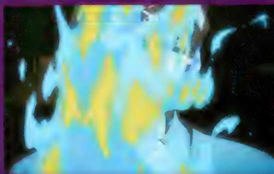
――エコでもある、と。なるほど、少しユーリの私生活が垣間見えたような気になりました。遊佐さん、ありがとうございました!

Mr.レジェンドとユーリ

父Mr.レジェンドは尊敬する存在だったが、アルコール依存症とエスカレートするDVによってもはや見る影は無し。Mr.レジェンドは死の間際、燃えさかる右手でユーリの顔面を掴み生涯残る傷跡を遺す。

ユーリの運命が正義を狂わせる

能力減退に苦しみ、酒に溺れる毎日を送るMr.レジェンドは家庭で毎日のように激しい暴力を振るうように。やがて母を苦しめ続ける父こそ“悪い奴”に。ユーリはかつての“父”の教えに従い、見て見ぬふりをすることをやめた。



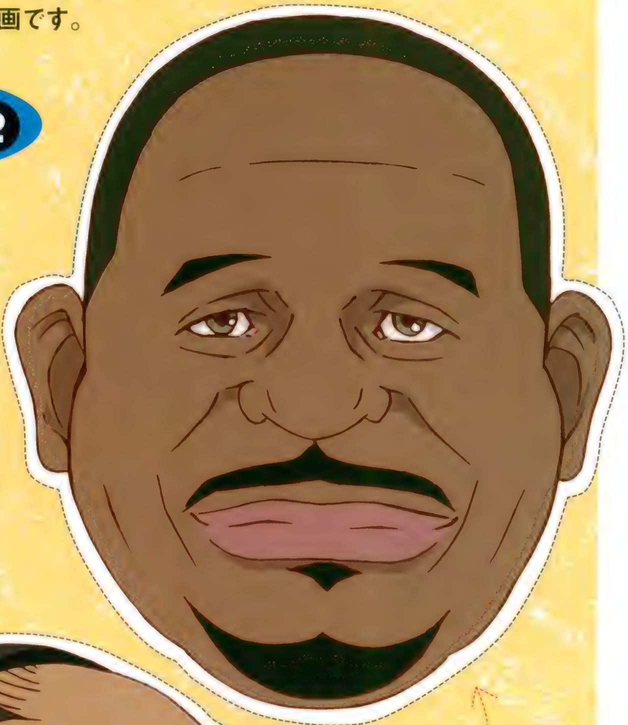
遊ぼう！ TIGER&BUNNY

最後は『タイバニ』で遊ぶ付録企画です。
ってことでTV Bros.お気に入りキャラの3人が登場！ 遊べるページを彩っていただきました。名言で振り返ってもよし、切り離して遊んでもよし。『タイバニ』の魅力を、「福笑い」と「折り紙」という日本古来の遊びを通して味わう大胆な付録企画です。

遊ぼう！❶❷ ベン・ジャクソン＆斎藤さん名言福笑い

遊ぼう！❸ 折紙サイクロン名言折り紙

手裏剣
完成図



ベン・ジャクソン
完成図

斎藤さん
完成図

遊ぼう！
TIGER&BUNNY
1

ベン・ジャクソン名言福笑い

遊び方

福笑い（ふくわらい）は昔から伝わる日本の伝統的な遊びです。それぞれのパーツを切り取り線に沿って丁寧に切り取ります。目隠しをして顔のパーツを並べ、出来上がった顔の完成度やおもしろさなどを競って遊びます。楽しいよ！

遊ぼう!
TIGER&BUNNY
2

斎藤さん名言福笑い

折紙サイクロン 名言(見切れ)折り紙 ～手裏剣編～

遊ぼう! TIGER&BUNNY ③

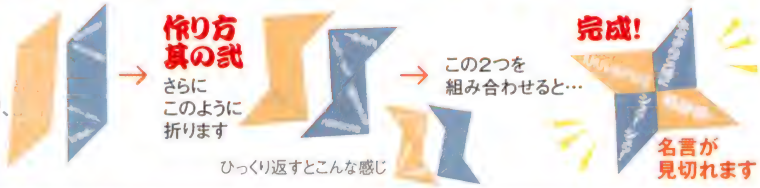
作り方 其の壱
半分に切って、縦に半分に折り、

作り方 其の弐
さらにこのように折ります

ひっくり返すとこんな感じ

この2つを組み合わせると…

完成!
名言が見切れます



下の折り紙を切り取って(コピーして使おう!)、作り方を参照にして、手裏剣を折ってみよう。折り方にちょっと工夫が必要だけど、上手に折って爽快、投げて遊んでも楽しいですぞ。もちろん、手裏剣以外の折り紙で楽しむのもOK!

ござる!
シュッ!シュッ!
皆さんもご一緒に
かたじけない!

イワン・カレリン見切れ名言

あぁ、帰りたい…

僕も手裏剣の手入れが…

僕なんてヒーローを辞めるべきなんだ!

ミステリアスって言うか…

…ずっと待ってるから

僕が通っていたヒーローアカデミーで
すっごく注目されていましたから…

見た目はコピー出来ても、
能力までコピー出来ないんです

だって、僕、いつも見切れてるだけだし…
…今度取り入れてみようと思うんだ

出来の悪かった僕とは違って…
きっと、ヒーローの信頼を
一番必要としてるのは、僕なんですよ。

ヒーローにとって一番大事なのは企業へのアピールだ! カメラに見切れる時はロゴを[illegible]て
できるよ! わかったかい?

じゃ!
ごっつぁんです!

見切れたり!!
百年目!

上手に切り取るでござる

TV Bros.特別編集

TIGER & BUNNY公式総括ファンブック

SUM UP!! TIGER & BUNNY

TOKYONEWS MOOK 通巻393号

平成26年1月20日発行（平成26年1月11日発売）

定価 本体1000円 +税

編集長／菅野大輔

構成・取材・執筆・企画・編集／山本泰行（ものかきや）

編集サポート／宮田カヲル

デザイン／土田伸路（dESign cUE iNc.）

高井憲一郎（dESign cUE iNc.）

表紙イラスト／作画:羽山賢二

仕上:斎藤麻由

3DCG:畠中雄志（TRICK BLOCK）

フィニッシュ:永井留美子

協力／株式会社サンライズ

バンダイビジュアル株式会社

編集人／石川究

発行人／田中賢一

発行／株式会社 東京ニュース通信社

〒104-8415 東京都中央区銀座7-16-3 日鐵木挽ビル

編集部／☎03-6367-8026

販売部／☎03-6367-8095

印刷・製本／大日本印刷株式会社

Printed in Japan

©SUNRISE/T&B MOVIE PARTNERS

©SUNRISE/T&B PARTNERS

©東京ニュース通信社2014

本書の写真、記事の無断転写、転載を禁じます。

乱丁、落丁本は送料小社負担でお取り替えします。

小社販売部までご連絡ください。

TV Bros. 2012年7月21日号 Not For Sale

TV Bros.
2週間TV番組 テレビブロス
7.21
>>> 8.3
TIGER & BUNNY 描きおろしSPポスター!
ま・る・は・だ・かの25年!
ライジング!

ワイルド!
わいるど

くーる
クール!

TV Bros.特別編集　TIGER & BUNNY公式総括ファンブック

Sum Up!! TIGER & BUNNY

TOKYO NEWS MOOK

定価 本体1000円 +税

雑誌 64844-97

©SUNRISE／T&B MOVIE PARTNERS
©東京ニュース通信社2014

印刷／大日本印刷株式会社

平成26年1月20日発行

ISBN 978-4-86336-358-8
C9474 ¥1000E

9784863363588

1929474010003